

て、縦横に切つて廻り、萬死に一生を得れば、武運の盡きざる所ぢや。却つて面白い血氣の有村は、忽ちに同意した。

やがて、月照の乗つた轎は、捕吏の中を抜けて、西郷が、先きに立ち、俊齋が、後を護つて、奥の方へ通つて、廣い土間の中央へ、轎を下ろした。捕吏は、頻りに眼を光らして、西郷を見詰て居た。西郷は、平然した顔で、重助を相手に、京都の事などを、話合つて居る。有村は、捕吏の舉動に注意して、少しの油断も見せなかつた。

「重助……重助」と、轎の内から、月照の聲が聞える。重助は、すぐ傍へ寄つて、

「何ぞ御用で御座いますか」

といつて、用事を尋ねるのであつた。

「重助……薬を一服……」

「只今さし上げます」

小盆の上へ、薬包と湯呑を載せて、轎の垂を揚げ乍ら、そつと差出した。月照の細い手が出た時は、西郷も有村も、はつと思つて、捕吏の様子を見ると、幸ひに氣が付かないやうであつたから、漸く胸を撫で下した。

戶外からいつて来たのは、旅装の婦人と、お供が一人、西郷が見ると、此婦人は、鶴飼吉左衛門の妻であつた。これは悪いところで、逢つたとは思つたが、今更に仕方がないから、鞋を脱いで上へあがり、それから便所へはいつた。

四

西郷は便所へはいつて、しばらく時刻を送つて居るのは、鶴飼の妻に逢はぬやうと、只だそれだけで、西郷の雪隠詰めは、随分面白いことである。如何に西郷でも、臭い所に、長居は出来ぬ。既うよからうと思つて、便所を出

た。手を洗つて居るところへ、障子を開いて出て来たのは、矢張り鶴飼の妻である。失敗つた、未だ居つたかと、顔をかくしたが駄目であつた。

「おや、貴君は」

「これは、御内室では御座らぬか、何れへお出になりました」

「先頃から用事がありました、江戸表へまゐりましたが、漸く用事も相済みまして、只今立歸るところで御座います」

「は、ア左様で御座つたか」

「西郷様には、何れへおこしになります」

西郷は、思はず口を閉ぢた。自分の名をいはれて、はつとしたが、幸ひ捕吏には、それが聞えなかつたやうであるから、胸を撫下したが、京都に、重大事件が起つて、薩摩へ立退くのだ、といふことは、今いふ譯にもならず、また吉左衛門の身に、斯ういふことが起つて居る、ともいへず、氣の毒だとは思つても、兎に角、この場を胡麻化して、はやく立去らせるか、左様でなければ、自分の方が、此家を出て行く外はなかつた。

「實は大和巡りをいたすつもりで、それに伴の者も御座るで、失禮いたすが、俺どんが、此處で逢ふたことは、内聞に願ひ度い」

「それは、よう心得て居ります」

「然らば、失禮いたす」

「御機嫌よろしう」

西郷は以前のところへ戻つた。

「さア、行かうか」

「まゐらう」

轎を擔がせて、捕吏の中を、ズーツと通り抜け、伏見の方へ行く。捕吏は、終に一言も咎めず、無事に通して仕舞った。

轎は、伏見の船宿へ着いた。

有村が、先きへはいって、船の相談をする。月照は、轎に乗った儘、奥まで通された。斯うした事は、常に在るのであるから、宿のものは、別に不思議とも思はぬ。高貴の身分の人は、よく斯ういふ事を爲るのであつた。

『おはやいことで御座います。未だ船にはお間がありますから、御ゆつりとお休み遊ばせ』

と、挨拶をして、宿の主人は、行つて仕舞つた。

跡で、西郷は、月照に向つて、

『突然申上げては、定めて意外にも思はれやうが、實は、京都を出る時より、斯う考へて居りしことゆゑ、その覺悟で、お聞き取りを願ひたい。俺とんは、これより京都に引返へし、總州の擧動を見て、同志の落着も見届て、更に跡より追ひ付き申しますれば、兎も角、有村を伴れて、大阪までお出であり度く存じます』

月照は、意外な西郷の一言に、何と答へも出なかつた。俊齋は、之れを聞くと、詞はげしく反對した。

『それは、どういふ理由か、この場に及んで、卑怯ではないか』

『決して卑怯ではない。同志のものが如何なつたか、といふことさへ見届けずに、國元へ逃返つた、といはれては、男子の恥辱であるから、兎に角、事件の成行を見定めてから、すぐに逐付くつもりぢや。あんたは、上人を、大阪に送り、吉井を招んで、萬事を依托してくれ。必ず吉井は、上人の爲めに、盡力してくれるであらう。萬一にも、俺とんの歸るのが遅れたら、あんたは、上人の御供して、途中から肥後へ入り、長岡監物に、上人を托して、あんたは、一人で國元にかへり、藩論を確かめた上で、更に上人を、迎へに行くのぢや。何分ともに頼入る』

西郷の意見を聞いて、今更ら反對も出来ず、有村は、終に承知した。

五

そのうちに、出船の支度が整ふた、といふ報知があつた。西郷は、月照の一行が、船へ乗り込むのを見届けて、すぐに京都へ、引返へした。月照も、有村も、西郷の姿が、見えなくなる迄、延上つて、眺めて居た。

俗に、三十石と稱へて、淀川を下るのだが、午時に、伏見を出て、夕暮には、大阪の八軒屋へ着く。客扱ひも荒く、船頭は、いけぞんざいな口を利くので、有名な船である。併し、昔の乗合船の面白さは、又た格別なものであつた。口から税が出ない、と思ふて、勝手な熱を吹くものばかりで、先づ町内の娘の評判からはじめて、お奉行様の調べ口や、さては聞くに堪えぬ、淫猥なはなし迄、憂ひも辛らも忘れて、今の汽車の内よりか、乗合船は、實に面白

いものであつた。

月照も、俊齋も、時々微笑をもらして、馬鹿囃しを聞いて居る。彼是れ、日の暮れ合ひに、船は、八軒屋へ着して、乗合の人々は思ひ／＼の方角へ、立ち去つた。月照の一行は、兎に角、食事をしようと云ふので、附近の茶屋へはい

つた。

俊齋は、直ぐに手紙を認めて、使を、吉井へ出した。やがて食事を終つた所へ、はいつて來たのは、吉井幸輔であつた。吉井は、大阪の薩邸に、留守居を勤めて居たが、宮内次官になつた、友實が、此人である。

『ヤア、有村か、火急の用事とは、何か』

有村を見て、吉井は、すぐに座敷へはいつたが、上席に、立派な僧侶が居るので、席に着いた儘、黙つて居る。

有村は、先づ月照を紹介した。

『月照上人ぢや』

吉井は、少し驚いた容子で、

「はッ、貴僧が、お上人で御座つたか」

「初めて御目にかゝりますが、西郷様から、よく伺つて居りました」

「吉井幸輔と申します。此上とも宜しくお願ひいたす」

有村の方へ、向直つて、

「而て、用事と申すは、何事か」

「矢張り、上人のお身についてぢや」

「一應承はらう」

「實は、落人の御身分ぢや」

「えッ、落人とは……」

これから、有村は、京都の狀態を語り、これきり、國元へ御供をするのだ、といふ事情迄、くはしく物語つた。

「西郷どんは、跡からまゐるといふのか」

「左様はいふて居たが、火の中へ、飛込んで行つたのぢやから、火傷位はいたすに違ひない。跡から來るとはいふて居たが、あまり的にはならぬよ」

「なる程」

「此上は御互で、引受ける外はあるまい」

「よし、承知いたしました」

「引受けてくれるか」

「大阪を立退るゝ迄、引受けよう」

「それは添けない」

「それにしても、此家に、長居は宜しくない。兎に角に、藩邸へ參られたら、よからう」

「是非、さうして貰ひ度い」

「俺どんは、これから藩邸へ歸つて、更に迎をよこす事にいたさう」

「左様か」

相談が終つて、吉井は、藩邸へ歸つた。

これで、月照も、少し心が落付いた。吉井の人柄を見て、先づ是れならば、大丈夫と思つたらしい。

しばらく待つて居ると、吉井から迎ひが來た。月照は、俊齋と重助を連れて、大目橋筋の吉井方へ、移る事になつた。吉井は、藩邸へ、案内するつもりであつたが、種々の都合を考へて、自分の宅へ、案内する方が、跡の累が無くて可い、と思つたのである。

吉井が、思ひの外に、腰を入れて、世話を爲るらしいから、有村は、頗る安心したが、それにつけても、西郷の身の上が、心配になつて堪らなかつた。

そこで、有村は、京都へ引返して、西郷の容子を見届け、且は事件の成行も、くはしく知つて來たい、といひ出した。

大阪迄來て、また、有村が、居なくなる事は、月照の身に取つて、甚だ迷惑であるが、さればとて、自分には、吉井といふ保護者があるから、之れを拒み得なかつた。殊に、西郷の事も心配にはなつて居るのであるから、有村の引返す事に、同意する外はなかつたのである。

「京都へ、お着なされましたなら、成就院へ、御立寄を願ひ度い、が、いかゞでありますか」

「造作もない事で御座る。而て用件は、どういふ事でありますか」

「只今、書狀を認めますれば、それを御持參下されて、近藤正愼と申す家來へ、御手渡しを願ひます」

「承知いたしました」

「序に、愚弟の信海にも、お逢ひ下されて、此事情を、お傳へ下され」

「必ず御傳へ申す」

「何分宜しく、お願ひいたします」

「然らば、御免蒙ります」

有村は、吉井に逢つて、猶ほ月照の事を頼んで、京都へ引返した。

近藤正愼は、丹波の生れて、栗山瀬平と云ふ人の件であつたが、成就院に来て、一度は月照の弟子となり、佛門の人となつたが、月照の退隱と共に還俗して、今では寺附の家來に、なつて居るのであつた。

六

鍵直の夫婦は、西郷から申付けられて、代るく外へ出ては、世間の評判を搜つて居たが、月照上人の行方が、判らなくなつたといふことも、忽ち知つて、それが、西郷に關係あることも、略ぼ察し得たから、可成く西郷に關する事は、聞き遁さぬやうにして居た。此事件について、鍵直夫婦が、西郷に盡したことは、實に涙ぐましいほどであつた。

一日の事であつた。鍵直は、慌立だしく歸つて來たが、

「先生、大い事になりましたよ」

と、いひ乍ら、西郷の座敷へ、飛込むやうにしてはいつた。

折柄、西郷は、眠りを催して、手枕で横になつて居たが、この聲に、起き直つた。

「何事か」

「近藤正愼さんが、縛られて行きました。人の噂では、月照さまの御舍弟、信海さまも捕まつた、とか云ふことですが、それに又た浪人の方々に、名高い人は、皆んな捕かまるんだとか云ふので、市中は大變な騒ぎで御座います」と、呼吸もせはしく、鍵直の語るを聞いて、西郷は、不思議に思つた。

浪人が捕まるのは、豫て承知の上であるが、正愼や信海までが、どういふ理由で捕まるのか、それが少しも解らなかつたのである。

假りに、月照の行方が不明になつた、としても、それが爲に、僧侶の信海まで、捕まへるのは亂暴である。だんだん考へてゆくと、或は自分に對しても、嚴重に搜索の手が、廻つて居るかも知れない、とも思はれたから、たとへ夜間でも、自分の外出は、よほど注意しないと、これは危険である、と考へた。

「こんな騒ぎになつたのは、どういふ事情ですか、恐しい世の中になりましたな」

鍵直は、幕府の手口が、あまりに峻酷であることを、憤慨して居るらしく、しきりに西郷へ、何か問ひかけるのであつたが、西郷は、それに答へず、ぢつと考へ込んで居た。

所へ、鍵直の妻が、やつて來て、

「有村さまが、おいてになりました」

と、いふのを聞いて、鍵直は、

「お前は、何といふ阿呆ぢや。西郷さまは、居らぬ事になつて居るのではないか」

「だつて、有村さまは、よく知つて居られるのですから、お断りは聞きませんよ」

夫婦の争ふのを抑へて、西郷は、案内させる事にした。

やがて、有村は、案内されて來た。

『有村どん、どうして参られたのか』

『ちと、心配の事があつてぢや』

『えッ、何事が起つたのか』

『否、あんたの事が、心配になつたのぢやよ』

『ば、ば、莫迦な事を……』

有村が、思慮に浅いことは、よく知つて居るが、大切な月照を、どうして置いたか、先づ其れが心配になつた。

『上人は、どうなされたか』

『吉井に預けて参つた』

『左様か、吉井が引受けてくれたのぢやな』

『左様ぢや』

『それならよいが、どうして、返つて来た』

有村が、答へに躊躇するのを見て、鍵直夫婦は、席を外して、階下へ行つた。

跡は、二人の差向ひになつた。

『大阪から、此處へ眞ッ直に、まゐつたのか』

『イヤ、ちよツと寄道をして来た』

『どこへ……』

『成就院を訪ねて来た』

『正愼は、居たか』

『居らなかつた』

『信海は……』

『それも居らなかつた』

『どうして居らなかつたか』

『捕へられた、といふ事ぢや』

『成就院へは、何の用事でまゐつたか』

『上人から、頼まれて……』

二人の話が、これから進まう、とした折柄、鍵直の妻が、階梯段を、足音荒く、かけ上つて来た。

『西郷さま、た、た、大變で御座います』

『どういたしたか』

『主人は、只今連れて行かれました。あなたは、早く逃げて下さい』

と、いつて、窓の方を、指さして居る。

事、急に迫つて、此上の事情を聞く暇はない。二人は、窓から飛出して、屋根傳ひに遁れてしまつた。

その跡で、鍵直の妻も、連れて行かれたが、此事件で、入牢中に、鍵直は、拷問にかけられて死んだ。

西郷と有村は、捕吏の手から遁れ、這々の態で、大阪へ歸つて来た。月照は、二人の顔を見る迄は、非常に案じて居たが、無事に歸つて来たので、大に喜んで、京都の様子を聞けば、前に述べた通りであるから、更に驚いた。

『それでは信海や正愼までが』

流石に、月照の眼には、涙が見えた。

『もう致方がない。これからは、一刻も早く、此地を遁れる事にしよう』

と、西郷は、吉井を、藩邸へ迎ひにやり、出立の支度を取掛つた。

吉井は、間もなく駈けつけた。

『上人が、いろ／＼お世話になつた』

『充分の事は出来なかつた』

『これから、出立する事に致さう』

『左様か』

吉井には、京都の様子も、くはしく語つた。聞いて居た吉井は、兩人の無事を喜んで、前途に、充分の注意まで、爲てくれた。

『出立するとしても、夜がよからう。晝は、避ける事にしたら、どうか』

『無論、夜の方が、よい』

『時に、北條右門が、来て居るから、伴れて行つたらどうか』

『うむ、北條が行つてくれたら、此上もない好都合ぢや』

『それでは、迎ひにやらう』

『どうか、頼む』

北條は、前に村山松根と謂つて居た。嘉永の近藤崩れに際し、藤井良節と前後して、脱藩の後は、黒田家の保護をうけて居た人であるが、姓名を改めて、國事に奔走して居たのである。

北條は、沈着にして膂力すぐれ、一刀流を、よく使つたので、此一行に加はつてくれる事は、萬事に好都合であつた。殊に、福岡の事情にも明るく、有村一人では、力弱く思つて居た折柄であるから、喜んで迎へる事にしたのであつた。

北條も、やがて此列に加はり、一同は、土佐堀の藩邸に、引上げる事になつた。

吉井の考へでは、小倉船を仕立て、土佐堀から川筋傳ひに、天保山の沖へ出よう、といふのであつた。藩用の小倉船なら、たとへ捕吏に向はれたところで、どうともいひ抜けは出来るから、極めて安全である。吉井と同役の平田伊兵衛が、幸に同情してくれたから、すべてが都合よく運んだのである。

月照、西郷、有村、北條の四人が、藩邸へ来た時は、既に日が暮れて、人顔のはつきり判らぬ頃であつた。前に歸つた吉井が、もう船の支度を爲せて、待つて居たので、一行は、すぐに乗込んだ。

月照は、俊齋重助と俱に、蓬の下にかくれ、西郷と北條とは、甲板にあつて、太刀を擁し、四方を睥睨して居る。吉井は、陸上に在つて、追捕の役人を、遮る爲めに、徘徊して居るのであつた。今、船を出さう、とした所へ、幕吏が二名やつて来た。吉井は、可成り河岸を離れるやうにして、その容子を窺つて居る。

『この河に、小倉船があると申すが、何れぢや』

之れを聞くと、吉井は、幕吏を遮つて、

『この河岸通りには、小倉船は御座らぬ。他の河岸について、お尋ねなされ』

『いや、誰かに有ることを知つて、まるつたのぢや』

『黙れッ、苟も武士たるものが、無いと云ふのに、強ひて有ると云ふは、奇怪至極ぢや。薩摩邸の河岸に、小倉船の有る可き筈がない』

右の手は、刀の柄にかゝつて、居合腰になつて居る。いざとなれば、すぐにも抜放つの舉動であつた。幕吏は、じり／＼後へさがりながら、

『無ければ無いで、宜しい。左様に御立腹なさるには及ぶまい』

と、逃ぐるやうにして、立ち去つた。

月照は、吉井の怒鳴るのを耳にして、胸の動悸を抑へながら、有村に向つて、

『何事が起りましたか』
と尋ねた。有村は、率直に、
『左様、幕吏と吉井と争ふて居るのでせう。未だ船の出ぬうちから、此容子では、前途は、實に思ひやられる。萬一我等は、此場に踏み止まつて、切死するまでも防ぎはいたすが、上人は、その間に上陸して、薩摩邸に入り、留守居役平田伊兵衛と申すものを訪ねれば、如何やうにもして呉れませうから、御安心なされ』
と答へた。

斯うした場合にも、西郷は、只だ黙々として居るばかりであつた。

『西郷どん、船子を急がせたまへ』

と、吉井が叫んだ。西郷は、船子に向つて、

『はやく船を出せ』

と、いふた。船子は、最前からの状況に、疑ひを有つて、何となく薄氣味悪くなつたので、

『船を出すのは、ようがすが、橋が多うがすから、夜分は、どうも危ねえてな』

『だまれッ、これは夜船ではないか、はやく出せ、出さんか』

西郷の眼玉は、びかり／＼と光つて、何となく怖ろしかつたので、船子は、ぶる／＼になつて、恐れ入つた。

『よろしうがす、出します、出します。どうぞ御勘辨なすつて……』

船は、河岸を離れて、船子は、一生懸命になつて、漕ぎ出した。

二十三夜の月は、漸く東の山を離れて、すかし見れば、追ふて来る船もなかつた。その夜は、天保山の葦蘆しげき

ところに、船を繋いで、夜の明けるを待つた。
難波江や蘆のさわりはしけくとも

七

なほ世のために身をつくしな
ん
これは、月照の詠んだ、和歌である。

夜の明くるを待つうちに、東の空が、白くなつて來たので、船を出した。此日は、天氣も麗にして、風清く、波も平らかに、従つて、船足も軽く、矢の如く進む。

月照の歌に、

追風に矢を射る如く往く船は

はやくも事を果してしかな

と云ふのがある。

その夜は、室の津に着いて、夜を明してから、發することになつた。翌朝は、努めてはやく、海上へ乗出したが、昨日と異つて、風が起り、波も荒れて、船は、男波女波に掀弄れ、山國に人と爲つた、月照と重助は、生體なきまでに眩倒れて、前後を知らぬほどであつた。そのうちに、追風に變つたので、氣分も癒り、船も進みは速く、馬關へ到着することは、存外にはやかつた。

薩摩の定宿で、薩摩屋と云ふのがあつて、これへ、一行は泊ることになつた。先づ入浴を済ませ、船疊の疲れを休めて、西郷は、高崎善兵衛を呼びにやつた。高崎は、勤王家の一人で、まことに親切な武士であつたが、一ぱい飲ると不可ない。飲まなければよい人だが、飲むと必ず、やり損ふといふ、不思議な人物であつた。俗に謂ふ酒亂とてもいふのであらう。東京府知事を勤めた、高崎五六の實父である。

けれども、酔つての上の失策は、醒めた跡になつてから、申譯の出来るものであるが、下戸が、餅菓子の上のやり

損なひは、申譯の出来ないものになつて居る。

「エーイツ、西郷どんは、いづれかな、エーイツ……こらア、誰れか取次がんか、無禮な、や、や、奴だ。こらア、何とか云はんか」

宿屋の男女も、高崎の酒癖には、今迄に懲りて居るから、酔つて来た時は、可成く近寄らぬやうにして居た。高崎は、ひよろ／＼しながら、廊下をやつて来た。

西郷は、餘り名を呼ばれるので、障子をひらいて見ると、泥のやうに酔つて、高崎が来たのであつたから、これは場合が悪い、とは、思つたが、自分の方から、迎ひを出したので、今更に斷る事も出来なかつた。

「相變らず酔ふて居るな」

「イヨウ、これは西郷どん、如何ぢや。近來は、面白いこともないか」

着けた袴はダラシなく、腰板は、帯の下にさがつて、大小は、後の方へまはつて居る。何とも評の出来ぬ體裁で、づか／＼座敷のうちに、はいつて来た。高崎は、四方を見まはして居たが、

「いやア、これは面白いぞ。た、た、大層綺麗な、ぼ、ぼ、坊主が居るな。こりヤア何ぢや。さ、西郷、オイ、西郷ッ」

西郷は、堪り兼ねて、

「これツ高崎……何を下らぬことを云ふか、だまつて居れツ」

「これは、け、け、怪しからんぞ、な、何で、だまれと云ふのか。そ、其譯が聞きたい。これツ、西郷どん、オイ、これツ」

西郷も、對手が、酔つ拂ては、いかんともしやうがないから、黙つて居た。月照も、止むを得ず、微笑を漏して居る。有村と北條の二人が、頻りに焦立のを、西郷が制しながら、高崎の舉動を見て居ると、やがて、月照の前に、い

ろけて来たか、と思ふと、びたりと坐つた。

「これは、始めてお目にかゝる。拙者は、高崎ぢや。ぜ、ぜ、善兵衛と申すものぢや。失禮で御座るが、一杯献上致す」

といつて、盃を献した。

「愚僧は、一向に飲めぬ方であるから、どうぞ、御ゆるし下さい」

「それでは、酒でなく、エー何とかいつたな、ハツハ、、、、磐若湯だ。さう／＼、はんにや湯を一杯、そ、そ、それならよからう。さア一ぱい、呑つしやい」

月照も、これには困つて、頻りに辭退するが、高崎は、ます／＼募つて、悪勸めをする。西郷も、今は見兼ねたので、立上つて之を抑へよう、とした途端に、高崎は手に持った徳利を振つたので、月照の頭から、熱燗を、ざつぷりかけた。驚いて起つ月照、高崎は、何が面白いか、アツ／＼笑つて居る。氣逸の有村は、善兵衛に飛付いた。

八

西郷は、月照を次室にうつして、座敷へ来て見ると、有村と北條が、高崎を組伏せ、刀の下緒を取つて、縛して居るから、西郷は、笑ひ乍ら、見て居るうちに、とう／＼縛り上げて、布團へ、ぐる／＼にまいて仕舞つた。洗石の高崎も、手足の自由が叶はぬから、往生して縛られながら、只だ口先でばかりで、威張つて居る。それにも構はず、縛つた儘に、轉がして置くと、いよ／＼酔が廻つて、終には高野で、よく寝入つてしまつた。三人は、互に顔を見合せ、高崎の寝顔を見て居たが、

「酒の氣さへ無くば、あつばれ物の役にも立つ可き武士ぢやが、斯う酔ふては、實に致し方が無い」と、嘆息をする西郷を慰めて、有村と北條は、月照の居るところへ、来て見れば、月照は、流石にやさしいもので、

高崎の無禮を、怒る様子はなく、相變らず經文を、讀誦して居た。兩人から、高崎の無禮を詫て、前途の事などを語り乍ら、其夜は、一同に枕を列べて寝た。

高崎は、白河夜船で、グツスリと寝込で、夜が明けてから、眼が覺めると、體が窮屈で、少しも動けない。そればかりでなく、妙に體が痛いから、轉がりながら能く見れば、自分の體は、至て布團に括まつて、堅く縛られてある、どう考へても、譯が解らない。座敷の状況を見れば、屢々来たことのある、薩摩やの座敷に違ひないが、その薩摩やに、何て縛られて居るのか、それがさつぱり解らないのだ。人を呼ぶのも氣が利かないから、だん／＼考へて見れば、少しづつ思ひ出した。手紙の来たことあるが、その手紙は誰れのものか、どういふことが、書いてあつたかは、覺えて居ない。やうやく西郷に、逢つたことは思ひ出したが、西郷は、今ま京都に、居る筈であるのに、どうして歸つて来たか、また此地に、居るのが變だ。而て見れば、これは夢かも知れない。夢かと思へば、だん／＼記憶が、判然して来る。しばらく思索に、洗んで居ると、話聲が聞えるから、耳を欬てると、氣の所爲か、それは西郷の聲のやうだ。そこで、高崎は考へた。これは又失策か、俺は、もう酒を禁めようと、禁酒の覺悟が決して来た時、襖を開いて、はいつて来たものがある。見れば正に、西郷吉之助であつた。

高崎が、悄然て居るのを見て、
「どうぢや、高崎どん、大した元氣ぢやのう」

高崎は、面目悪るさうにして、無言つて居る。西郷は、傍へ寄つて、笑ひながら下緒を解いた。高崎は、いよ／＼口を閉ぢて、眞面目な顔をして居るだけに、尙ほ可笑しい。笑はれると、一層眞面目な顔をするから、
「昨夜は、大分酔ふて居たやうぢやな」

「いやどうも、相變らずで……御迷惑をかけたならう」
「格別のこともないが、あまり剛情を張つたので、有村と北條が、と／＼縛つた譯ぢやな」

何の偽言もなく、有の儘を、いはれるので、高崎は、ます／＼恐縮した。
「このたび、俺どんが同道いたしたのは、京都の月照上人ぢや。仔細あつて薩摩へ赴く途次、貴殿にも、一應紹介したい、と思ふてな」

「それは、何より望む所ぢや。可然御紹介を願ひ度い」
と、極めて眞面目に、挨拶をする容子は、昨夜の爲體とは、雲泥の相違である。西郷に誘られて、月照の部屋へはいると、正面に、威儀を正して、坐を占めたのが月照と、見るや、高崎は、兩手を突いて、頭を下げた。

それを見ると、有村や北條は、昨夜のことを思ひ出して可笑しいが、氣の毒で笑へなかつた。月照は、ニコ／＼しながら、

「西郷様をはじめ、有村様北條様にも、一方ならぬ御世話に相成り、漸くこれまでは、落ち延びましたが、これから先きは、一段のお世話になります。貴殿にも、何分の御助力を願ひ入る」

「御辭て恐入る。既に西郷どんより承はりました。不肖の拙者、力の及ばん限りは、盡力仕るて御座らう」
月照は、又た一人の味方を得て、その喜びは一と通りでない。西郷は、高崎に向つて、

「時に、高崎どん、斯うして此處に居るのは、危険の怖れがある。といふて、直に九州へ入るのも、實に考へものぢや。何れへか、一時、身を潜ませて、踪跡を晦まし、さらに日移してから、九州へ乗込むことに致したいが、名案はないか」

「良い事が御座る。これより西へ一里、竹崎と云ふところが御座つて、其處に、白石正一郎と云ふものが居る。生活も豊で、勳王の志も厚く、頗る義侠に富み、此近傍では、有志の一人として、よく知られて居る。此者に、拙者より談じて、上人を、隠匿申すやう致させてもよいが、どうであらうか」
西郷は、手を拍つて、

『それは、頗る好都合ぢや。左様の都合にして欲しい』
 有村北條の兩人からも、頻りに頼んだので、高崎は、すぐに白石方へ赴く事になった。
 跡には、一同が高崎の噂話で持切つた。酔ふた時と、酔はぬ時の違ひが、あまりにひどいから、お互に酒は成る可く、呑まぬ方がよからう等と、語り合つて居る所へ、呼吸を喘りながら、高崎は歸つて来た。
 『白石は早速の御承知で、お出迎ひ申す可き筈で御座るが、左様いたしては、人目を引くゆゑ、御遠慮申す、この事で御座つた』

西郷からは、その勞をねぎらひ、それでは出かけよう、となつた。

月照は、ます／＼喜び、何となく氣も浮いて来た。西郷は、膝を正して、一同に向つた。

『此一行が、同時に入國することは、頗る危険であるのみならず、俺ども、國元を出てから、既に半年あまりにはならうから、昨今の藩論が、どうなつて居るか、それも判らぬ。それに、齊興公も、御歸國の途中であるから、御跡を逐ふて、拜謁の上、御内意も承はつても置き度いのぢやが、どうか上人の御身の上は、御一同に御願いたしたいか、御承知下さるまいか』

と、考へた通りを、打明けた。これには、一同も異論がなく、殊に、大殿様の御内意を伺ふ、といふ一事は、西郷でなくては不能のであるから、忽ちに相談は定まつた。

月照の一行は、白石の宅を指してゆく。西郷は、すぐに九州へ渡り、齊興の跡を逐ふて、急ぎ行くのであつた。

九

月照の一行は、西郷に別れて、竹崎の白石方へ着いた。その夜は、久振りで安らかに眠り、旅の疲れも、幾分か休まつた。翌朝はやく起きて、顔を洗ふて居るところへ、主人正一郎の弟、廉作が、慌たゞしく駈込んで来た。

『大事が起りましたから、直に御出立の御用意を、願ひ度い』

正一郎は、之れを制して、

『理由も云はず、大事とは何のことやら、相分らぬではないか』

『これは、拙者の過失でした。その次第と申すは、昨夜來、馬關に止まり、形勢を見て居りしに、上人の一行が、彼の地を去られてから、彼れは、京都の月照上人である、との噂が立ち、追捕の幕吏は、之を聞いて、直に薩摩屋へ至り、取調べをなしたとのことを、儘に聞込みました。迂瀾に一日を過さば、事必ず露顯して、幕吏の手に捉へられるは必定の事ゆゑ、速かに此地を立去り、一刻もはやく、九州に入りたまへ』

と、廉作の語を聞いて、一同は、又もや此地を去ることかと、月照には、氣の毒と思へど、今更ら嘆つても詮のない事だ、となつて、北條は、正一郎に向ひ、

『賢弟、廉作氏の御働きに依つて、危急を知り得たことは、千萬謝するに詞もない。此上は直に出立の用意を致しませう』

『愚弟の申す所に依れば、こりや一大事に相違御座らぬ』

『道は何れへ取つて、宜しきか』

『これより船の用意をさせ、直に小倉へ御送り申さう。夫より先は、便宜の道を取り候らへ』

『然らば船の支度を……』

『心得ました』

白石兄弟は、席を立て、戸外へ出かけたのは、船の用意に行つたのである。

船の用意が出来て、兄弟は歸つて来た。

『お待ち遠で御座つた。船の用意は、もはや整ひました。お出かけなされ』

月照は、これまでに、一言も吐かず、一語も發せず、只だ、珠數をつまぐりながら、經文を默誦する外は、少しも餘念のない人であつた。出立する時になつて、改めて兄弟に向ひ、

「初めて御意を得て、意外のお世話に相成りました。お禮は、言に盡されず、時を得て、再び世に出ることもあらば、更めてお目にかゝります」

と、慇懃の挨拶に、兄弟も、坐に月照の境遇に同情して、涙を浮べた。

一行を乗せた小船は、はやくも、小倉へ着いた。白石兄弟には、此處で別れ、北條有村の兩人と、下男の重助と、都合三人を伴れて、博多へ向つた。

博多へ着くと、又々有村に、別れなければならぬ事情が出来た。行く先が、斯ういふ風では、國元の事が案じられる。西郷は、先へ乗込んで居るにもせよ、一人の力では如何あらうか、と、それが思ひやられる。有村も、西郷を逐ふて、入薩するのがよからう、となつた。この意見は、有村の考へであつた。北條も、それを不可とは、強て主張しなかつた。月照は、有村に、此處で別れることが、何となく心細くはあるが、北條の考も、有村に、同じ事だとなつては、反對を唱へ得なかつたのである。

月照は、北條に案内されて、高橋屋へ泊つた。此家の主人は、俠氣ある男子で、常に藩中の有志等に對しても、頗る好感を以て、便宜を謀つてくれるから、北條も、かねて懇意にして居たのである。

「上人……少しく御願ひの次第が御座る」

と、いつて、北條は、月照に話かけるのであつた。

「何事で御座りますか」
「西郷有村兩殿の來る迄、しばらく當地に居らるゝのが、上人の御意には、良いと考へて居るが、それについて、黒

田藩の内情が、どういふ風になつて居るか、これも一應は知つて置きたく、また多少の同志も御座れば、それ等の人を訪ねて、其後の事情を聞いても見たいので、これから外出いたしたく存するが、御差支もあるまいか」

「何から何迄、御親切の御考は、まことに有難く存じます。拙僧には御遠慮なく、自由に御出かけ下さい」

「併し、出先の都合にて、一兩日は歸れぬかも知れません」

「宜しう御座います」

「然らば、是れから參ることにいたしましたせう」

「何分、よろしく御願ひいたします」

北條は、重助を呼んで、上人の事を、くれぐれも頼む。重助は、元來が月照の下僕でもあり、恩人の身を案じて、従いて來たのであるから、北條に頼まれる迄もなく、二人切りになれば、月照の傍には、離れず附いて居る覺悟なのだ。だから、北條を送り出して、重助は、月照の座敷に來て、何かと世話をして居たのである。

いかに平和な旅行でも、また費用を惜まぬ旅行にしても、元來が旅行といふものは、何となく寂しいものだ。可成り氣丈な人でも、見も知らぬところへ行けば、何となく心持がよくない。殊には、夕暮の一刻が、一番にいけない。故郷の山川や、家庭の事などを、思ひ出して、何ともいへぬ寂しさを感じる事のあるは、旅費の多い少ない、といふばかりでなく、そこが人の心の弱いところであらう。

家毎に起る、戸締の音なども、騒がしく聞えるものである。が却て心の寂しさを咬り、鳥が啼を求めて、歸る時の羽ばたきや、その鳴聲は、一しほいけないものだ。その上に、寺の鐘が、ポーンと響くなどは、どう考へても、あまり有難くない。

月照の旅は、全く隠れ忍んでの旅であるから、何事にも不自由で、人から人へ、送りつけられる事なども、覺悟の上とはいひ乍ら、不快を感じずには居られなかつた。

西郷始め、附いて来た人も、それ／＼に都合があつて、止むを得ぬ事とはいへ、皆な去つてしまつて、斯ういふ風に、自分丈け取残されて見ると、そこに寂しい感じも起つて、氣が滅入つて来るのは、いかに月照でも、免れ得ない事であつた。

「重助や、重助は居らぬか」

重助は、次の室で、衣服をたゝんで居たのである。

「御用で御座いますか」

「少し冷て来たやうぢや。廊下の戸を、締めて下され」

「よろしうござります」

重助は、障子を開いて、廊下へ出た。

「やア、大層白くなりました」

「雪かね」

「ハイ、雪で御座ります、大分つもりました」

「冷すぎると思つたが、矢張り雪であつたか」

「只今、戸を締めます」

九州は、暖いところと聞いて居たが、斯うして見ると、京都とは、大した變りもないやうぢや」

「左様で御座います。京都では、今頃に、雪を見ることは出来ません」

「多分は、時候の狂ひであらう」

「そんな事で、御座りませう」

「氣の毒ぢやが、戸を締めたら、床を敷べて、少し肩を揉んで下され」

「承知いたしました」

忠義一途の重助は、只御主人大事と、命令の儘に働くばかりであつた。

兩戸を締切つて、元の座敷へ戻り、月照の背後から、その肩へ手をかけた。

「旦那さま、お肩をもみませう」

「それでは、御苦勞ぢやが頼みます」

「これ位のこと、御苦勞も何もあるものですか」

重助は、肩をもみながら、

「大層凝つて居ります。此頃の御心配では、この位のことは有りませうが。旦那さま」

「何かね」

「他の事でもありませんが、私等は、どういふ理由で、こんなに逃げて歩行くのですか。旦那さまも、別に悪い事を爲すつたのではありますまいに、どう云ふ譯なんぞせうか」

重助には、それ等の事情が、よく判つて居ないのは、固より當然の事であるが、今の突然の間には、月照も、少し困つた。何と答へてよからうか、容易に實際のことは云へぬし、假りにいふて聞かせるとしても、その理解出来る筈はなく、何といふてよからうか、月照は、その答に窮したのである。

「それは、いづれ解る時であらうから、聞かずともよいではないか」

「左様でもありませんが、全然知らずに、逃げて歩行くのも、随分心細いもので御座いますよ」

月照は、思はず涙を浮べた。

折柄、足音はげしく歸つて来たのは、一兩日は来ぬかも知れない、といつて出かけた、例の北條石門であつた。

月照は、北條の姿を見て、ほつと息を吐いた。夜半に、慌だしく歸つて来たのは、何か起つたに違ひないが、それにして、寂しくして居たところへ、北條の歸つて来たのは、月照の身に取つて、心強く感じたのもあらう。

「オ、北條様、よく御歸りでしたな」

「夜更に及んで、嚙ぞ御迷惑とは存じましたが、急の用事で歸りました」

「遅くともお歸り下されば、之れにて安心が出来ます」

「舊友が打寄つて、久瀧であるからと云ふので、酒宴杯が始まり、それで遅くなりました」

「一兩日はお見えなさらぬ、といふ事でしたが、俄に御立歸りなされたのは、何か御用でも出来ましたか」

「ちと、御相談申上げたい事があつて、立歸りました」

「その御用と仰せられますのは、どういふ事で御座るか」

彼は押問答のうちに、重助は、次の室へ引下つて、遠慮して居たが、何時か眠りを催して、その場へ俯伏になつた儘、軽い鼾をかい居る。北條は、膝を進めると、急に聲をひそめた。

「上人、此處にも居られませぬ」

「えッ、此處にも居られぬとは、どうした譯ですか」

幕府の捕吏が、既う出張して居るさうです。それにしても、これまでに眼にもかゝらなかつたのは、何よりの傍俤で御座つた。夜明を待つて、此地を立退く外はあるまい」

と、北條の詞に、月照は、事の意外に驚いた。幕府から逐れることは、覺悟の上であつたが、少しの猶豫もなく、斯うまでに逐廻されるとは、流石に思つて居なかつた。此調子では、薩摩へ着くまでに、何うなる事かと、その心配も

起きて来て、一時は寧ろそのこと、自殺を遂げようか、とも思つては見たが、又考へ直せば、京都を出る時、近衛公の御意見もあり、自分の答へたことも、よく覺えて居る。これを思ひ合せれば、決して死ぬことは、事情が許さない。一時の決心は、終に消えて、逃げられる丈けは、逃げようといふ考へが、復起つて来た。

「然るべく御指圖を下さい。拙僧に於ては、決して異存はありません」

「別にお指圖申すことはないが、只だ夜明前に、此地を離れさへすれば、よいので御座る」

「兎に角、その都合に致しませう」

相談はこれで、決まつたが、重助は、樂々と寢て居る。そのうちに曉方になつた。

重助は、揺起されて、やうやく眠から覺めた。

「御用で御座いますか」

「さア、支度をするのぢや」

「又た逃げ出すのかね」

「出立をするのぢや」

「何の事だか、少しも知らずに、逃げて歩く位、馬鹿氣た事は有りやしない」

北條は、聞きかねて、

「これッ、何を申すか」

と、一喝を加へた。その一喝に、重助は縮み上つて、すぐ支度にかゝつた。

勘定は、既に右門が、濟ませて置いた。番頭が、出て来て、お世辭をいふ容子では、茶代も相應にやつたらしい。旅宿を出ると、呼吸をも吐かず、恰で月照を、引きずるやうにして、跣足になつた北條、その跡から、何か何やら

分らずに、駈けるのが重助であつた。

雪の最の山路とて、歩くには骨が折れても、急げば抄取り、正午頃には、筑前と筑後の國境まで来た。北條は、往來の人が、漸く絶えたのを見て、月照に近寄り、聲をひそめて、
『これまでは何事も申さなかつたが、實は、拙者もこれにて、お別れいたします』
と、私語やうにしていふた。

之れを聞いて、月照は、少しく不安の色を顯はした。
『而て、その理由は……』

『此儘に、上人と御同行申すのは、幕吏に逐付かれる恐れもありますから、拙者は、一と先づ引つ返へして、途中に幕吏を喰留め、飽迄も説得いたす所存で御座るが、萬一にも及ばぬ時は、拙者の一命は無きものとして、必ず追跡させぬ覺悟であれば、心安く落延て下され』

『貴殿の御親切は、骨身に沁みて、嬉しくは思ひますが、それ迄に、貴殿を苦しめても、この月照が、必ず助かる、といふ次第でもなく、殊には今、貴殿にお別れ申して、誰を頼りに、薩摩迄まゐれませうか、それを思へば、何事も成行にまかせて、貴殿には、相變らず御同行を願ひ度い』

『その仰せは、一應は尤であります、入薩の途中は、御心配ないやういたします。これから四里あまり行くと、大庭村と申す土地があり、其處に、竹内五百都といふて、我等の同志が居りますから、この竹内へ、萬事を頼み、上人の前途は、容易に薩摩迄、行きつけるやう取計はせませう。この書状は、即ち上人を、御紹介申上げたもので、之れを同人へ、御示し下さらば、必ず身に代へて、上人の爲め盡力いたしませうから、御心配なく御尋ね下さるやう、願ひ度い』

北條の誠意は、明かに認められるが、それにしても、上人は、今の場合、北條に別れるのが、何となく心細くも感じたのであらう。しばらくは、紹介狀を手にして、考へ、にける容子であつた。

『この場合に及んで、何を躊躇なさるのか、上人の御身を思ふて、これまでは、お附き申せしも、幕吏の追跡が、心に懸りて、斯く御取計ひいたしたので御座るが、それともに拙者の心事を疑はれて、御返事なされぬのか』

と、北條の詞は、少し烈しかったので、月照は、
『決して左様の次第ではありませぬが、この上に、貴殿の御心配をかけては、相すまぬと存じまして、御答が遅れたのであります』

『その御遠慮は御無用ぢや』

『さらば 貴殿の仰せに従ひ、竹内様を、おたづねいたす事に、覺悟を定めませう』

『どうぞ 左様願ひ度い』

『而て、竹内様と仰しやる御方は、どういふ人でありますか』

『今は長談の道もないが、只だ義侠の男子として、飽迄も信じて下さい。拙者は、之れより福岡へ引返し、別に、一人の英雄を、御送り申すに依つて、その人の行くまでは、窮屈を忍んで、竹内方に、お待ち受け下さるやうに、堅く願ひ置きます』

『その英雄とは、如何なる人でありますか』

『京都に在つては、都甲楯彦と云ひ、藩に歸つては、平野國臣と申す』

『ヤツ、その都甲様こそ、深き交りはないが、一二度御面會いたした事もあり、百萬の味方を得るの心地がいたします』

『去らば、これにてお別れ申す』

『随分ともに御機嫌能う』

『上人も、御身をいとひ下され。重助どのも、一層の忠勤を勵み、御主人の身を、大切に守られよ』

「それでは、北條さま」
重助が、悄然として居る、その容子を見ては、北條も、さすがに涙なきを得ず、月照も、顔を見合せて、しばしは愁然として居たが、北條は、詞を改めて、
「この路を、南に取つて、只だ一筋に、上座郡の大庭村と、おたづねあれば、直ぐ相分る」といふた。月照も、氣を取り直して、丁寧會釋した。重助を伴ふて、大庭村の方へ、しづかに進みゆく。月照の姿が、木間隠れに、遠くなるのを見送つて、北條は、やがて福岡へ引返した。

一一

本藩の士格でなく、謂はゞ田舎の物持であつて、苗字帯刀を許されて居る、郷士といふ身分にすぎぬ、竹内五百都は、立派な有志家として、よく人にも知られ、多少は、讀書の力もあり、劍道にも達して、一廉の士人としても、恥かしからぬ人物であつた。

北條とは、最も親しく交り、平野を始め、黒田藩の志士とは常に往來して、資力なき人には、いくぶんの内助もして居る、といふやうに、篤志の人であつたから、勤王派の人々には、殊に氣受が良く、郷黨の間にも、重きを爲して居た人である。

家内のものは、皆寢てしまつたが、五百都は、書齋に入つて、頻りに書見をして居た。更う初更に近くなつたが、飼犬の騒がしく、吠え立てる聲に、耳を傾けると、表の門を叩いて居るものがある。家人が起きるのを待つて居たが、容易に起きさうもないので、止むを得ず、自身に立ち上り、表門の内まで来て、しばらく門外の様子を、窺つて居た。門外に居る二人は、暫らく叩くのを止めて、ちツと待つて居たが、さらに門を開いてくれさうもないから、重助は「旦那さま、誰も出て来ませんが、もツと叩きませうか」

「少し待ちなさい、さう騒がしく爲るものではない」と、月照は、重助を制して、待ち受ける。重助は、待ちあぐんで、復た叩きはじめた。

「お頼み申します、お頼み申します」

「はッ……しばらく……」

すぐ門の際で、返事をされたのだから、重助は驚いて、眼をきよろ／＼させ乍ら、叩くのを控へた。門が開くと、一人の男子が現はれて、

「私は、當家の主人、竹内五百都と申すもので御座る」

月照は、ずつと進んで、

「初めて御目にかゝります。愚僧は、少しく仔細あつて、おたづねいたしました。萬事は、此の手紙にて御承知下さい」

月照の渡す手紙を、五百都は、取る手おそしと披いて見れば、北條右門からの依頼狀で、訪れて来たのは、月照上人と云ふことが判つた。

「先づこちらへ、御通り下され」

「然らば御免」

五百都の案内に従ひ、月照は、奥座敷へ通つた。此時、家人も氣が注いで、眼をこすりながら起き上つた。

「お前達は、起るに及ばぬ。その儘、寢て居ればよい。お客人は、私が、お世話いたす」と、いつて、起きかゝつた家人は、寢かしてしまつた。

五百都は、月照の前に出て、
「北條氏の書面に依つて、委細の事は、承知致しましたが、途すがらの御難儀は、嘸ぞかしと、お察し申しまする。」

此書面に依れば、平野氏も、お出でのやうに書いてありますが

『それは、未だ解らないので御座います。北條様に、お別れ申した砌り、左様いふおはなしは有りましたが、未だ國臣大人は、御承知はない事でせう』

『ハ、ア左様すると、右門が、平野に説いて、それから平野が來ることになるかも知れぬといふので、御座るな』

『多分は、左様の都合で御座りませう』

『何にもせよ、斯く拙者が、御面會申す以上は、決して御心配なく、拙者に於て、萬事は、お引受けを致す』

『愚僧も、大に安心いたしました』

未だ談話の終らぬところへ、表門を、ドン／＼／＼、叩き方が餘りはげしいので、五百都も、はつと思つたが

顔には、更にもその色を出さず、月照に、目禮して立ち上つた。家人が、再び起きよう、とするのを、堅く制して、五百都は、門の内側へ出た。

『深夜に及んで、誰人て御座る』

『拙者だ。平野ぢやよ』

『オー、平野氏か』

五百都が、門を開くと、駈込むやうにして平野は、

『月照が』

と、いひかけるのを、五百都は、手を振つて、抑へるやうにした。平野は、聲をひそめて、

『月照は居るか』

『今少し前に參つたばかりだが、先づ通りたまへ』

平野は、ずつとはいつた。その姿を見ると、急いで來た爲でもあらうが、袴は勿論、着衣までが泥だらけで、とて

も此まゝには、案内も不能から、

『足下の衣服は、泥塗れになつて居るが、改めてはどうぢや』

『イヤ、差支ない』

『併し、此方て困る』

『左様か、それでは脱ぎかへるとしよう』

五百都は、自分の衣類を出して、平野に着かへさせた。

一一一

平野國臣は、勤王家のうちに於ても、屈指の一人であつた。

その人物に就ては、種々の批評もあるが、熱烈な討幕論者であつたことは、極めて明白である。

武藝にも秀で居り、學問も、可成り深くあつたことは、その文章や詩歌に依つても、すぐ判るほどで、一代の行事

は、世に傳ふ可きことも、多く在るけれど、茲には、その概略だけを、述べる事にしよう。

筑前の國福岡の藩主、黒田侯の家來で、足輕の家に生れて、身分は、極めて卑かつた。父は、平野吉三と謂ふたが、

律氣者の子澤山、といふ諺の通り、子供を、六人有つて居た。國臣は、その二男で、文政十一年三月廿九日に生れ

た。幼い時から、奇童の譽が高く、成人するに従つて、藩中の評判は、ます／＼良くなり、十一歳の時になつて、同

藩の大音權右衛門、と云ふ人の家へ、給仕に行つて居たが、同家へ、しば／＼出入して居た、小金丸彦六に、その天

才を認められ、大音が媒介して、小金丸家の養子となり、名を源藏と改め、種徳と稱するに至つた。

源藏は、少年の頃から、文武の心懸に厚く、良師を選んで、頻りに修業を續けたので、その進歩は、殊に著しく、

小金丸は、善い養子を貰つたと、人にも羨やまれ、自らも誇つて居たが、春の花、秋の紅葉と、年月を送るうちに、

源藏は、十九歳の春を迎へた。そこで、彦六の三女、民子を、源藏に結婚せて、藩廳へ届け出ると、藩中の評判もを、婿に迎へたのは、彦六の心懸けがよいからである、とそれで、重役や老臣からも、ひどく賞められた。それから間もなく、源藏は、普請方手附を申付けられ、且つ江戸表の勤番を命ぜられた。

然るに、源藏は、此時分から、槍術の達人といはれ、國學には、非常に精通して、藩の儒者なども、源藏の勉學には、舌を巻くほどであった。源藏が、國體を重んじ、皇室を尊敬するの念に厚かつたことは、偏に國學を修めて、建國の根源を、深く研究した結果であつて、只だ徒らに、幕府へ反抗する、氣分の流れから來た、空疎なものとは全く異つて居たのである。

當時の幕政は、如何であつたかと云ふに、殆んど王室に對する觀念は、皆無の状態、宮殿の修繕すら、更らに顧みぬ、といふほどに酷しいものであつたから、源藏は、朝に、國體の重きを想ひ、夕べに、幕府の專横を憎んで居た。江戸の勤番を申付けられて、出府の途次、京都へ立寄つて、宮城類廢の現状を拜しては、いよく勤王の志厚く、幕府に對する、憎惡の念は、ますます起つて來た。其時に、詠んだ歌に、

大内の山のみかまきこりてたに
つかへまほしき大君のへに
と、いふのがある。

同じ愛國心でも、國に依つて、その種類は、いろ／＼に別れて居る。

また、その心の起つて來る、淵源や筋道についても、さまざまの相違がある。西洋人の愛國心は、物質を尊重する、自國の立場から、起つて來る愛國心であつて、精神的に、深く根ざして居るものではない、神祕的に、特種の信仰を有つて、それから起つて來る、愛國心は強く、物質萬能の心から、自國の立場を保留しよう、と爲る、輕薄な愛國心は、常に浮動して、甚だ頼み少ないものである。理窟から説かれて、理窟に引摺られる愛國心は、理窟に依つて支配されるから、動もすると動揺して、少しも頼みにはならぬ。

けれども、日本人の愛國心は、歴史から來た觀念であつて、誰れも之を教へず、何人も之を導かないのに、自然と、愛國の精神が、發揮するといふ所に、不思議な力を有つて居る國柄だ。これは全く、至尊は犯す可からず、上御一人は、大切に思はねばならぬ、これに背けば、此の世に生れて來た、本來の目的に違ふものである、といふ一種の信仰から、傳統的に、二千年來も續いて來たのであるから、その強味は、世界各國の那邊にも、其比を見ないのは、固より當然の事である。

唯今に至つて、此信仰に背き、此傳統を破らう、とするものが、多少とも起つて來た傾向があるのは、まことに遺憾千萬であるが、それ等の輩は、今のうちに導き教へて、本來の精神に、引戻してやる事が、最も必要な時務である、と信ずる。

京都に於て、宮城の類廢に、慷慨の涙を灑いだ平野は、江戸へ來て、幕府の勢威が、無限に廣がりつゝある、その状態を見ては、いかにしても忍び得ぬ、反幕府的の感情は、日に高まりつゝあつた。

一日、同僚數名と伴れ立つて、上野寛永寺へ參詣した。祠前から大鳥居まで、可成り長い間、石疊みになつて居る歩道を抜んで、その左右には、各藩の主人から、奉納した石燈籠が、隙間もない位に、立並んで居る。少し遅れて、源藏は、一同の跡から尾いて來たが、左側にある燈籠へ、兩手をかけて押した。滿身の力は、兩手に充ちたから、その燈籠は、恐ろしい地響をさせて、ドンと倒れた。その上に片足かけて、源藏は、一と息入れた。

之れを見ると、同僚の一人は、飛んで來て、源藏を、背後から抱留めた。

『神前の燈籠を足蹴にするとは、何事ぞ御座る。小金丸氏には、狂氣せられたか』
と、いつて、その不都合を詰つた。源藏の眼には、血を灑いだやうに、赤い線が出て居る。

「苟も臣として其君を蔑ろにし、自家の奢侈にのみ耽つて居るのは、甚だ以て怪しからぬ。我等が今、徳川の祖廟を拜するは、その將軍として、吾黒田家の上に、在るが故のみ。然れども、普天の下、王土にあらざるなく、率士の濱、王臣にあらざるなし。源藏も、また王家の臣であり、而して黒田の臣である。如何に王室の權威が衰へて居るにもせよ、宮垣の頽廢して、幾年の今日、猶ほ修覆のことには、心を用ひず、而も寛永寺に來れば、金色にまばゆく、莊嚴の限りを盡して居る。王家を無視するの甚しき、此に至つては、勘辨相成らぬ。國體の何たるを解し、皇祖の偉業を想ふもの、之を見て、何と思ふか。今や士道地に落ちて、勤王の志全く消え失せた。幕府の威力に何れも、王家あるを忘れて居る輩に、拙者の心事が解るものではない」

怒罵大喝、同僚が、抑へる手を拂退けて、他の燈籠を蹴飛ばさう、とするから、一同は、驚いて之れを押へようとする。源藏は、ますます狂ふので、總勢がよりて、漸く押へ付けて、邸へつれかへつた。

「今日は、ひどい目にあつたでは、御座らぬか」

「源藏の憤激は、決して無理とは思はぬが、今の世の中で、いくら騒いだとて、仕方があるものではない。併し、此儘に濟めば幸ひだが、困つたもので御座る」

「お互に、卷添へを喰ぬやう、注意が肝要であらう」

それから數日して、源藏は、重役に呼び付けられた。

寛永寺からの掛合があつたので、重役も、止むを得ず、源藏を呼び出して、一應は叱言を云ふて、手軽く事を濟ますつもりであつたが、何分にも、源藏の勢が、なか／＼強くて、穩便の取扱が取り悪くなつた。と云ふ譯は、源藏が、重役の叱言に屈せず、堂々と議論をするからであつた。

「徳川は、日本の天下を、支配するものには違ひないが、王室は、其上に在つて、眞正に日本を支配するのである。如何に徳川でも、王室を凌いで、それが天下の主人であるとは、決して云へぬのである。要するに、徳川は、王室

の従者である。それにも不拘、王室を蔑視して、天下を私しするとは、實に奇怪千萬である。自らは驕奢を極めながら、王室への貢ぎを怠り、更に省るところがなく、切言すれば、徳川は、王室の敵であり、また國民の仇である。拙者は、東照宮の莊嚴を見て、前日に拜した、宮城の頽廢に比べて、憤慨の餘、燈籠を蹴倒したのであるから、少しも悪い事を致したとは、思つて居らぬ」

と、源藏の氣焔は、大變なものであつたから、これには重役も困つた。けれども、心の中には、いづれも源藏を、ひるきにして居たので、寛永寺の方へは、然る可く手を廻して、首尾よく濟ませたが、此一事から、源藏は、江戸に置くことが出来なくなつた。

一一一

源藏は、役を罷められて、福岡へ歸された。

外交の事は、日を逐ふて、面倒を加へ、夷人は、交る／＼やつて來て、開國を迫り、それに刺激されて、攘夷熱は、ますます／＼高くなるばかりであつた。各藩の志士または浪士の徒は、到る處に、けわしい飛躍を試みて、幕府の權力も、やうやく輕んぜらるゝに至る、諸侯の向背は、朝に夕を、計り得ぬといふ、混沌たる状態であつた。

江戸から福岡まで、道中筋の各藩には、多くの志士や論客が居るので、さうした人々を訪ねては、その藩情を搜り他日の參考には、此上もなく利する所があつた。福岡へ着てからは、藩命に依つて、謹慎する事になつた。元來が、眞面目な人であるから、謹慎の狀、頗る重役の同情を引いて、間もなく謹慎を解かれたばかりでなく、鼻眞する人々は、頻に再度の就役を、周旋してくれるほどであつたから、長崎奉行下役として、出張を命ぜられる事になつた。

長崎は、幕府の直轄であつて、奉行は、旗本のうちから、優秀の人物が、特に選ばれて行く事になつて居たのだ。外人の取締、貿易の監視といふ、むづかしい事があつて、外人の取締は、奉行所の仕事になつて居たが、萬一の場

合を考へて、福岡の黒田と、佐賀の鍋島が年代に、其防備を引受けて居た。貿易の方は、役人の外に、土地の有力者から、町年寄といふものが選ばれて、實務を行ひ、役人は、只だ出張をして居たにすぎぬが、貿易は、長崎の町でなく、出島に於て行はれ、そこには、今の税關の如き、役所が設けられてあつた。

外人といふても、世界の何處にも、来ることを許して居たのではなく、オランダ、ポルトガル、支那等、二三の外人であつて、オランダ人は、幕府からも、特別の待遇を與へて居たから、商館を設け、日本の女を、夫人にして居たものもあつて、日本人も、最も親しみの深いものは、オランダ人であつた。

斯うした關係に依つて、歐洲の文化が、オランダ人から、自然に傳へられて、オランダ醫學は、其主なるものであつた。醫學を修める爲に、オランダ語を學び、オランダ語を覺えた爲に、世界の文化を知り、之れが原因となつて、謂ゆる蘭學者なるものが、追々に殖えて來た。醫學の次ぎには兵學を教へられ、安政の當時から、極く狭い範圍ではあつたが、洋式訓練が、漸次行はれて來たのである。

從て、當時の長崎は、文明の直輸入所で、すべての外人は、我邦に來るや、先づ第一に長崎を見て、それから内地へ、だん／＼這入つて來る、といふ順序になつて居た。アメリカ人は、その慣例を破つて、直接に江戸灣へ、乗込んで來たから、攘夷の騒ぎが、起つて來たのであつた。

藩命を受けて、長崎奉行の下役に、割當られるほどの士人は、よほど重役にも、信用の厚いものでなければならぬ筈だが、江戸の藩邸に在番中、那アした大きい過失をしたにも不拘、源藏が、その役目を、申付けられたといふのは、重役のうちに、源藏の人物を、よく認めて居たものがあつたからである、と見て可からう。

凡そ何れの國でも、その開け始めは、諸般の制度も行届かず、風俗のことなどは、却々取締つても居られないから新らしく交際を開いた國の風俗が、動もすると、滲込んで來て、自國の風俗は、何時か不知、滅茶苦茶に破られてしまつて、言語道斷の状態になることは、どうしても免れ得ぬ、これも時弊の一つである。

安政の頃、長崎の士女が、今のモガやモボの如き、卑しいものに迄はなつて居なかつた、としても、オランダの風俗に、多少とも眞似るものが、出て來たことは、否認し得ぬ事實であつた。極端な攘夷思想家たる、源藏が、之れを見て、非常に憤慨したのは、その時代としては、或は當然の事であつたかも知れない。

外國の風俗を、眞似る事は、假に良い、としても、同時に、その國の人に對して、絶對服従の醜態を演ずることは、深く注意して、之を避ける事にしたい。日本人には、昨今に至つても、その調子があつて、まことに困つた事だ、と思つて居るが、徒に、外國人の鼻息のみ窺つて、少しも自國の面目や權威に就て、しつかりした態度を、示し得ない事を、問題の起る毎に、見せつけられて居るが、どうして、斯うも氣が弱いのであるか、と思へば、心細くもなる。嘉永安政の當時、表面は、攘夷々々といつて、威張つては居たけれど、幕府の役人が、外人に對する取扱は、實に卑屈を極めて、攘夷の主張とは、全く正反對に、何事にも迎合する、といふやうな態度であつたから、眞劍に、攘夷を考へて居る、各藩の士人が、何時も憤慨しては、外人に向つて、不穩の行動を取るやうにもなつたのである。

長崎の港内へ、偶まアメリカの黒船が來て奉行所の役人が、之を取調べる必要があつて、船長を、呼びつける事になつた。

船長は、數名の部下を率ゐて、奉行所へやつて來たが、靴穿きの儘で、ノソ／＼上つて來るのを見て、奉行の背後に尾いて居た、源藏が、不意に飛出して、その船長を、うむと殴りつけた。之を留めようとした部下の外人を、左右へ、投げ付けたので、忽ち大騒ぎになり、源藏は、黒田藩の代表者、阪田九郎右衛門へ、預けられることになつた。

源藏は、之れが爲めに、蟄居を申付けられた。自らの愼みがなかつた爲めに、斯うなつたのだと云ふことは、悟つ

て居たから、藩命を怨んだり、或は人を憎むやうなことはなかつたが、獨り熟ら思ひ考へた。王室の式微も嘆かほしいが、外夷の跋扈は、更に慨嘆に堪へぬものがある。それといふのも、畢竟は、幕吏の心得が違ふからで、尊貴の御恩は、少しも思はず、唯時の政府に諂ふ事のみ考へて、國家を念とせざるが爲めに、外夷に對してさへ、斯かる卑屈の態度に出るのであらう。殊に怪しからんと思ふのは、條約に對する處分である。上御一人の御思召を伺はず、妄りに開國の約束をいたして、千歳不滅の御國體に、傷を塗けたばかりでなく、之れが爲めに、外夷の跋扈に、幾何の便宜を興へたか知れぬ。此上は、我が一身を捧げて、國事に殉ずるの外はない。これにつけても困るのは、養家との關係であるが、もはや、その因縁を、絶つ時が来たのだ。碌々として人の家に寄食し、私恩に抑へられ、義理にからまれ、足一步も國境を出でず、坐して藩主の鼻息のみを窺ひ、起つて神州の危難を救はねば、國民たるの自分を、盡くしたと云ふことは出来ぬ、とは云へ、妻もあれば子もある、今の境遇をいかにして、遁れてよいか、小金丸家との絶縁は、涙を吞んで爲ねばならぬ。先づ恩愛の羈絆を斷つて、妻子に分れ、全くの一身となつて、義を天下に唱ふる事が、これからの自分の務である。

と、堅く覺悟してこれからといふものは、一室に籠つて、小金丸の家を離れることのみ、心を苦しめて居たのであるが、源藏が、殊に困つたのは、子供の事であつた。この時には、既に三人の子持で、妻の民子は、貞節の婦人であつた。三人の子供を生育てる間も、源藏は、多く留守勝ちで固より小身の家であるから、生計も左迄に豊といふのでないが、只だ一心に、種二、瀧三、千代の三兒を、育て、居るのであつた。小金丸の家を離別になれば、この可愛い子供を捨て、この貞節の妻にも放れなければならぬといふのであるから、源藏の苦心は、却々に容易な事ではなかつた。

源藏は何日となく、舉動が可笑しくなつて來た。身柄を、預つて居る、阪田も、これには困つた。或時は、烏帽子直垂を着して、座敷のうらち舞をはじめたり、或時は、馬上に跨り、横笛を吹きながら、城下の町々を逍遙ふことがあり、また或時は、街頭に佇ずみ乍ら、悲憤の涙を流して、道行く人を驚かすこともあつた。常軌を逸した、源藏の行爲は、忽ち評判になつて、流石に、奇才の源藏も、斯く廢物も同様である、といふ人さへあつて、源藏に對する噂は、甚だ良くなかつた。

阪田も、小金丸も、機會を見ては、源藏の心が落付くやうに、いろ／＼と意見は試みたが、更に其効はなく、源藏の狂態は、日を逐ふて募るばかりであつた。

養父の彦六は云ふまでもなく、妻の民子も、頻りに心配はするやうなもの、狂人につける薬は、昔から無いのであるから、どうしても斷念の外はなかつた。兎に角、源藏を、一時のうちでもよいから、生家へ戻さう、といふ相談が、終に成立つて、源藏は、實父の方へ、引取られる事になつた。

妻に對する情と、子に對する愛は、又た格別なもので、殊に子の愛らしいのは、誰れも同じだ。一日働いて、家に歸れば、子供の笑顔を見るので、その日の疲れは、すっかり忘れてしまふ。夫婦の争ひも、子供の爲めには、理由もなくまとまることがある。

世態人情の變遷は、實に恐ろしいもので、昨今になつて、親が子供を、死の道伴れに爲ることが、非常に流行つて來た。

自分の失策と無智が原因になつて、生活苦に陥つたから、といふて、無心の子供を、一しよに殺して、地獄へ急ぐ親の心は、どう考へても解らない。

子供の愛は、自分から引放して、子供を自立させる事てなければならぬ。それが自分の力で不能から、死の道伴に爲るなど、といふことは、よほどの莫迦か、鬼畜にひとしい、心を有つたものである。

假し子供を有たぬものでも、頭はない子供に繼られて、怒るものは決して無い。若し在るとすれば、それは非常な

源藏が、小金丸の家を出ることは、多少の情を制しても、勘忍が出来ぬ。妻に別れることも、強て忍ばば忍ばれるけれども、最愛の子供に別れることは、それと同じに見ることは出来ぬ。如何に忘れようとしても、忘れられないのが、子孫に對するの情である。源藏が伴狂者になつて、小金丸の家から離別するのは、勿論覺悟の上ではあるし、それほどに苦痛とも思はなかつたらうが、子供の愛は、全く別であつたから、源藏の苦痛は、その一事であつた。さり乍ら、それを忍ばなければ、養家を離れることが出来ぬので、やさしい心を鬼にして、強て忍んだ苦痛は、察するに餘りがある。

夜は、漸く更けて、心も自ら澄む頃になると、源藏は、子供のことを思ひ出すのであつた。子供の姿が、眼の前にちらついて、あり／＼と見える。犬猫の泣く聲までが、子供の聲かと思はれる。或夜のこと、その鬱氣を散ずる爲に、横笛を携さへて、ぶらりと表へ出たが、足は、自然と西町の方へ向く。此夜は、月明かにして、風も無く、詩歌などに樂しむ人の爲めには、此上もなき良夜であつた。

源藏は、澄み渡る街頭に、月影を踏みながら、横笛を吹きつゝ進むのであつた。那邊へ行く、といふ的もなく、徐かに歩くのであるが、愛惜の羈絆は、頻りに源藏を、西町へ牽き寄せる。知らず／＼源藏は、小金丸家の前に來た。「ハツ」と思ふて、前後を見廻はし、横笛の音を止めて、そつと家のうちを窺がふと、微かに聞こゆるは、種二の聲であるから、流石の源藏も、胸は轟くほどであつた。裏手の方へまはつて、垣根の外に身をよせ、家内の様子をうかがふと、子供の聲や、妻の民子が、何か教へて居る聲が、手に取るやうに聞えた。障子の明く音におどろいて、垣根をはなれ、元の道へ引かへした。

その時の歌に、
いづくしみ悲しむあまり棄てし子の

二三日経つて、又々例の如く、横笛を吹きながら、西町へ來た。
ばた／＼と足音が聞えたので、源藏は、逸早く身をかくさうとする。その刹那に、

『父さま』

と叫んだ。その聲は、豫て聞き馴れし種二の聲であつた。我れに返つた時、源藏の袖が重かつた。種二が、しつかり掴まつて居る。源藏は、靜かにその手を拂ひ、

『父さまは、此家の人ではない』

『父さま、どうぞ家へかへつて下され』

源藏の胸は、張裂く思ひであつた。「ワツ」と、泣き出したのは、妻の民子である。これはと驚ろく源藏、民子は、垣根の蔭から駆け出した。

民子の情の切なるは、能く察して居るが、自分の素志を貫くには、その情を抑へる外はないのだ。民子を叱り付け種二の縋りつく手を振放して、やうやく家に歸つた。それから後には、絶えて外出もせず、小金丸の家には、近付かぬやうに心がけて、恩愛の羈絆は、すつかり斷つてしまつた。

一四

京都の狀勢は、攘夷論を中心として、刻々にけはしくなつて行くが、落付く先は、倒幕といふ的であつた。佐幕派のうちにも、攘夷論者は、少なからず在つたけれど、此主張に依つて、幕府の運命を危くしよう、とは考へて居らなかつた。反之、攘夷派のうちには、開國論者も在つたが、攘夷の主張が、幕府の存立を危くする、と見込んで、心ない攘夷を唱へるものは、可成り居たのであるから、どうしても、攘夷派の押手は強く、佐幕派は、何時も受太刀で

あつた。源藏にも、多少の知己があり、同志と稱するものも、いくらかは在つたので、それ等の人々から、追々の音信もあつて、ひそかに京都へ、上る事になつた。

京都へ着いてからの活動は、却々に目覺しいものがあつて、各藩の有志にも、相當に知られるやうになつたが、殊に、源藏の勤王論には、深い根據があつて、空疎な慷慨談とは、大に違つて居たから、同志の耳を傾けるものが、だん／＼多くなつて来たばかりでなく、得意の討幕論に至つては、何人も追隨し得なかつたのである。その頃は、都甲桶彦と名乗つて居たから、小金丸源藏である、といふ事も知られず、況して、本姓の平野を知るものは、殆んど無かつたのである、國學に通じて、和歌を善くする所から、公卿の邸へは、よく出入して、三條實美には、最も知られて居た。そのうちに、密勅の一條が、幕府に知れて、一大疑獄の起ることが、源藏にも判つたから、忽ち京都を免れて福岡へ歸つて来た。此時に、漸く小金丸家を離別して、平野の本姓に返り、次郎國臣と稱することになつた。

於此、全く一身の自由を得たから、東西に見廻つて、攘夷を論じ、また討幕を説き、思ふさま活動をつゞけたので、有志の間には、よく知れ渡つたが、その代り、藩の役人は、やうやく眼を光らして、平野に、注意を拂ふやうになつて来た。

北條右門から、使ひが来て、至急面會をしたい、と云ふので、早速たづねて行くと、

「實は、京都から、月照が来て居るので、その保護を、足下に頼み度く思つて、お招ぎいたしたのぢやが、御引受下さるまいか」

と、それから西郷有村の事も、くはしく物語り、月照は、竹内方に、送り込んで置いたが、自分は、此處にふみ留まり、幕吏の追跡を妨げるつもりであるから、足下は、月照を、薩摩へ連れて行つてくれ、といふのであつた。「宜しい、承知いたした」

「それは忝けない。明朝にも、かけつけて欲しいが、いかゞであらうか」

「これから、すぐまゐらう」

「えッ、すぐにおいて下さるか」

「左様う」

「しかし、家事の御都合も御座らうが」

「天下の事に、一家の私事は顧みぬ」

「大丈夫の魂、實に敬服いたした」

「さらば……」

と、いつて、すぐに立上つた。平野は、すぐに大庭村を指して、飛ぶが如くに、かけつけたのである、平野の到着があまりに速いので、竹内が驚いたのも無理はないが、平野は、眞に至誠の人であつた。

京都に在る時、平野は、月照に逢つて居たのだ。従つて、北條の依頼をうけた時にも、二言といはず、その保護を引受けたのであるが、先づ竹内の案内で、月照の座敷へ通ると、すぐに「ヤア、上人……」と、聲をかけて、席についた。

月照は平野を見ると、丁寧ていねいに會釋あひやくした。

「詳しい事情は、北條から承りました。道中筋は、さぞ御難儀ごなんぎでありましたらうが、もう此處まで来れば大丈夫、御安心ごあんしんなされて宜しい。拙者せつしやも、京都に居つた砌まじり、幕府の様子さまが怪しい、と思つたので、逸いはやく歸國きこくをいたして形勢けいせいを窺うかがふて居ると、果して今度の大疑獄だいぎよく、片つ端かたはから捕とらへられた同志の人々、自身みづかは、災わざはひを免まれても、同志の身上みみを思ふと、氣きの毒どくに存ぞんずる。併ひし上人しやうじんまでが、其の一人であつたとは、實まことに思おもひもよらぬことことで御座つた。」

月照の身に取つては、平野が、斯かうして駈かけつけてくれたのは、百萬の味方みかたを得た、と同じ事ことで、其喜そのよろこびは一通

りてなかつた。そのうちに、主人の竹内が、膳部の準備を整へてくれたので、一同打揃ふて、食事を終り、よもやまのはなしに、時刻を移し、それからグツスリと寝込んだ。翌朝は、今の時間で云ふと、十時過ぎになつて、漸く眼をさました。

顔を洗ふて、食事もすませた。月照は、急に思ひついたやうにして、

『平野様に、少々御相談が御座います』

『何事で御座るか』

『外のこともありませんが、貴殿のお出下された上は、一日もはや薩州にまゐり度、途中に、あまり永居をして又も幕吏に追はれては、それこそ大事でありますから、入薩を急ぎたい、と思ひますが、如何でありますか』

『御尤の義と存する。拙者の斯くて在る上は、少しも怖るゝところは無けれど、上人の御心中も、御察し申すゆゑ、竹内にも、相談の上にて、何分の御返事を、いたしませう』

『何分とも宜しく』

『承知いたしました』

平野は、竹内を、別室に招ぎ、密談數刻に及んで、再び月照の前へ、出て来た。

『竹内も、左様いたしました方が、よからうとの考へて御座つた。これから直に出發いたしませう』

此返辭を聞いて、月照主従は、すぐに身の廻りの支度をはじめたが、萬事の準備は、竹内にまかせてある。

出立の準備も整つたので、大庭村を出かけた。道案内は、竹内が引受けて、一同は、道を急いで、下座郡の長田村までやつて来た。

これからは、筑後川を下るのである。竹内は、柳川の小保まで、同道することになつた。竹内の盡力で、柳川行の

川船を備ひ、辨當や酒の支度も出来た。

船は、月照の一行を乗せて、筑後川を下る。平野は、眼光するどく、色は飽くまで黒く、身の丈は低い、肩幅の廣く、筋骨の逞ましい、何處から見ても、立派な武士であつた。槍術が、最も得意で、藩中に於ても、第一と稱せられた。斯うした風の人であつたが、其半面には、極く粹なところもあつて、和歌の道にも暗からず、國學には、餘程精通して居た。笛は吹くし、舞も巧い。琉球節などはそのうちでも、得意であつた。

船は、流に従ふて、徐かに下る。兩岸の秋色は、恰て畫の如く、京都を出てからの鬱氣は、全く晴れてしまつた。竹内と平野は、思はず酒を過して、始めのうちは微吟位であつたのが、酒の進むに従ひ、平野は、殊に愉快さうにして、舷を叩いて、得意の琉球節を誦ひはじめた。

『乳兒が前髪、斬らしやるならば、私も止めましよ振袖を、シタコリヤヨメ／＼シンと酔た／＼シタリヤガン／＼』

月照も、竹内も、耳を傾けて、その美音に感じ、平野は、調子に乗つて、いよ／＼節面白く誦ふて居るうちに、船は、久留米へ着いた。月照は、水天宮を拜す爲に、船を寄せたが、折悪しく眞木和泉が、不在であつたのは、此一行に、何の位の失望させたが、翌日は、柳川の小保へ、無事に着いて、一と先づ、一同は上陸する事になつた。

一行の休んだ所は、川に臨んで、頗る展望の善い家である。月照は、重助と共に、廊下へ出て、しきりに其眺望を味ふて、旅情を慰めて居るのであつた。

別の座敷に、平野は、竹内と對坐になつて、前途の事について、相談を始めたのであつた。

『これ迄は、先づ無事にまゐれたが、この前途が、却々に困難であらう。足下は、何と思はれるか』

『仰せの通り、實は是れから前途が、一層の困難ぢや。殊に、薩摩の國境には、一里毎に關所があつて、出入の者を嚴重に取調べて居るから、殊更に入國の者に對しては、その調べも、きびしいに相違ない。併し、拙者は、三寸の舌を以て、何とでも説きつけるつもりで御座るが、萬一にも、彼れ是れと、拒まれた場合には、身を投げ出して、』

打通る外あるまい、と覺悟いたして居る』
 と、平野は、存外な元氣であるが、竹内は、流石に考へて居た。
 『イヤ、それは悪い御了見ぢや。此旅行は、足下が一人てなく、殊に、月照といふ日蔭の人を、御送する役目もあつて見れば、さう無造作に考へては、いけませんまい。就ては、薩摩入りの支度を調べてまゐつた。一應は御覽下さい』
 竹内は、斯ういつて立上つた。
 次の座敷から、柳行李を持つて来て、竹内は、それを開いた。
 薩摩への道順を示した地圖と、それから關所の割符と、此二つを取出して、平野へ渡した。地圖は、竹内が、一夜造りのものであるが、道順は、それでも一と通りは解る。只だ不思議なのは、關所の割符であつた。
 『此割符が、どうして御手許にあつたか、實に驚入る』
 『ハツハ、、、、拙者が、手製の割符で御座るよ』
 『えッ、手製とは……………』
 『この御用意はあるまい、と存して、前夜のうちに造つて置きました。御心配なく御使用下さい』
 『左様で御座つたか』
 一つ間違つたら、關所を、ふみ破つても、通つて見せる、と大言壯語した平野だが、關所の偽手形には、ちよいと驚かされたのである。
 關所破りは、どこの藩でも、極悪大罪として、取扱つて居たのだ。若し露見したら死は免れぬのであるが、それを平氣でやつて退けよう、と爲る、兩人の膽は太いものであつた。

一五

竹内は、猶ほ充分の注意を、平野にいひ残して、此處から引返す事になつた。月照は、その好意を、いくたびか繰返して、感謝した。それから先きの船も、竹内が、すっかり用意してくれたから、それについての心配はなかつた。どうせ、島原を経て、天草洋を横斷し、野間ヶ原の關所へかゝるのであるから、それ迄は、船のうちに寝る事にならうと、その點に迄、竹内の注意は、深く届いて居たのである。
 竹内の去つた後、平野は、すぐ外へ出かけたが、しばらくして歸つて来た。見れば、意外千萬、今迄の武骨な侍姿は、いつの間にか變つて、修験者の扮装になり、鬚の先を斬つて、後ろへ下げ髪にし、笈を背負ふて来たから、全く見違へるほどの早變りであつた。
 『うまく化けましたらう。これでは、平野國臣と見るものはあるまい』
 『なか／＼何ういたして、左様は見えますか。何う見ても、立派な修験者であります。そのやうな姿には、何故なられたのですか』
 『之れからが、一と芝居ぢや。上人は、唯だ拙者のいたす通りなされば、よいので御座る』
 月照は、微笑を漏して、軽く黙頭いた。
 船頭の外に、水先を一人頼んで、川を下る。その夜は、肥前の島原に着いて、船中に眠り、翌日は、風の荒い爲めに、船を出すことが出来なかつた。都合二日は島原で、二日を費すうちに、食物が盡きたから、人參の砂糖漬を買つて、飯を凌ぐことにした。第三日目には、順風になつたので、船を出した。天草の福浦まで来て、その夜は碇泊することにしたが、第一に米を求め、次ぎには、泊るところを探すが、差當つての急であつた。平野は、月照と重助を残して、獨り上陸した。
 濱邊の砂地を辿りながら、凡そ十町ばかりやつて来ると、向ふに一軒の家があつた。漁夫が一人て、餘念なく網を梳いて居るから、その傍へ寄つて、聲をかけた。

「これく」
漁夫は、顔を上げて、平野を見ると、逃腰になり乍ら、

「ヒエー」

「米を少し分けて貰へまいか、代金は相當に取りますが、どうぢやな」

「ヒエー」

「何も左様に驚くには及ばぬ。拙者は、島原から船にてまゐつたのぢやが、食に盡きて、困つて居るのぢや」

平野が、いくら繰返して、米の事をいふても、對手には、よく通じないらしい。尤も、此邊りには米が無いので、多く芋を食つて居るのだ。平野の詞は、筑前訛の侍詞であるから、充分に意味が、聞き取れなかつたのであらう。昔の落語にも、米を瓶の中に入れて、瘻のまじなひにする國がある、といふやうなことをよく聞いて居るが、米を食はぬところは、啻に此邊ばかりでなく、さうした所は、いくらでもあつた。

「米を分けて呉れることは出来ぬか」

「ヒエー、そんなものは有りませぬえ」

「米が無い、と申すのか」

「ヒエー」

「怖ろしいものではない。少くてもよろしいが、分けてくれぬか」

「米なんて……一ぺん見たことが、あつたツげが」

「ハ、ア、此島には、米が無いのか」

「ヒエー、無えんてがアす」

「米がなければ、他に何か食す可きものはないか、もし何ぞあるならば、譲つてもらひたい」

「別に、あにも有りませぬえが、芋なら有りや、す」

「なに芋とな、それは結構ぢや」

結構といふほどのものではないが、餓じいときの不味ものなして、芋に満足する外はなかつた。

「その芋を、譲つて貰ひたい」

「不可ませぬえ、賣ることは、出来ねえでがアす」

「それでは困るが、是非譲つて貰ひ度い」

「賣ることは出来ねえでがアすから、私にも困るさ」

「何ういたしたら譲つて呉れるか」

「あにか取ツ換えるなら、あんでも構はねえだから、取つ換える物を、持つて来さッし」

「よろしい、取り換へるものは持つて居る」

「そんなら、話は早えてがアす」

まことに朴訥なもので、物品の賣買をせず、交換をすると言ふ、古代の慣習を、未だ逐ふて居たのである。待つて居るうちに、芋を大きな箆に入れて、うんく云ひながら持つて来た。

「サアこれ丈けて、可えかね」

「これは澤山すぎる。持つて行くことが出来ん」

「ようがアす。私が、持つて行つてやるべい」

「それは忝ない」

平野は、何程かの金を、紙に捻つて、

「是は些少だが、取り換へる物の驗ぢや」

『ヒエー』
『都市では、これさへ特つて行けば、どんなものでも取換へることが出来る、まことに調法なものぢや、取つて置きなさい』

漁夫は、無雑作に請取つて、そのまゝ小さい笹の中へ入れた。金のことを知つて居るのか、それとも知らぬのか無雑作な取扱ひをして居るのが、實に面白い。

漁夫は、芋のはいつた笹を持つて、平野の跡から尾いて来る、月照主従と船夫は、腹を減らして待つて居た。
『漸く芋を求めてまゐつた』

『それは御苦勞でした』

『重助ツ、芋を焼いてくれ』

平野は、重助に申し付けて、枯枝の類をあつめさせ、之に火をつけて、芋を、その中へ押込んだ。しばらくして、こんがり焼けたのを引出し、皮を剥いた一本を、月照に與へ、自分も、むしやく食ひ始めたが、平野は、此芋を得るまでのことを、月照に聞かせ乍ら、美味さうにして幾本かを食ひ終つた。月照は、京都に居れば、貴紳の館に入して、芋などを飯に代へたことはない。如何に落人のはかなさとは云へ、實に情けないことだ。

平野が火を踏みつけにかゝるから、重助は驚いて、

『平野さま』

『重助、何か』

『私は、未だ少しも頂戴致しません』

『オー、さうであつたな、ナツかり忘れては舞ふた』

『忘れては困ります。生命をつなぐ芋ですから、私にも少し戴かせて下さい』

『いくらでもやれツ』

平野は、笹のまゝ、重助にさしつけた。重助は、これから火を強くして、焼いては食ひ、食ふては焼き、實にさかんなものだ。月照は、思はず笑みを漏して、

『腹も身のうちであるぞよ』

『重助は、芋と情死でもする氣でせう、ハツハ、、、』

重助は、恐縮し乍ら、

『まだ十本食べたばかりです』

一六

その夜は、福浦に一泊することには定めたが、此處には旅宿らしいものも無く、先づ泊る家を捜すことになつた。

平野は、再び前の漁夫を訪ねて、泊る可き家の周旋を頼んだ。

今度は、漁夫も、容易に引受けてくれた。一同は、その返辭を待つて居ると、やがて、漁夫は、引返して來た。

『さア、一しよに來なせえ』

『泊る家が、定まつたのか』

『ヒエー』

兎に角、疲れもあるから泊りを急ぐので、深い事は尋ねず、漁夫の跡から尾いてゆく事にした。

案内された家は、大して立派と云ふほどではないが、此邊の家としては、廣い方であつた。主人も、多少は身分の有るものらしく、その挨拶振から見ても、相當の人らしく思はれた。案内につれて、奥の間へ通つたが、疲れて居るから、主人の待遇を斷り、すぐに寝る支度をして貰つた。

月照と重助は、間もなく眠入ってしまった。けれど平野は、何となく寢付が悪いので、ちツと思案に耽つて、前途の事なぞを、考へ込んで居た。

時は、霜月の初旬であつた。壁の破れ目や、戸の隙間から、吹き入る風は、肌を刺すかと思はれて、僅かに一枚の煎餅布團は、此寒氣を凌ぐに、何の効もなかつた。暖國の海邊も、今年、寒に入るのが、非常に早い。殊に、其夜は、珍らしく冷たい風が、吹きすさぶのであつた。爐に折りくべた枯枝の残り、燃ゆる度びに、パチ／＼音を立て何となく物寂しく、それが耳障りになつて、眠りを防げるほどであつた。

翌朝は、東の白むを待つて、出立した。豫て船夫には、相當の金を與へて、舟に待たせてあるので、月照の一行が來ると、直に出船の支度をして、野間ヶ原の關所へつゞく海岸で、船を下りた。

幕府では、疾くから全國へ陟り、要衝の地を選んで、それ／＼に關所をつくり、往來の人を誰何せしめて、嚴重に旅人の出入を、取締つて居たのである。

これは要するに、不逞の浪人が、徳川に反抗することを恐れて、陰謀を未前に防ぐべく、東西の聯絡通復を、遮斷する爲めの方法として、どこの街道筋にも、關所なるものが設けられて、無免許の通行は、絶対に許さぬ、といふ制度になつて居たが、それと同時に、各藩の領地境にも、寬嚴大小、いくぶんの相違はあるが、みな關所の設けがあつて、出入のものを取締つて居たのである。

それにしても、薩藩ほどに、他國人の出入を嚴しく取締つた藩は、どこにも無かつた。宗教も一つに限られて、僧侶の往來にさへ、自由を許さなかつたほどであるから、その他の事は、想像し得るであらう。

國境から一里毎に、關所を設けて、自國の人と雖、無暗に出入はさせなかつた。充分に取調べて、いよ／＼差支へがない、と、見究めがつかなければ、決して出入はさせない。強ひて出入しよう、とすれば刀に訴へても、必ず拒んだものだ。その位に、取締を嚴重にして居ても、時には、他國から入込むものがあるので、若し、それを知つた時は、

直に立退を命じて、途中で殺してしまふのが、常式になつて居た。

左様した至難しい、關所の掟を破つて、月照を、連れ込まう、とする平野には、生命がけの覺悟がある、と共に、相當の工夫も、考へられてあつたのだ。

「上人、これだから、むづかしいのぢや。その覺悟をして下され」

「承知いたしました」

「重助ッ」

「へい」

「お前も、しツかりして居なければ、いかんぞ」

「へい」

「どういふ事が起つても、必ず上人の身邊を離れてはいかんぞ」

「何でも、拙者の爲る通りにして居るのぢや。よいか」

「へい」

やがて關所へかゝつた。平野は、大聲を以て、案内を申入れた。番卒らしいのが出て來て、

「案内を乞ふたは、御前方か」

「御番の侍衆に面會いたしたい」

平野の態度が、いかにも立派で、その口振が横柄であつたから、番卒も面喰つた。番卒の執次ぎで、關守の頭役は、

兎に角、一同を、門前へ入れた。

「我等は、京都より來りしものにて、日高存龍院へ、至るものなれば、お通し下され」

「割符は、御持參なされしか」
「如何にも所持いたした」
と、いつて、平野は、例の割符を、關守へ示した。

關守は、しばらく之を見て居たが、平野へ戻して、
「折角の儀ながら、お通し申す事は、相成りませぬ」
「何故で御座る」

「少しく所存も御座れば……殊に存龍院は、先日京都へまゐり、未だ歸國をいたさず、おたづねあつても、その
甲斐は御座るまい」

「たとひ不在なりとも、それ等のことには關係なく、兎に角、存龍院まで参りたく存ずる」

「何と仰せらるゝも、お通し申すことは相成らぬ」

「この割符があつても、相成らぬと仰せらるゝか」

「いかにも……」

「そりや、何故で御座る」

「ちと、考へも御座れば……」

きつぱり斷られて見ると、割符が偽物丈けに、もう一つ押す力がなかつた。流石の平野も、これには弱つたらしい。
「御不審のあつて、御通し下さらぬ、とあらば、止むを得ませぬ」
と、いふた儘、門外へ退いた。

月照、重助も、その跡から、悄悄として尾いてゆく。
野間の原ゆるさて今宵さつま瀧

しるへを波のうき枕かな
これは、月照の歌である。

野間の關所は、偽造の割符を、何うやら覺られたらしく思つたので、平野も、強て苦情を云はず、立ち去つたが、
併し、これから先きも、到る處の關所で、この通りに弱味を見せては、とても鹿兒島へ、はいることは出来ぬのであ
るから、平野も、深く考へて、一と工夫しなければならぬ、と、思案をしながら引返して、元の海岸へ出て來た。

「平野さま、何となされます」

「阿久根へ廻りませう」

「船番所のある所ですな」

「左様う」

「大丈夫でせうか」

「一度は、斯うして引返したが、この上は、決死の覺悟を以て、必ず通つて御覽に入れる」

「あまり短慮を起さずと、徐に御考へ下さい」

「御心配なさるな」

前に乗つて來た船が、未だ出帆せずに居た。船夫は、疲れ休めに、よく寝入つて居たのは、一行の爲めに、此上も

ない僥倖であつた。

「これ………船夫」

「ヒエー」

船頭は、驚いて眼をさました。

「これは、旦那さまでしたか、先程は有難う御座えやした」
「少し頼みがあつて参つた」
「何か御用ですか」

「他のことでもないが、モー一度やつてもらひたいのぢや」

「何處へ、行くので御座えやすか」

「阿久根の船番所の手前まで、やつては呉れまいか」

「へい、よろしう御座えやす」

「それは忝けない。賃錢の外に酒代もつかはずぞ」

「ありがたう御座えやす。お酒代と聞いちやア……ヘツ……」

前に與へた酒代の効目があつて、その上に、復た酒代と聞いて、船夫は、一も二もなく承知した。

船夫は、阿久根を指して急ぐ、急げば抄取るもので、はや阿久根へ來た。船夫には、酒代を、多く與へて上陸した。船番所の手前まで來ると、平野は、月照に向つて、

「時に上人、音に聞く、阿久根の關所て御座る。容易な事では通り難く思はれるが、拙者の考へた一策で押通すつもりぢやが、上人は、拙者の爲す通りにして、只だ黙々として、従いて來られたら、それで宜しい」

「然る可く御指圖を……」

「先づ拙者は、修験者の先達となり、上人は、醍醐三寶院の使僧と、偽るので御座るが、重助は、その下僕と稱し、關所の役人共を欺き、打ち通らんず趣向、なんと妙案で御座らうがな」

と、聞いて、月照は驚いた。何分にも僧侶のことだから、弱い所がある。それほどにして關所破りを爲る氣はなかつたのだが、さればといふて、他に方法はないのであるから、しばし黙然として、考へて居る容子を見て、平野は、

「只何事も、拙者に御任せ下さい。悪しうは計らひませぬ」
月照も、それに従ふ外はなかつた。

「仰せの通りに致しますせう」

「御承知下されて忝ない」

「その姿にて、宜しからうか」

「支度は、これに用意が御座る」

と、笈の内から取り出されたのを見ると、修験者の服装が、一と通り揃へてあつた。

柳川の小保で、平野は、これ丈けの用意をして來たのであるが、それには月照も、頗る感心した。

月照は、法師頭巾を戴き、肩からは袈裟をかけた。足には脛布をつけて、草鞋を穿いた。腰に帶せるは、京都を出る時、近衛公より拜領の小刀である。手に金剛杖を携へて、立上つた状態は、何う見ても、三寶院の使僧として恥かしからぬ。また平野は、髪はそのまゝにして、兜巾を戴き、一見して修験者の眞物である。重助は、藤次郎と改め、笈を背負ふて、月照の跡についで。

一七

斯くて、一行は、船番所の前へ來た。平野は、腰なる螺貝を取り上げて、ブーツ……ブ、ブーウと吹き立てた。「應」と答へて、出て來たのは、門を守る番卒である。

「見れば修験者の様ぢやが、案内を乞ひしは、何の用事か」

「この關を守る組頭は、何と云はるゝ御仁か」

「莊司帯刀様と仰せられる」

『その莊司殿に、御面會申したい』

『如何なる用事で御座るか』

『番卒の方々には、ちと申しかねる。是非とも莊司殿に御面會の上で、申述べたい』

番卒は、平野の口上に、少し不満であつたが、門の内へ引返した。しばらくあつて、以前の番卒が、出て來た。

『お通りなされ』

平野は、ズツと這入る。月照主従も、跡から續いた。縁端近くには、立派な侍が、控へて居た。

『拙者に面會を申入れたは、貴僧方か』

『仰せの通り、拙者等て御座る』

『その用事と申すは……』

『この關、通して下され』

『割符は、御所持か』

『その割符は、途中にて失ひました。貴殿のお見込みを以て、お許し下され』

『左様な譯には相成らぬ。割符がなければ通し難い』

『割符は無いとしても、御疑のなき上は、お通し下されて、差支は御座るまい』

『貴僧等の御姓名は、何と申さるゝか』

『これに在らせらるゝは、忝くも京都なる、醍醐三寶院の使僧、靜溪院鑿水と申さるゝ御方ぢやが、拙者は、同院の修験者にて、胎岳院雲水と申すもので御座る』

『然らば何用あつて、此國には來られしか』

『貴國の修験寺、日高存龍院に參る途次、此關を通過するもので御座るが、斯く相名乗り申す以上は、略ぼ御推察の

儀とは存ずれども、尙ほ委細を語り申さう。抑も三寶院の御門葉は、六十餘州の何れに到るも、靈山靈場を卜して設けあり、先づ伯州にては大山、備中にては赤瀧、豊前、豊後にては、彦山権現の名高く、鶴見之に亞ぐ。筑後の高良、日向の高千穂等、殆んど數ふるに遑なく、これ等の御門葉を訪ねんために、御院代と稱して、使僧の派遣される事は、例年の規定なれば、貴殿に於てもその儀は、豫て御承知の事と存ずる』

『御説明にて、一應は相分つたが、お訪ねの存龍院は、過日來、京都へ上りて、未だ歸り申さぬ。それを態々お訪ねあるは、如何なる次第か』

『在院せらるゝと否とは、我等の知るところにあらず、若し假りに不在なりとするも、お訪ね申すに何んの不審は御座るまい』

平野は、直に一生懸命であつた。得意の辯舌にまかせて、説き捲る、その熱誠は、面に現はれて、而かも、その態度には、凜乎として侵し難いところがあつた。けれども、相手の帶刀は、ちつと容子を、見詰て居るばかりであつた。

平野は、歩一步、縁端へ進み乍ら、

『斯く申述べても、尙ほ疑惑が御座るか』

『貴僧等の御身分について、もはや疑惑は晴れ申したが、折柄の京洛の騷動に、萬一にも怪しき浪人共が、姿を變へて、逃げ來らんもはかられずと、當國へ、出入の人は、嚴重に取調べよと、藩廳から、嚴重な御沙汰が御座るゆゑ』

『然らば、御尋いたすが、吾等を以て、三寶院御門跡の御名を騙るものと、思はれて、左様にいはれるので御座るか』

『左様の次第では御座らぬが、時節柄の事として、容易には御通しいたしかねる』

平野は、稍や顔色を變へて、月照の前に跪いた。

『御聞き及びの通り、この上は、最早止むを得ませぬ。疑はるゝは吾等の不徳で御座るが、このまゝには相成るまい、これより書面を認めて、この趣きを坊官へ申出で、更に朝廷の御沙汰を、待つ事にいたさう』

月照は、軽く首骨いた。
『藤次郎ッ』

『へい』

『其方は、これより書面を持つて、京都へ引返し、朝廷の坊官の御沙汰をうけて、すぐ立返へるやうにいたせ。それ迄は、この關外に在つて、私等は、待ちうける事にいたす』

『へい』

藤次郎には、何の事か判らないが、只だ返辭をして居る。月照は、平野の出鱈目を聞いて、只だ感心するばかりであつた。

平野は、やがて書面を認めにかゝつた。

帶刀は、これを見ると、縁端へ、膝を進めた。

『しばらく待たれよ』

『何故あつて、お止めなされるか』

『その御書面には及ぶまい』

『潔白の身の上を疑はれ、關さへ通れぬ、とある上からは、上申なす外に、取る可き道は御座らぬ』

『その手續は御無用、貴殿等に對する疑念は、一切晴れ申した』

『えッ、疑念は晴れしとか』

『如何にも晴れ申した』

『それ承はつて満足いたした。拙者とても、強て事は好まぬ。疑念の晴るゝからは、この儘お通し下さるか』
『望まるゝ如く、お通し申さう』

『添けなく存する。去らば仰せに従ひ、打ち通るて御座らう』
心のうちは、飛立つほどの嬉しさだが、わざと色にも出さず、ふみ出す足も、努めて緩々と、關所の門を出ると、思はず急ぎはじめた。

半里あまりも來てから、振返つて見ると、關所は、もう見えなかつた。

平野は、ほッと息を吐いて、道端に佇んだ。

『上人、骨が折れました』

『あなたの御配慮で、關所を通れました。何とも御禮の詞はありません』

『未だく、これから先きが、どうなるか』

『鹿兒島迄は、未だ關所がありませんか』

『二つ、三つ、續いてある、といふことで御座る』

『それにしても、彼の關守は、情けある人のやうに思はれました』

『いかにも、情けを知る侍で御座つた』

これから、一行は、道を急いでやうやく、鹿兒島の城下へはいつた。

一八

西郷は、月照に別れて、鹿兒島へ、歸つて來た。

下之關へ來た時、齊興侯が、歸國の途中である、といふことを聞いたので、その御跡を逐ふて、ひそかに拜謁を願つて出た。この頃には、西郷も、藩中の名物男として、老臣や重役にも認められ、齊興侯も、西郷には、注意して居られたほどであるから、すぐに内謁を許されたのである。

京都に、事件の起つたのは、候の出發後であつたから、多少は御承知でもあつたらうが、左迄に深い事情は、御存じなかつたのである。西郷から、だん／＼申上げたので、初めて事件の大きいことも判つて、ひどく御心配の容子であつた。

それとなく、月照の事も、申上げては見たが、これは唯聞き置く、といふ程度にすぎずして、藩で置まつて使はずとは仰せられなかつた。

西郷も、外の事と違ふから、強て公然に、お願ひすることも出来ないで、その儘に御前を退つた。

それから大急ぎで、鹿兒島へ歸り、月照を匿まふことについて、熱心に奔走をはじめたのであるが、どうも調子が良くない。藩の方針が、佐幕に傾いて居るらしく思はれた。

老臣や重役のうちにも、自分をよく理解して居る人も、いくらか居るので、それ等の人を訪ねて、だん／＼説付けて見たが、誰一人として『宜しい』といつてくれたものは無かつた。

却て、月照を、國へ入れることの危険を説いて、自分の身を案じてくれたものは、幾人か居たけれど、月照の事については、極めて冷淡であつた。

尤、老臣や重役のうちにも、月照を、知つて居るものはなく、陰謀好きな坊主、危険な人物だ位に、考へて居たらしかつた。

さ、そこで西郷は、すつかり行詰つてしまつた。近衛公へ、胸を叩いて、誓つた詞はあり、月照に對しても『俺ど、んが、引受けるから安心して居れ』と、いつて居る丈けに、重い責任を、負ふて居る譯だから、藩の事情が、いよいよ月照を、匿ますについて不利である、といふことになれば、どうして月照を救ふて可いか、その分別が、定まらぬ限り、月照を、迎へる事は不能のである。

流石の西郷も、此時ばかりは獲るほど、心を苦しめたのであるが、良い分別が、湧いて來なかつた。

『昔ツつア、おいでかな』

と、いひ乍ら、ずつと這入つて來たものがある。

見れば、その人は、例の有村であつたから、西郷は、丸い眼を光らして、びつくりしたのであつた。

『やア、俊齋か』

有村は、ニコ／＼し乍ら、席についた。

『足下、どうして來なすつたか』

『あんたが、下之關を出た、その翌日、すぐ立つて來たのぢや』

『急用でも起つたのか』

『否』

『それでは、何で歸つて來なすつたか』

『あんた一人では、事が面倒ぢやらう、と思ふて、手傳ふつもりで歸つたのぢや』

之れを聞いて、西郷も、疍疍には觸つたが、さればとて怒る事も、出來なかつた。

西郷の力で、纏まらぬ藩論が、有村の歸つた爲に、纏まる可き筈もなく、西郷と自分を、同じ位りの力あるものとして、手傳に歸つたと、いはれたのでは、その無邪氣さが可愛くなつて、叱言もいひなかつたのである。

『而て、上人は、どうしたか』

『那れから、白石兄弟の保護をうけて、九州へ渡り、跡は、北條右門が、必ず引うけるといふたから、安心して別れたのぢや』

『左様か、そりや御苦勞ぢやつた』

『藩廳の方は、どうぢやつた』

「未だ判らん」

「左様か、俺どんが、一と廻りして見ようか」

「まア、待てツ、うツかり騒ぎ廻ると、取返しつかぬ事にならう」

「それぢや、捨て置くのか」

「左様もなるまい」

「然らば、どう爲るのか」

「俺どんに考へがあるから、まかせて置け」

「左様かな」

「足下は、屋敷へ歸つて、ゆツくり休んで居れ。翌日になつたら、頼む事もあらう」

「それでは、屋敷へ歸る」

「うむ、さうしたら可からう」

有村を、ほどよく扱らうて、歸した跡は、西郷が、また一人になつて、考へに沈んで居る。

ところへ、平野が、突然やつて來た。

「やア、西郷さん」

「おツ、平野か」

「久しぶり御座つた」

「どうして、來居つたか」

平野は、聲をひそめた。

「上人を案内して、まゐつた」

「ヤツ、上人を……」

「福岡で、北條から頼まれて、これ送送つて來たのぢや」

「ふふーむ」

有村といひ、また平野といひ、西郷が、思ひ到らぬ事ばかりで、これには何とも考へが付かず、殊に、月照を、伴

れて來た、と聞いてはいよく困つた。

「上人は、どこへ來て居られるのか」

「存龍院へ、お預けして置いた」

「左様か」

「存龍院へは、長く置けないが、どうするつもりか」

「それは、何とか工夫するが、それにしても、どうして國境を、這入つて來たか」

「一と芝居打つたのぢや」

「そりや、どういふ譯か」

「斯ういふ次第ぢや」

と、これから平野が、くはしく物語つた。聞く事毎に、西郷は驚いた。

その所爲は、明かに關所破りである。無事に入國したのは可い、としても、之れが知れたら、それこそ、一大事である。

有村の輕卒、平野の放膽、いづれにしても困つたものだ、と、その跡始末を考へて、西郷は、しばらく思案に耽る

のであつた。

「いづれにしても、明日の事ぢや。今宵は、その儘にして置く外あるまい」

「これから、存龍院へ来て下さるか」
「俺、跡から行く事にしよう」
「左様か。然らば、拙者は引取る事にいたさう」
「どうか左様してくれ。上人にも、宜しういふて置いて下さい」
「承知いたしました」
平野の用談は、それですんだ。ところへ、家老の新納駿河から、使者が手紙を持って来た。その手紙には、
と、書いてあつた。

西郷は、返辭を認めて、使者に渡して、

「平野さん、御家老からの迎ひぢや」

「ははア、……」

「或は、此事についても知れないから、事に依ると、今宵は、行けぬ事にならう。あまり夜が更けたら、明朝はやくまゐる事にした」

「承知いたしました」

「失禮いたします」

「拙者も、歸る」

兩人は、ひとしく立上つた。

新納は、平常から西郷を慕ひして、何かと世話をしてくれる人であつた。夜に入つてから、急の使者は、月照の事

であらう、と、西郷は想像したのであつた。

新納に逢ふて見ると、矢張り想像の通りであつた。

「那れほどいふて置いたに、何故斯ういふことをしてくれた」

と、新納は、頭から叱言をいふ。西郷は、ひどく恐縮して、いろ／＼に申譯けを爲る。

「兎に角、存龍院へ置く事は、宜しくないと思ふ。これから城下の宿屋へ、移す事にいたせ。どう爲る、といふ事は

またの相談ぢや」

「重ね／＼の御迷惑、何とも相すまむ事でした」

「はやくいたせ」

「ハツ」

西郷の去る時、新納は、いくらかの金包をくれた。西郷の手元が、頗る貧しい事は、新納も、よく知つて居るので、情けある取扱ひをしてくれたのである。

大急ぎで、存龍院へやつて来て、月照に對面した。話は、後刻の事として、取敢へず轡へ載せて、柳之辻の俵屋へ案内し、三人を、やうやく泊める事にしたのは、既う初更に近い頃であつた。

西郷が、平野に逢ふたり、新納へ呼ばれたりして居るうちに、有村の身の上に、免れ難き災禍が、降つて沸いたやうに、起つて居た事は、誰れも知らなかつた。

有村が、西郷の家から、歸つて来ると、藩廳から迎ひの人が、来て居たので、すぐに出頭すると、同朋頭、數寄屋頭、茶道頭等の人々が、ずらりと並んで居て、有村を、訊問するのであつた。

「其方は、先きに江戸邸を出る際、國元の母が、病氣の旨を、申立て、居るが、確と左様か」

「相違ありませんぬ」

「然るに、其方は、途中、京阪の地に留まり、歸國の日程を遅延せしけ、いかなる次第か、包まず申立てなさい」
「江戸表を出立して、京地までは、晝夜兼行にて、道をいそぎましたが、京地へ着きますと、親戚の許へ、母の病氣も、追々快方に向ひたる趣、書面を以て、知らせのありし爲めに、しばらく京地に、足を留めましたに、相違ありませんぬ」

「京地へ、足を留めたるは、他に仔細あつての事であらう」

「……………」

「いかやうに申譯をいたしても、その儀については、既に取調済みであるに依つて、有體に申立てなさい」

「恐れ入りました」

「恐れ入つたか」

「ハイ」

「然らば、いかなる用件があつて、歸國の儀、遅延いたせしか」

「その儀は、憚かる次第あつて、申述べ難く存じます」

「憚かる次第とは、いかなる事か」

「事、天下の休戚に關する儀ゆゑ、重役方の外には、申上げられませぬ」

一同は、顔を見合せて、大概な事なら、都合よく取計つてやるつもりで居たが、あまりに生意氣な事をいふ、と思つて、一同は、しばらく訊問を控へ、此事を、國老の島津豊後へ、申告に及んだ。

豊後は、將曹の事である。嘉永の相繼事件には、久光派の立役者であつたのみならず、純な佐幕派の頭目であつた。茶通頭の申告を聞いて、有村の陳述を、心憎く思つたので、その詭方を、福永尙之進へ命じた。茶坊主の有村を、

國老たる自分が、訊べるのは餘りに輕々しい、と考へたのであらう。

福永が、訊の席へ着くと、有村の顔に、侮蔑の色が出た。

「其方、京地に滞在中の件に付、取調べる。左様心得る」

「ハツ」

「今日の取調は、國老の命に依り、拙者が、代つて行ふのであるが、國老の仰せは、其方を罪せよ、といふのではな
い。一と通り京地滞在中の事を、明白にいたし置け、との仰せて御座る。従つて、取返しつかざる失言のなきや
う、豫め注意いたし置く」

「御懇命之段、有難く存じます」

「京地滞在中の次第、包まず申立てなさい」

「その御答をいたしますには、先づ京地の状態から申述べることが御座います。抑も今日の天下は、いかなる有様か
といふに、幕府は、外夷の恫喝に恐れて、朝廷の御内意も伺はず、妄りに條約を結んで、國威を失墜せしめ、之れ
が爲めに、愛國勤王の志士は、四方に起つて、今や天下は、まさに亂れんとするの状態にあります。於此、不肖の
身をも顧みず、各藩の有志と共に、上は皇室の御安泰を謀り、下は萬民の苦みを除かんとして、その運動をいたし
て居りました。それが爲に、京地の滞在も、長く相成つた次第に御座ります」

と、臆面もなく述べ立てる。福永も、その大膽なるには驚いた。

「輕き身分をも思はず、天下の樞機に關する件を、私議いたすとは怪しからぬ。何人の許しを得て左様の運動に加は
りたるか」

「普天の下、卒士の濱、王士王臣ならざるなし。王家に勤むる、忠義の心は、身分の輕重に拘はるものでは、御座ら
ぬ」

「萬一にも、事を誤つて、君公の御名を傷くるやうの事があつた時は、何といたす所存であつたか」
 「愛國勤王の運動をいたして、君公の御名を辱むる事の起らう、とは考へて居りませぬ」
 滔々として強辯する。その元氣には、福永も、且驚き、且呆れるの外なかつた。
 「水府の藩士と、交際はなきか」
 「一番に多く交りましたのは、水府の人々であります」
 「書面の往復は、どうぢや」
 「しば／＼いたしました」
 「それ等の書面は、手元に在るか」
 「みな保存いたしあります」
 「速かに焼捨てるやういたせ」
 「ハッ」

其日は、それですんだが、家へ歸ると、禁足且謹慎の、命令が下つた。
 後年の樞密院顧問官、海江田信義の壯年時代には斯うした突飛の事もあつたものだ。

一九

月照を、俵屋へ、送り込んだ、翌日の晝過になつて、新納の迎ひが、復た西郷の家へ、やつて來た。
 すぐに行つて見ると、新納は、極めて沈んだ調子で、
 「まことに氣の毒ながら、月照は、城下へ置く事は出來ぬゆゑ、早速立退くやうに、取計つてくれ」と、いふのであつた。

新納の語るところに依れば、幕府の捕吏が、黒田藩の捕吏を、案内役として來て居る、との事であつた。
 藩論が、多く佐幕に傾いて居るところへ、幕府に逐はれた月照が、城下へ來たのであるから、之れを匿まふ筈はな
 い。
 新納に、多少の同情があればこそ、斯うして内談をしてくれるのだ。それに反いては、新納に相すまぬ事になる。
 「だん／＼の御配慮、有難く存じます」
 「月照の身に、疑ひの懸つて居るばかりでなく、其方に對しても、幕命は傳へられてあるのぢや」
 「俺どんに迄、追捕の手が届いて居りますか」
 「左様ぢや」
 「ふふーむ」
 「依つて、其方も、月照と共に立退くのぢや」
 「よいか」
 「ハッ」
 「今宵の月明を幸ひ、海を渡つて、日向界の法華岳寺へ、立退くやうに致せ」
 「承知いたしました」
 「長い事ではない。そのうちには、恩赦の御沙汰も下らう、と思ふ。短慮を起さずに、一先づ彼地へ渡つて、時期の來るを待ち居れ」
 「有難き御懇命、此上とも何分宜しく願ひ上げます」
 西郷は、新納の屋敷を出て、一先づ自分の家へ歸つた。
 新納の傳へた、藩命についても、それ迄には、種々の曲折があつて、其處に落付いたのである。

兎に角、齊彬の愛臣であつたから、大殿の齊興にも、一應は、お耳へ入れたのであるが、さすがに齊興は、月照の事も、また西郷の爲人も、よく知つて居られたから、

『たとへ、幕府の命にもせよ、月照は、達識の名僧であるばかりでなく、近衛公とも、深き交りあるものゆゑ、一應は、庇ひ遣はすが相當であらう。依て、月照は、種子ヶ島へ送り、松壽院の話し相手にいたすやう取計へ。また吉之助も、同じ島送りにいたし置くが可からう』

との仰せてあつた。

松壽院は、齊興の妹である。種子島家へ、嫁いで居たのが、今は、未亡人として寂しくして居るから、月照を送つて、話し相手にしようといふのであつた。

然るに、多くの重役は、齊興の仰せに反いて、日向送りにしよう、としたのである。

薩藩には、東目送とか、或は永送りとかいふて、少しでも面倒な奴は、たとへ他藩のものでも、日向界へ送り出して、途中で、ばツさり斬つてしまふのが、常例の如くなつて居たのだ。

されば、西郷は、新納から藩命を傳へられた時、もう是れは助からぬものとして、はやくも覺悟をしたのであつた。

夜に入つてから、西郷は、俵屋へやつて來た。月照は、一と眼見ると、すぐ覺つた。西郷は、手輕な旅支度をして居たから、さては立退きを命ぜられたな、と思つたのである。

先づ、平野を、入浴に送り出して置いて、西郷は、簡単に藩命の事を打明けて、これから日向へ行く旨を告げた。月照は、快く承知した。

平野には、いづれ船に乗つてから、くはしく話す、といふて、舟楫を起させぬやうにした。一同は、旅装を整へて俵屋を出ると、洲崎の大門口へ來た。

俵屋の周圍には、藩の捕吏が、遠巻にして見張つて居た。船へ乗る時も、海岸には、同じやうに捕吏が、それとなく見送つて居た。

船は、纜を解いて、はやくも岸邊を離れた。折からの順風を幸ひ、帆は、一ぱいに張られた。船足は、矢を射る如く、櫻島を、右に見て、左に、磯の御殿、その間が、薩摩の瀬戸と呼ばれて、日向へ行く、船道であつた。

時に、安政五年の十一月十五日、半天に高く澄む嫦娥は、恰も銀盤を研いだか、と怪しまれるばかりで、少しの曇もなく、輝々と海面を照す美しさ。波のうねくする度に、月影が碎けて、一段の風趣を、添へる状は、何と形容の詞もないほどである。

重助が、船夫を相手に、酒肴の用意にかゝると、平野は、艫の方へゆき、横笛を執つて、吹きはじめた。西郷は、艫の間に、月照と話込んで居たが、月は、いよ／＼牙えて、夜は、ますます／＼寂である。

『上人、この良夜に、船の旅路は、一だんの清興を感じ申す。那れに見えるのが、三船の岬で御座る。遙かに離れて磯の御別邸も見える』

と、しきりに西郷が、名所の説明を爲る。黙つて聞いて居た月照は、西郷の詞が切れた時、

答ふ可き限りは知らし不知火の

つくしにつくす人の情に

と、口吟さんだ。

月照は、急に立上つて、艫頭の方へゆく、西郷も、續いて立つた。兩人は、相並んで振仰ぎつゝ、澄み渡る、空を眺めて居た。獨り靜かに、平野が吹く、横笛の音は月に響き、水を渡つて、人の心に迄、泌み込む。

やがて、月照は、矢立の筆を取つて、懷紙へ、さら／＼と何か書いた。

『西郷さん、一首吟みました』

と、いつて、それを示した。

曇りなき心の月も、薩摩瀉

沖の波間にやかつて入りぬる

大君のためには何か惜からん

薩摩の迫門に身は沈むとも

月照は、既に死の覺悟を極めたのだ。明かに辭世の感慨を、漏した歌である。

二三度讀み返して、西郷は、

『上人、筆を……』

と、いつて、その筆を執ると、同じく懷紙へ、一首認めて、月照へ渡した。

ふたつなき道にこの身を捨小舟

波立てはとて風ふかはとて

兩人は、顔を見合せて、微笑を漏した。

平野は、いよ／＼興に入つて、得意の横笛に餘念もなく、心ゆくまで吹きつけて居た。

『あッ』

と、重助が、叫び乍ら、立上ると同時に、波音高く、月照と西郷は、相抱いて飛込んだ。

天心の月は、波間に、浮きつ沈みつして居る、兩人の體へ、その清い光を、浴せて居る。夜の静寂は、全く破られた。

不意の出来事に、平野も驚いたが、立上り乍ら、板子を取つて、投げ込んだ。

『船夫、帆を下ろせ』

と、叱りつけるやうにいふた。

けれども、船夫は、うろ／＼して居るばかりで、何の役にも立たぬ。平野は、小刀を抜くと、帆綱を切つた。

『飛込ッ、はやく引上げろ』

先づ平野が、先きに飛込んだ。之れに氣を得て、船夫も、飛込んだ。

重助は、京都育ちの身で、泳ぎを知らなかつた。

『お師匠さま。お師匠様』

船縁に縋つて、只だ叫んで居るばかりであつた。

平野は、月照を抱いて、船へ泳ぎついた。船夫は、西郷を引上げた。平野が、兩人に、活を入れて、先づ水を吐か

せる。代る／＼介抱したが、月照は、どうしても蘇生しなかつた。西郷は、蟲のやうな呼吸が、通ひはじめた。

『船を、元のところへ返してくれ』

『大門口へ、返りやすか』

『左様ぢや』

重助は、月照の體に、縋りついて泣く。平野は、腕を拱んだ儘、黙然として居る。船夫は、西郷の體を、しきりに

擦つて居た。

船が、大門口へ着いて、兩人を、俵屋へ運び込んだ時に、夜が明けかゝつた。

急報を得て、最初に駆けつけて來たのが、大久保正介であつた。續いて、弟の晋吾、大山格之助、有村俊齋、大

山彌助等の人々であつた。

(正介は、後の利通である。彌助は、巖の事だ。格之助が經良、晋吾が從道である)

藩廳からも、それ／＼に役人が来て、檢視を爲るのであつた。月照の死は、面倒が除かれて、といふ意味から見ても、藩としては喜んだかも知れないが、西郷の蘇生で、問題は、さらに大きくなりかけた。月照の屍骸は、藩廳の許しを得て、西郷の菩提寺たる、松泉山南林禪寺へ、葬る事にした。今でも、その儘に、苔蒸した石碑が残つて在る。

(月照の行年、四十六歳であつた)

重役の間には、蘇生した西郷について、種々の意見が有つた。新納はしきりに、西郷を救はう、として、辯説に努めた。

斯うなつて見ると、重役が、齊興の仰せに反いて、日向へ送らうとしたことが西郷の利益になつたのである。新納は、その點に、自分の説の根據を置いて、西郷の流罪處分を、強く主張したのであつた。

幕府へは、月照と共に、溺死してしまつたと届け出て、一切の責任を回避したが、現に生きて居るものを、どう爲るか、となつて姓名を變へて、島へ送れば、それで可い、と決した。

平野には、立退きを命じ、重助は、幕府の捕吏へ、引渡す事になつた。此時の幕吏は、白石潤太、松尾平三の兩人であつた。

哀れ重助は、師とも親とも、たとへ難き恩人を亡ふて、只だ一片の骨を携へ、捕吏に護られ乍ら、京都へ歸るのであつた。

今でも残る、清水寺の舞臺の傍、音羽瀧に臨んで、忠僕茶屋なるものが在る。それは、當時の住職から、重助の忠義に對して、永久に惠まれた株であつた。

(重助は、明治廿六年四月六日、午前十一時といふ刻限に、五十五歳を一期として、世を逝つた)

鹿兒島を、逐はれた平野は、大口の關通りへ、送り込まれて、既に生命の危かつたところを、大久保の注意で、繰りに死を免かれ、福岡へ戻る事を得た。

西郷は、健康の回復を待つて、大島へ送られる事になつた。此時に、菊池源吾と改めたのである。(西郷の祖先は、南朝の忠臣、菊池武光であるから、姓名を、斯う改めたのだ)

其後になつて、平野が詠んだ、長歌があるから、それを掲げて、此項の終了を告げよう、と思ふ。花の都も 秋は猶ほ 夕淋しき風情なり 名は流れたる清水や 落ち來る瀧の音羽山 木の葉 色付く折柄に 散るや紅葉の散り／＼と 亂れゆく世の浪華江や 蘆のさわりはしけくとも なほ世の爲に 身をつくし 盡さんと

ても 筑紫瀧 波影の岸のなみならぬ 操を何時か深緑 色も變らぬ青柳の 驛路越えて香榎瀧 多々良の橋をうち渡り 千代の松原千代かけて 萬代かけて君か代を 千歳の松に粧へつゝ 神に歩みを箱崎の 社にかけし四つの文字 筆の主を よく問へは 延喜の帝 かしこくも 御手をは下しませりとぞ 茲も昔は石疊 重ね／＼し

白浪の 寄せし例を忘れしと 恨み浦半の夕禪 かけて嘆くも哀れなり 濡衣塚の濡衣 我身に着たる心地せんやがて博多の假住居 此處も浪風さわかしく また行く先は薩摩瀧 沖の小島にあらねとも 心細くも都にて 誰か哀れと思ふらん 頼る心は筑紫人 一人の他に打明けて 語らう友も浮枕 浪路隔てゝ 野間の關屋の關守に

せきとめられて また船に乗れとも それと寄る方も 波にゆられ行く先は 黒の瀬戸てう 名も憂しや やがて鹿兒島 籠の鳥 翼縮めて潜みしか また木枯におとろきて 日向を指して船出せし 日は神無月 望の夜の 傾く月と諸共に 照輝きて曇なき 身は大君のためにこそ 茲に一人のさつま瀧 いかなる縁 さきの世の 契も深き御舟沖 底の藻屑となりぬるを 乗合ふ人も 船人も 權の雫も露ほとも さりとは知らず白波の 立ち騒げとも

甲斐そなき なほ東雲の明鳥 啼くより外そなかりけり

(神無月とあるが、その夜は確に十一月十五日であつた。爲念しるし置く)

大島の南洲

十二月中旬には、西郷の健康も、漸く舊に復した。元來が、強壯な體で、只だ水を飲んだといふ丈けのことであるから、疲れが無くなれば、舊體に返へる譯だ。俱に死を期して、投身した對手は、思ふ通りに、死ぬことを得たのに、自分は、何の因果で、斯く蘇生つたのか、介抱して呉れた人が、恨めしくも思はれた。この上は、藩命に由つて死を待つ外はないが、萬一にも、幕府へ、引渡されるやうな事にもなれば、それこそ恥の上塗で、その場合に死んだとて、何の甲斐もなく、大死となるのであるから、さすがの西郷も、此時には、神經が亢奮して、死を急ぐ心は、い、たびか起つて来たが、何分にも番人の注意が厳しくて、どうする事も出来なかつた。

新納駿河から、迎ひの使者が来たので、すぐに新納の邸へ、遣つて来た。

「御沙汰に由りまして、罷り出でました」

「元氣は、回復いたしたか」

「このたびの一條は、何とも赤面の至りに存じます。斯く生恥を晒して、御沙汰を相待ちまする、私の胸中、幾重にも御察しのほど、願ひ上げます」

「其方に對する、處分が決したのぢや」

「ハッ」

「遠島の御處分に相成るらしい」

遠島處分と聞いて、西郷は、熟と考へ込んだ。

新納はぐつと膝を進めた。

「この御處分は、大殿様の御思召に基いたものであるが、其上にも、亡き先君の御愛臣とあつて、遠島とは決したが御扶持米は、之れ迄の如く、下賜はることに相成つたのぢや」

と、新納の申渡を、聞いて居るうちに、涙は、留度もなく出て来る。亡き齊彬侯の御顔が、眼の前に、判然と見え

て来た。

萬感、胸に迫り、今は席に堪へかねるの思ひをして、體の熱くなるのが、自分に判るほどであつた。

「大殿様の厚き御思召を忘れず、遠島中は、深く謹慎して、徐かに時期の來るを待つ事にいたせ」

「ハッ、只だ涙の外は御座りませぬ」

斯うなつては、妄に死ぬことは出来ぬ。先立ちし月照には相濟まぬが、自分は、生き長らへて、君家の爲めに、再び活動をづけよう、と堅く覺悟をした。

安政五年の極月三十日が来た。今日は、西郷が、大島へ送られる日であつた。

明日は、大晦日である。もう一日経てば、新玉の春が來るのだ。その楽しい春を迎へやうとして、武家も、町人も目まぐるしいほどに忙しいが、この年の瀬を、越える爲めには、大概なものは一と苦みするが、それでも眼の前に、春といふ樂みがあるので、誰しも辛抱を爲るのだ。

けれども、今の西郷の家には、その樂みはなかつた。前の晩から親戚や知人が、集つて来て、頻りに慰めてくれるので、西郷は、それを心から嬉しく思つて、無理からに、元氣を出して、みなを安心させよう、として居るのであつ

た。そのうちに、夜も明けて、掛りの役人が来た。餘り多人敷で、見送るのは宜しくあるまい、とのことであつたら、大山助八、椎原權兵衛、市來六左衛門、大久保市藏、吉井幸助、有馬一郎、大山彌助等の人々丈けは許されて、海岸迄やつて来た。

助八と六左衛門は、妹婿であるが、彌助は、後の巖で、助八の弟である。椎原は、伯父に當り、一郎は、恩師であつた。

大島へ渡航には、砂糖船といふのがあつて、一年に幾回といふもの、琉球諸島から、砂糖を積んで来る船があつてそれを唯一の便船として、この外に便船はなかつた。

大島は、琉球の所屬で、一名を小琉球とも謂ふた。慶長十四年に、島津家が、琉球を征伐した時に、割いて取つたのだ。大島、徳之島、喜界島、沖之永良部島、興論島、之れを奄美群島と稱して、大島が、其のうちでも一番大きい。東西十里、南北五里、周圍が六十里ある。鹿兒島を距る八十里、琉球を距る七十里、鹿兒島と琉球の、真ん中に當る。文化文政の頃から、外國船が、屢々渡來するやうになつて、さかんに貿易が營まれた、名瀬の港は、島津家から公許された、貿易港である。東の海岸は、概して絶壁だが、西の海岸は、灣も多く、良港にも乏しくない。風俗は、琉球が母國だから、自然それに化して居る。氣候は溫暖で、米の收穫は、殆んど無く、島民の多くは、芋を常食にして居る。物産として世に聞えて居るのは、疊表、芭蕉布、例の袖等である。

死別にまさる生別の悲み、流石に骨肉の吉次郎、晋吾、小兵衛等は、兄の袂に縋つて、啜り泣く。船は、帆を張つて、最早沖へ出た。親戚知人は、やがて幼弟等を慰めて、それ／＼に引取つた。

西郷を載せた船は、鹿兒島から十三里餘、山川の港へ寄つて、それから大島へ向ふ。海上は、至極穩かであつた。安政六年正月二日の早朝に、大島の西北隅、名瀬の港に着いた。

當時、島を守る役人は、詰役、片役、横目の三つに分れて、詰役が、上官である。木場傳内といふものが、それを務めて居た。明治になつてから、文部省で一時鳴らした、木場貞長は、傳内の伴である。西郷は、送りの役人に連れられて、役所へ來ると、木場の取扱ひは、非常に懇切を極めた。西郷の喜びは、地獄で佛に逢つた、といふ諺の通りであつた。

齊興から、木場には、特に内命があつて、西郷の保護を爲せたのである、とも傳へられて居る。

一一

木場は、情けある武士であつた。西郷の身については、兼て聞いても居るし、今度の流罪も、畢竟は他の爲であつて、自分の愆から、起した事件ではない。それと知つて居たから、従つて、萬事に親切な、取扱ひもしたのであらう。島へ送る迄は、藩廳の責任であるが、島へ來てからは、島の役人が、總べて處分を爲るのである。木場は詰役といふて、即ち上官であるから、西郷の行先丈けを定めて、それから毎日のことは、更に與人といふものがあつて、それに命じて爲せるのだが、與人は、内地でいふ村長と同じものである。

名瀬から五里ばかり離れて、龍郷と稱する所があり、大きな灣を控へて、立派な町を爲して居る。海岸に沿いて百五六十戸、山手の方へ寄つて七八十戸、ずつと山の間へ、はいつて百戸餘り、その部落を、總稱して龍郷といふのであつた。

島では、此小部落を指して、間切と呼んで居た。全島を分つて、笠利、龍郷、宇檢、久茲、西方、東方、住用、喜瀬、古見の九つになつて居るが、そのうちの龍郷を選んだのは、龍郷の與人、秦龍といふものが、親切氣のある、柔順い性質のものであるから、それを見込んで、木場は、西郷を托したのであつた。

西郷は龍郷へ送られて、秦龍に面會した。木場からは、特別の申送りがあつたので、秦龍の取扱ひは、非常に丁寧であつた。懸崖の上に、見晴しの宜い所を選んで、萱葺の小屋をつくり、それへ西郷を入れることにした。打ち寄せ

る高浪が、唾を洗ふ音、物凄く、颯々として、吹き来る潮風が、心耳を澄すも面白し。
乍去、絶海の孤島に、罪を得て、長き幾年かを過ごさねばならぬ、現在の身の上を思へばいかに、斷念めても、時には人知れず悲憤の涙を絞ることもあつた。

風もなければ、日も麗かな、今日は、まことに好い天気であつた。ぶらりと、小屋を出た、西郷は、磯邊傳ひに、漫然歩き、足の疲れも忘れて、自然の風光に、心の塵を浄め乍ら、笠利の方へ、やつて来た。

遙に背後の方で、呼ぶ聲が爲る。西郷は振り返つて見ると、頻りに手招きをして居るものがあつて、遠目では、判然と判らないが、島の人ではないやうだ。

やうやくに近付いて、姿も、顔もはつきりと判つた。

「ヤツ、重野ではないか」

西郷が、思はず叫んだ。

その男も、嬉しさうにして、

「ヤア、西郷どん」

「どうして、足下は、此島へ来たのか」

「まア、あんたも、無事で可かつた」

「俺どんの住居へ、來んか」

「まゐらう」

「いろ／＼話もある」

「わしも、聞き度い事がある」

兩人はこれから、併れ立つて、西郷の住居へ来た。

この人は、重野孝之丞と謂つて、元は、藩校の助教を勤めて居たが、齊彬が在世の當時、優秀な書生を選抜して、江戸へ遊學に送つた。重野は、その取締として、出府を命ぜられたのであつた。

江戸へ着いてからは、昌平黌に入學して、頻りに勉學して居ると、その一列に、池田喜左衛門といふのがあつて、頗る吝嗇な奴であつた。一切の交際もせず、出すものは總て御免蒙り、舌でも、容易には出さぬといふ奴であつた。

この池田を驚かしてやらうと、いふ相談が起つて、幸ひ重野が學費の通帳を、預かつて居るので、池田の印形と稱して、三文判を捺し、重野が、池田の代人になつて、その學費を受取り、一同て飲んだり食つたりして了つた。やがて

池田が、之れを知ると、火のやうになつて怒つた。重野へ、池田が、嚴談に來て居ると聞いて、他の連中が、集つて來て、池田を、袋叩きにしてしまつたので、池田は、此事情を、書面に認めて、重役へ届け出たから、さア、事は、甚だ面倒になつて、冗談では済まなくなつた。重野は、謀書謀判の罪で、切腹にもなる可き所を、重役の情けて、遠

島に處せられた。

重野が流罪になつたのは、西郷よりも、ずつと前のことであつたが、當時は現代のやうに、新聞がなかつたので、同じ藩中の出來事でも、京都に居て、江戸の事を知るには、十數日の後でなければ、容易に判らなかつた。殊に、西郷は、藩邸に居るといふのは名ばかりで、その實は、東西に奔走して、國事に盡して居たから、外泊する方が多く、殆んど席の温まるに、遑なきの境遇で、重野が、流罪を申付けられたことは、少しも知らなかつたのである。

重野は、西郷が來た、と聞いて、その喜びは尋常ならず、流罪人も多く居たが、談話の對手になるやうなもの、更に無かつたので、頗る無聊に苦んで居たのだ。所へ、西郷が來たのを知つたので、今日は、樂みにして尋ねて來たのであつた。

此人が、後年の文學博士、重野安綱である。

西郷には、十八俵の扶持米を、下さることになつて居た。流罪人へ扶持米を下さる、といふのは、例の無い事であるが、先君の齊彬が、愛して居た、といふ事もあり、今は、大殿の齊興から、お聲懸り、といふので、斯うした取扱になつて居たのである。

然るに、多くの流罪人や、島の人が、西郷のことを聞いて、それ〴〵見舞に来て、見れば米の俵が積んである。支給物の食糧に、苦んで居る連中のことでもあり、芋ばかり食ふて居る、島の人が、米俵を見ては、とても堪まつたものではない。心の喜びを押し隠して、遣つて来ては、御手傳と唱へ、格別の用事もないのに、殊更に永居をしては、食事にありつく、といふ始末であつた。西郷は、何時もニコ／＼して、更に拒むことなく、賑かに暮して居たが、與人の家よりか、出入のものは、多いので、三ヶ月ばかり経つと、扶持米は、無くなつて仕舞つた。

斯うなると、訪ねて来るものは稀になつた。兩三度は、與人へも、扶持米の下渡しを、申込んで見たが、更に何の沙汰もなかつた。少しばかり残つた米は、既に盡きて、今は一粒もない。けれども、西郷は、強ひて請求も爲すに日を送つて居た。いかに英雄でも偉人でも、腹の減くこと丈は別だ。自分は堪忍しても、生命の方で承知しない。絶食となつては、日々に衰弱へてゆくばかりである。それでも平然して眠て居た。

年に、十八俵と定めて、與へられる米を、他人に食はせることは、自分の勝手であるから、それが爲に、米は無くなつても、強て請求は出来ぬ筈であるが、それを食ひに集つて来るものを、快よく迎へて、拒絶もせず居たといふのが頗る面白い事で、普通の人間にはちよつと出来ない事だ。

重野は、しばらく病氣に罹つて、西郷を、訪ねずに居たが、漸く快方に向つたので、今日は、久し振りで、龍郷へやつて来た。

意外千萬、西郷は病氣らしいのであつた。よく見ると、身體は、左迄に瘦せては居ないが、顔の瘻れは著るしく、頬骨が出て、眼は、窪んで居る。肉色も、艶が抜けて、蒼白色になつて居た。

「貴下、何うしたのか」

西郷は、只だ點頭くばかりであつた。

「薬を飲ましやつたか」

「薬は、飲まぬ」

「病氣して居乍ら、薬を飲まぬのは不可んよ」

「イヤ、薬は飲まんでも、飯さへ食へば癒る」

「何ツ、飯を食へば癒ると」

「うむ、飯を食はんからのう」

突然に聞いたのでは解らない。漸々聞いて見ると、扶持米が盡きて、下渡しを願つたが、下渡しして呉れぬから、食はずに居た、といふのであつた。重野も、これには驚いた。

「如何に下渡しがないからといふて、その儘ま、食はずに居るとは、貴下も、詰まらぬ勘忍をしたものぢや。わしが之れから嚴談して、扶持米を、下げて来る」

「まア、捨ておいて下され」

これほどになつても、斯んなこと云つて居るのだ。大勢で来て、食ひ倒したから、米が盡きた、といふ事情は、西郷が語らなかつたから、重野は知らないのだ。それは西郷が云はないのだから分らない。

四

重野は、腹立紛れに、秦龍の家へ、飛び込んで来た。

「秦龍どん、居るか」

怒鳴った聲が、大きかつたので、秦龍は、驚いて出て来た。

「重野さんか」

「足下は、怪しからんぞ」

眼を光らせて睨みつけた。秦龍は、温順な人だから、一縮みに縮んだ。

「何の事か、私には、少しも解りません」

「解らぬ筈はない。何故、足下は、西郷どんへ、扶持米を送らぬのか」

「扶持米は送つてあります」

「馬鹿を吐くな。送られたものを送らぬ、といふやうな、卑しい人ではない」

「それでも、慥かに送つてあります」

「足下は、送つたといふても、現在一粒もないのが、何よりの證據ぢや」

「エツ、一粒もありませんか」

「西郷どんは三日も四日も、食はずに居るのぢや」

「半歳分だけ、九俵送つてあります」

「足下は、何といふても、全く無いのぢや」

秦龍には、重野の言ふことが、何うしても信ぜられなかつた。重野にも、秦龍の語るところに信を置けなかつた。

其處で、兩人は、連れ立って、西郷の小屋へ、来て見ると、重野が言ふ通り、米は、一粒も無かつた。兩人から、交

交尋ねられたので、西郷も、終に今迄のことを打明けたから、既定の糧米は大勢に食はれたのだ、といふことが判つ

た。秦龍は、西郷の心の大きいのに驚いた。重野も、感服して仕舞つた。

秦龍は、食物を運び込んだ。心の底から、西郷に感服してしまつて、一層注意を爲るやうになつた。一人では不

由であらう、との注意から、娘のあいがなといふのを、西郷の傍へ、置くことにした。大島では、婦人の名の下へ、

がなといふ字をつけて呼ぶ、あいがなとは、内地でいふ、お愛さんと同じ事になるのだ。此娘が、美人といふほどで

はないが、濼皮の剥けた、島には、稀れた容色であつた。島の女は、元來が親切である。男に對する愛情も、西郷を

偉い人である、と思ふて、且は、父からの命令もあつて、親身の介抱を盡したので、西郷も、何時か、憎からず思ふ

やうになつた。

何方を見ても、波ばかりの孤島である。殊に巖の上の一軒家。若い男と、若い女の差向ひ、これが何とかならずに

居たら、天下に不思議はない。西郷がいかに偉からうと、この道は又格別だ。何時か知らず、夫婦のやうになつてし

まつた。

そのうちに、秦龍が、之れを知つて、重野にも、相談の上で、西郷へ、掛合ひに及んだ。西郷も、顔を赤くしたが

例の通り、ニコ／＼笑つて居るばかりであつた。

それから、公然の妻である。他に仕事もないから、勉強もはげしかつたのだらう。翌月から妊娠した、といふや

うな譯で、あいがなは、産の紐を解いて、生れたのが男の子であつた。名を菊次郎とつけて、憂きが中にも、その喜

びは別であつた。

(菊次郎は、京都市長になり、また臺灣の宜蘭支廳長にもなつたが、職を罷めて、野見島へ歸り、最近迄、存命で

あつたが、今は此世の人でない)

妻を迎へ、子も生れたので、島人の信用は、益々厚くなつた。其處で、島廻りを思ひ立つた。秦龍の口添へで、願

つて出ると、之れを許否するのが、詰役の木場傳内である。直ぐに許して呉れた。船の支度にかゝつて、愈々出發と

いふことになつた。

五

大島も、近年に至つて、非常に衰微し、昨今では、殆んど自滅の状態にある、といふが、その上に名物の颱風に襲はれて、打ちつゞく損害は、島の人の力で、とても補足し得まい、と聞いて居るが、政治の力で、之を救ふ事は、果して出来ないものか。

島人は、概して無智に近く、また怠け者が多い、とも聞いて居るが、もつと経済的に、島の回復を謀る事にしたら、どうであらうか。島人が、先づ目覚めて来れば、其處に政治の力も動いて来て、救済の道も立つ、といふものだ。

西郷が居た頃の大島は、昨今の状態よりか、ずつと良かつたのだが、それにしても、大したものではなかつたのは、いふ迄もない。

島の女は、いづれも柔順で、よく働らく。殊に、良夫に對して、貞操の正しいことは、實に驚くほどであつた。傳説に依れば、土地の奇習の一つとして、結婚の當夜に、その式を終ると、婿さんは、直ぐ娼婦を買ひにゆく。これは嫉妬を禁ずる爲めに、先づ結婚の當夜、之を示して置くのである、といふが、變な事を行つたものだ。

また、ヒザといふものがあつて、内地でいふ所の奴隷だ。島の富豪は、その雇人の多きを誇り、雇人の數に由つてその家の地位を定める、といふほどである。雇人が、主人の家で、子供をつくと、その子供は、主人の家で、一生使はれることになつて居たのだ。之を稱して、島の人は、ヒザと呼んで居た。同じ人間でありながら、主人の家で生れたばかりに、その一生を、主人の家で送る。實に憐れなものだ。ヒザであつた。西郷が巡島中に、最も注意したものは、このヒザの制度で、終に歸つて来てから、解放の建言をして、その習慣を破つた。

ヒザよりも、猶ほ弊害のあつたのが、巫女である。琉球王の實母や祖母、或は伯叔母孫といふ、未亡人が、之れを取締つて居たのだ。各村落に、數名の巫女があつて、祭事は一切、その指圖に従ふ事になつて居る。吉凶禍福から、疾病に至るまで、之れに伺ひを立て、その指揮を仰ぐのである。されば巫女の勢力は、實に畏る可きものがあつた。何事に限らず、島人は、巫女に、左右されるの傾きがあり、迷信から起つた、巫女の勢力ほど、恐ろしいものはなかつた。或場合には、領主の島津侯よりも、巫女の方が、重く見られたほどであつた。

西郷は、之れに眼を注いで、島人の迷信が、これ迄に深くあつては、一時に廢止を命ずる、としても、容易に行はれるものでないから、先づ疾病の祈禱を禁じて、醫業に親しむやうに爲せ、追々に、巫女の勢力を、弱くすることに努めたのである。

その他、巡島の結果として、西郷が、大島の制度や習慣に注意して、改革を加へたことは、少なからず在つた。島津家から見れば、大島は其寶庫であつた。奄美郡島は、琉球王の所領、十二萬七千石のうちの四分一を有する、富貴の島であつて、大島は、其うちの最も大なるものである。島津家では、此群島から、收穫つて来るものを、御臺所料と稱した位で、年貢は一切、砂糖を以つてする定規であつたが、一年に、十萬兩位は見込まれた、といふことである。

元來が、通貨のない所だから、米を以て、通貨の代りにした。米幾升、砂糖幾斤、日常の雜品に至るまで、皆な米を以て交換した。それに今日で謂ふ薩摩芋、その實は、大島の産物であつた。細民は、米の代用に、芋を食つて居た。山川港のもので、利右衛門といふ人が、その種子を持ち歸つて、試に植つたのが、地味に適して、大層よく出来た。年と共に、全國へ行渡つて、今では、之れを、薩摩芋と稱するに至つた。

西郷は、島に在る間も、絶えず何か行つて居た。小屋に落ちついて居る時は、子供を集めて、手習の教授を爲るか、大人を寄せて、世間の話を聞かせるとか、空しく日を送るやうなことはなかつた。従つて、島人の尊敬もふかく

流罪人てこそあれ、龍郷の先生といへば、誰れでも知らぬものは、ないやうになつた。
在島三年、文久二年の二月、岡らずも、赦免の御沙汰が下つた。

戊午疑獄後の三年

一

戊午の疑獄に依つて、京都に於ける、倒幕派と、攘夷論者は、全く一掃されてしまつた。併し、それは、只だ表面に現はれた、假装の事實で、之れが爲めに、倒幕派と攘夷派の側が、全く死滅したのではなく、一時的に閉息した、といふに過ぎなかつた。

井伊大老が、空前の暴断を以て、反幕派の志士に、非常な壓迫を加へたけれど、猶ほ之れに反抗する、氣分を有つたものは、各藩を通じて、少なからず在つた。殊に、水戸の連中は、非常に憤慨しつゝ疑獄の成行を、ぢつと見て居たが、老公の齊昭が、駒込の別邸へ、無理に押込められた一條については、どうしても忍ぶことが出来なかつた。

その間に起つたのが、例の齊頼の問題であつて、それが爲めには、多くの脱藩士もあつて、別れ／＼に、江戸へ這入つて來た。

それ等の人の間に、ひそかに企てられたのが、井伊を斃さう、と爲る計劃であつた。

高橋多一郎、金子孫次郎の兩人が、その首謀者であつた。佐野竹之助、鯉淵要人、杉山彌一郎、蓮田市五郎、海後
鏖球之介、稻田重助、廣木松之助、關鐵之助、増子金八、岡部三十郎、森五六郎、大關和七郎、森山繁之助、山口辰
之助、廣關子之助、齋藤監物、其他の人々であつたが、別に、薩藩士の有村治左衛門が、之れに加はつて居た。

薩藩のうちにも、急進派と漸進派の二つがあつて、急進派は、無理にも押進んで、時局を打開しろ、といふのであつた。漸進派は、今しばらく成行を見て、徐かに進んでも、遅くはないといふのであつた。

急進派の頭目ともいふ可きは、大久保市藏であつた。その派に属するものには、大山彌助、有村權助、有村治左衛門、三島彌兵衛、西郷晋吾、大山格之助等の連中も居た。

井伊大老の専横を憎み、その對策を相談した結果が、一同打揃ふて、江戸へ乗出すといふ事になつた。

『現在の時局を、有利に展開する策としては、先づ井伊大老を斃して、幕閣の人々に、恐怖の念を起させるのが、最も必要である。また、その快學が、一たび傳はれば、各藩の有志が、之れに習ふて、それ／＼に颯起するであらうから、そこで時局には、一大變轉が來るに違ひない。斯くて、薩藩が、天下に率先して、尊皇斥幕の義學に、第一指を染めた事にもなる。去就を曖昧にして、態度を定めぬ藩も、大老が斃されたのを見れば、幕府の權威が、既に地に落ちた事を悟つて、俄に奮起するのは必定であるから、我等は大決心を以て、東上する事にしよう、就ては萬一にも失敗して、藩へ迷惑をかけては相すまぬから、先づ脱藩してからにしよう』

と、二十餘名が、連署血盟して、いよいよ脱藩の支度にかゝつた。

此事が、はやくも漏れて、久光の知るところとなつた。平生から急進派のものには、深い注意を拂つて居たので、その秘密も、はやく知れた譯であるが、久光は、非常に憂慮して、一同の密會して居るところへ、自ら乗込み、懇々と説諭を加へた。

『左様な壯學を爲れては、却つて天下を誤ることにもならう。しばらく陰忍して、時局の推移を待つことにいたせ。いよいよ事を起す場合には、余が先頭に立つて、お前等と、必ず一しよに始めるから、今度の企ては中止してくれ』

と、いふて、久光が、熱心に説き付けたので、一同も、すつかり恐入つて脱藩東上の事は、終に中止してしまつた。その代り、有村治左衛門が、兎に角、江戸へ出て、狀況の觀察を遂げる、と同時に、各藩の有志と聯絡を堅くし

他日に備へる事にしよう。且つ事と場合に依つては、有村が代表的に、臨機の處置を、取つても苦しくない、といふのであつた。

有村の東上は、斯うした事情からであるが、初め千葉周作に師事して、北辰一刀流を修めた。尤も、有村は、藩中に於ても、屈指の劍客であつたが、千葉の教へをうけて、その技倆には、一層の凄味を加へた。麻布の十番に、道場を開いて、しきりに同志と往來して居たが、水藩の高橋金子とは、殊に親しくして居たので、兩人から、密書をうち明けて、相談をかけられた。それが、井伊大老を斃す事であつた。

有村は、一も二もなく、喜んで之れに應じた。水藩の十七人へ、薩藩の有村が、只一人丈け加はつて居たのは、斯うした事情からである。

萬延元年三月三日、上巳の節句、その日は、稀れに見るの大雪であつた。先づ愛宕山に勢揃して、放れ／＼に櫻田門外へ、集つて來た。

所へ、井伊大老は、行列を揃へて、やつて來た。輜脇には、一流を究めた、腕利が、ずらりと列んで、嚴重に警戒をして居たが、折柄の大雪に、多少の油断もあつた。

その油断に、附け込んで、斬り捲つたのであるから、此大雪は、浪士側に取つて、頗る有利であつた。川西忠左衛門を始め、井伊側の腕利は、枕を列べて、其場に斬死した。

有村は、先供の飾槍を奪つて、暴れ廻つたから、それが爲に、行列が亂れた。川西の如き、二刀の達人も、有村の鋭い、切先を避け得ず、空しく斃れたのであつた。

井伊の首も、有村が打つたのである。その首を、刀の先に、突き通して、名乗をあげた時の有村は、實に勇ましいものであつた、と傳へられてある。

此一擧は、有村を得て、水戸の浪士は、全く成功した、といふて然る可きである。

井伊が斃れて、安藤對馬守が、やうやく頭を持上げて来た。政治家としての實質は、井伊よりも安藤の方が、遙に富んで居た。

阿部伊勢守と、井伊大老が、條約に調印したのは、第一、第二の人であつたが、その跡の攘夷熱は、實に恐ろしい勢を以て、進んで来たのである。

それに對抗しつゝ、外夷に接觸してゆく、安藤の態度は、まことに堂々たるものであつた。

或は、ハルリスを自分の屋敷へ招いて、長夜の宴を張り、或は、御殿山へ、各國の公使館を、一と纏めにする、計畫を立てたり、攘夷派の脅迫に怖れず、世間の非難に關はず、行る丈けの事は、行つて退ける、といった態度は、月並の老中に、とても出来る事ではない。

殊に、兵庫と大阪の開港期限が近付いたので、之れを延期せしめようとして、竹内下野守、松平石見守、京極能登守、此三人を、遣外使節として、歐米へ派遣し、其序を以て、禪太の所領に關する、談判迄爲せた事の如きは、非常な英斷として、大に賞揚する、値打がある。

それが爲に、攘夷派が、安藤を憎んだことは、井伊に對する以上であつた。櫻田門外の變事があつて、井伊家は、斷絶す可き筈であるのを、巧みに繕ふて、之れを救ふたのも、安藤の才覚であつた。

對外問題の他に、倒幕派をして、あつといはせたのが、和宮降嫁の一件であつた。之れに就ても、安藤の手腕が人並でないといふ事が、思はれる。

攘夷論の煽りをうけて、幕府が、いくたびか窮境に立つたことは、朝廷との反目が、その原因であつた。朝廷は、どこ迄も、攘夷の御趣意であるのに、幕府は、開國條約に調印したのであるから、その關係は、著るしく

面倒になつて来た。

左なきだに、幕府は、朝廷を輕んじて居るといふので、議論のやかましくなつて来た場合に、條約問題が、絡んで来たのであるから、ます／＼朝廷と幕府の間には、隔ての垣が出来て、非常にむづかしい關係になつて来たのである。その際に乗じて、毛利を始め、幕府に反感を有つ連中が、いろ／＼と策動するので、幕閣の方針としては、いかなる手段を用ひても、この難關を切抜けるのが、焦眉の急であるといふことになつて、安藤が、その衝に當ることになつた。

於此、豫て宿題になつて居た、公武合體を、實現させる外に、良策はないと決した。

長州の永井雅樂が、公武合體を唱へはじめてから數年、その實現は不能である、とされて居たのが、此時に、始めて實現される事になつた。

公武合體は、純な佐幕論とは、少し異つて居るが、若し之れを實現し得れば、その結果として、幕府の立場は、やや安全になるのであるから、一種の佐幕論として、見る事も出来るのだ。

永井は、此説を唱へて来た爲に、詰腹を切らせられてしまつたが、人物としては偉かつた。

土州には、吉田東洋が居て、矢張り公武合體を唱へた。それが爲めに、吉田は、武市半平太配下のものに、暗撃されて死んだ。

吉田も、非常にすぐれた人物であつたが、無慘の最期を遂げたのは、惜む可きの限りである。殊に、永井の如く、切腹も爲し得ず、途上に襲はれて、横死したのは、士人としての面目も立たず、まことに氣の毒な事であつた。

安藤は、公武合體の實現を、縁組の方法に依つて、求めやうとしたのである。即ち朝廷と縁組をすれば、隨に倒幕の氣勢を、挫くことが出来るし、また、攘夷に就ても、何うかして遁れ得るものとして、縁組の運動を始めたのであつた。

將軍の家茂が、未だ獨身で居たのを幸ひとして、その夫人を、朝廷に因縁の深い、宮家から迎へよう、と考へたのであるが、これは成功さへすれば、多少の力にはならう。議論でなく縁組でゆかう、と考へたところに、安藤の智恵は、働いて居た。

久世大和守が、安藤に代つて、京都へ上つた。酒井所司代と、いろく打合せた末、皇妹和宮を、夫人として迎へる事になつたが、その間には、種々の故障が起つて、容易に決しなかつたのを、安藤の手が延びて、岩倉具視を抱込み、朝廷の方は、岩倉の働きて、どうか斯うか、纏める事を得たが、岩倉は、この問題を利用して、或は、攘夷の實行を、將軍に誓はせたり、或は、朝廷の收權を増加させたり、さまざまの條件をつけて、この一事を取纏めたのであつた。

斯うした調子に、安藤の力が伸びて来たので、井伊と同じやうな運命に、安藤を、逐ひ込んでしまへ、といふ連中が、だんく出て来て、終に、坂下御門の襲撃といふ、活劇が行はれたのであつた。

條約調印の問題は、安藤と、外國奉行の堀織部正が、ひどい衝突をして、堀は、終に切腹してしまつた。

堀の家來は、之れが爲に、安藤に、含む所があり、また、水戸の人々は、安藤が、井伊家の斷絶を救ふた、といふことに、反感をもつて居たから、安藤襲撃の時には、それ等の連中も、加はつて居た。

文久二年正月十五日安藤の行列が、坂下見附まで来て、これから登城しよう、とした時、かねて待受けた浪士が、突然斬り込んで、非常な騒ぎをやつたが、この時は、安藤が、僅に負傷した丈で、却て、襲撃した浪士の方が、みな討死したのであつた。

此事件の蔭には、長州の桂小五郎と松島剛藏の二人が、ひそんで居たので、内田萬之助の死に依つて、桂は、危く引ツかゝるところであつたのを、幸ひに免かれて、事無きを得た。

萬延元年七月には、横濱に於て、ロシアの海軍士官が、三人斬られた。引つゞいて、アメリカ公使館の書記、ヒュースケンが、江戸の三田で、斬殺された爲めに、英佛蘭三國の公使は、横濱へ引上げて、一と騒ぎ起りかけたのを、安藤が、辛うじて喰留めた。文久元年には、東禪寺の英公使が襲はれた。その前後に、小使の傳吉が殺された。翌年の十一月には、御殿山に、新築の成つたばかりで、イギリス公使館が焼かれた。放火したものは、長州の高杉晋作、久坂玄瑞、寺島忠三郎、井上聞多、伊藤俊輔、大和彌八郎等の連中であつた。

其他、江戸城の本丸が全焼して、將軍が、西丸へ逃込んだり、水戸の烈公が憤死したり、種々雑多の事件が、山と積れるほどに起つた。

西郷が、在島三年の間には、斯うした事件が續出して、それが、多く幕府に取つて、不利な事ばかりであつた。事件の起る毎に、幕府の權威は、少しづつ衰へてゆく。その反對に、朝廷側の力はいくらかづ、伸てゆくのであつた。

和宮は、孝明天皇の妹君であり、明治大帝の伯母君である。昨今、靜寛院宮夫人として、芝の増上寺に於て、毎年十一月に、盛大な法養が行はれて居る事は、大概な人は、知つて居る。三島彌兵衛は、警視總監になつた、通庸の事である。大山格之助は、後の綱良である。内田萬之助は、阿邊佐次右衛門の事である。

久光の上洛と南洲

一

藩主の茂久は、未だ弱年であるから、江戸へも出ずに居た。従つて、京都へは、猶更ら上らなかつた。何しろ、九州第一の雄藩であるから、その動きは、一般に注意して居るのみならず、朝廷に於かせられても、島津の進退には、可成り眼をつけて居られたので、藩主に、上洛を促がす、御内意の下つた事は、再三であつた。於此、老臣や重役は、いくたびか協議の末、久光が、藩主に代つて上洛する、といふことに決したのである。また、實際の事情からいへば、藩主の實父でもあり、後見をして居たのであるから、茂久が上洛不能の場合には、久光が、代つて上洛するのが、當然の事でもあつた。

久光の上洛は、文久二年の三月、といふことに豫定されたが、京地の事情に精通して、諸侯との交渉や、諸藩の有志とも折衝して、幾多の難局を凌ぎ、機敏に切つて廻すものがなければ、折角の上洛も無意味のものになつて仕舞ふのであるから、その適任者を、物色して見ると、びつたり當はまるものが、どうしても無い、といふことになつて、此一事に就て、久光の心配は言ふ迄もなく、左右のものも、甚く心を苦めた結果、西郷の赦免を、願ふ外はない、となつた。大久保等が、西郷に對する友情もあり、且つ同志として、有用の人物でもある、といふ點から、この際に、赦免を願ふのは、頗る時機の宜しきを得たものだ、といふ事になつて、家老の小松帯刀と、御側役の中山尚之助から、

久光へ、頼りに願ひ上げたので、久光も、遂に首肯かれて、西郷赦免の沙汰が出たのである。大島に在ること三年、人知れぬ苦勞に胸を痛めて居た、西郷は、再び花咲く時が来て、文久二年の二月、赦免の御沙汰に接して、やれ嬉れしやと、思ふ心にも、また一つの苦みがあつた。それは、あいがなと、その間に出来た、菊次郎の身の上である。流罪人が、在島中に造つた子供であるから、今さらに赦免になつたからとて、これを伴れて歸ることも出来ない。さればといふて、この儘に別れては、また何時逢ふことがあるか、その見込は、全く立たないのである。いかに偉い人でも、恩愛の情は別だ。殊に、斯うした境遇に、出生た子供の愛は、一しほ深いものである。あつた。この哀別離苦は、西郷も、斷腸の思ひはしたが、しばらくは、それを忍ぶ外なかつた。出迎ひの船に乗つて、大島を出帆した。二月の中旬には、鹿見島へ着いて、一先づ自宅へはいつた。親戚や知人の祝言を受ける間もなく、その晩、小松の邸へ、呼ばれて居るのだ。取り敢へず、新納駿河の許へ行つて、前年來の恩を謝し、その足で、小松方へ來ると、大久保は、既に來て居るのであつた。

「ヤア、西郷どん」

大久保は、先づ聲をかけた。小松も、それについで、

「御無事ぢやツたのう」

と、いかにも嬉しさにいふた。

「この度は、尋常ならぬ御配慮に預かつた」
 大久保と小松は、交々膝を進めて、久光の上洛について、西郷の意見を求めるのであつた。三年の在島に、京地の事情にも暗くなつて居たが、西郷の答はさすがに、要を得て居た。大久保からは、其後の事情を聞いたが、それ丈けて、西郷には、天下の大勢も、大概は解つて、遠慮のない批判を爲るのであつた。其處で、久光の上洛について、御

供をしる、といふ一段になると、西郷は、一も二もなく辭退した。
 『天下の人が、深く注意して居る薩藩であるから、それが動くには、動く可き時期がある。今、上洛すれば、長州藩の下風へ従くことになるが、若し左様なるまいとして、焦れば、長州藩と争ふことにもならうから、結局は、薩摩と長州の争ひとなつて、之れが爲に利するものは、獨り幕府のみである。殊に、順聖院様とは異つて、久光公は御當主にあらず、諸侯の間に、未だ知られても居らぬ。假に京都へ出られた所で、徒に重い役ばかり申付けられて、手足も出ぬことに、なりはしまいか。それに、申すも恐れ入つたこと乍ら、久光公は、果して天下を動かすの器であらうか、どうか。それ等の事を考へれば、この御上洛は、無謀の擧である、と思ふ外はない。どうしても御上洛をなさるとすれば、有力な家臣を、まづ入京せしめて、一應は、形勢を見究めた上、然る後ちの事に、した方が宜からう。いづれにしても、久光公の御上洛は、頗る危険である』
 といふのが、西郷の意見であつた。小松も大久保も、黙つて聞いた丈けであるが、大島から赦免されて來た晩の西郷は、この大氣焰を吐いて、久光公の上洛に、不同意を唱へたのであつた。
 (順聖院といふのは、齊彬の事である)

一一

翌日は、久光に、拜謁を仰せ付けられた、先君の愛臣である、といふ所から、その待遇は、總べて特別であつた。久光からは、上洛に關して、種々の御尋があつた末に、御供を命ぜられたが、西郷は、只管御辭退申上げた。押問答の結果、西郷は、斷じて御免蒙る、と迄、やつて退けた。
 その晩は、西別府の宅に、同志の會合があつた。所へ、大久保と中山が、揃つて來て、
 『この際は、曲げても御供するのが可からう。それに、久光公の御機嫌を損ねては、何事を爲るにつけても、今後は

不利益にならう。殊に家臣として、我意を固執するのは、甚だ宜しくない、と思ふ。お前の意見には充分の道理はあるが、お前も、一と肌脱いて、不利の御上洛を、有利に轉換せしめるのは、家臣の務でもある。況して、御上洛の事は、既に届け濟みになつて居るゆゑ、今更らに變更は、いたし難いのだ。この際は、是非御供して、應分の働きを爲てくれ』
 と、言ふのであつた。

そこで、西郷も考へた。上洛届濟みとあつては、變更も出來まいから、二人のいふ通り、曲げて御供を爲ることにしやうが、併し、この儘に御供は出來ない。その代り、自分は先發して、九州の視察を遂げ乍ら、下關に於て、御待受けをしたい、といふのであつた。これは二人から、更に申上げて御許しを受けよう、といふことに、相談が極つて、萬事は、二人が引受けて、久光の御前へ、出る事になつた。

この事には、小松も、陰然、關係して居たのであるが、久光は、西郷の先乘を許さぬ、といふ丈に、京地や、江戸の方面に對して、深い自信は、勿論、有つて居なかつたのであるから、之れを許す外なかつた。

數日の後、西郷は、再び御前へ出て、先乘は許されたが、その際、久光の御詞のうちに『余は、地ころであるから京地の事は判らぬ』といふ一言があつたので、西郷は、ひどく恐縮した、といふことさへあつて、その頃から、久光の感情は、西郷に對して、何となく悪かつたのは、止むを得ぬ次第である。

西郷は、鹿兒島を出發した。同行者は、森山桃園と、村田新八の兩人であつた。下之關へ着いたのが、三月二十二日である。此處に足を留めて、久光を待合せる傍ら、京地の事情を知らう、といふのだ。

京都では、久光が、愈々上洛する、といふことを聞いて、有志や浪人が、之れに對する期待と、その騒は非常なものであつた。安政五年の大獄以來、一時は、火の消えたやうになつて居た、京都も、井伊大老の横死から、勤王派の勢力が、復活へつて來て、文久二年の春を迎へてからは、一層さかんになつて來た。所へ、島津久光の上洛と聞いて

非常に熱狂したのは、固より當然の事であつて、殊に、毛利敬親は、其前から来て居て、桂小五郎が、目覚しい働きも、此時の事であつた。急進派の連中は、久光の上洛を利用して、この際、勤王攘夷の旗上げをしよう、といふものもあつて、久光の人氣は、これが爲に、頗る良かつた。けれども、久光の身に取つては、有難迷惑な次第であつたらう。薩藩の立場や主張が何うであるか、それを確めずに、久光を、盟主に仰がう、といふのであるから、随分突飛な考へてはあつた。尤も、これについては、薩藩士にも、熱心な同意者があつたので、その背後には、長州の連中が、しきりに煽つて居たのである。

西郷は、下之關へ来て、この情報を得た。

『これは一大事である。久光公が、迂濶乗込むと、意外な事になるから、久光公の來るのを待ち合さず、これから直に京阪兩地へ乗込み、此暴學を、抑へて置く必要がある。兎に角、京都へ行つて、何うなるにしても、藩士の取纏めだけは、して置かねばならぬ、浪人の方も、巧く抑へて置かぬ、と、何事も仕難くなる』

といふ、考へから、久光を待たず、京都へ急行することになつた。小松と大久保には、くはしい事情を書かず、『容易ならぬ事を耳にしたから、拙者は、大阪へ先乗する。その都合に依つては、京都迄行くかも知れぬから、君公へは、貴殿から宜しく申上げてくれ』と、いふ事だけを認めて、村田と森山を伴れ、大急ぎで出發してしまつた。

大阪の薩邸には、久光公の上洛と聞いて、江戸から駆けつけて來た、橋口謙藏、伊集院兼寛、弟子丸龍助、石田直次郎、永山彌一郎等の壯士が、詰めて居た。京都には、有馬新七を初め、多くの同志が居て、伏見の寺田屋を、その密會所と定めて、東西の聯絡を取つて居たのだ。

その別働隊ともいふ可き、浪人組には、藤本鐵石、安積五郎、平野國臣、田中河内介、松田範義等の烈士が居て、九條關白の邸へ、火を放ち、酒井所司代を斬り、天下に率先して、倒幕の叫びを擧げよう、として、久光の上洛を、今や遅し、と待ち受けた。

西郷は、先づ大阪へ着くと、藩の壯士を、説きつけにかゝつた。それから、京都へ乗込み、浪人組にも接觸して、しきりに暴學を、思ひ留まらせよう、として、その盡力は非常なものであつた。

二二

久光は、藩主でこそなかつたが、藩日隅三國の領主、島津茂久の父君である。實際に於ては、藩主と同様の權力を、有つて居た。その人が、朝廷の御沙汰によつて、上洛するといふのだから、評判の高くなつたのも無理はない。小松帶刀、中山尚之進、大久保市藏、堀仲左衛門等を始め、御供の同勢は、五百人以上であつた。行列堂々として、眞に天下を壓するの勢ひで、鹿兒島を發したのが、文久二年二月十六日のことであつた。

下之關へ着くと、西郷が居らぬので、久光は、非常に憤つた。

『余の命も待たずして、恣まに進退するとは、不埒千萬ぢや。寛恕難きは、吉之助である』

と、凄まじい肝癢であつた。大久保は、獨り胸を痛めて、頻りに久光を、慰めたが、どうしても治まらない。小松と相談して、西郷が書残した、手紙の内容を、くはしく申上げて、隨意の出發も、藩の御爲を思ふての事であるから、といふて、いろ／＼にお詫はしたが、久光は、何としても承知しなかつた。久光は、下之關を出發して、播州室津まで來た。此處に、少焉滞在して、京地の状況を知らう、といふのであつた。大久保を招んで、先づ大阪へ行く可き命を下した。これは、京都の状況を、搜らせる爲めであつた。

久光は、可成り學問があつて、人物としても、普通の大名とは違つて居たが、何分にも、我意に強く、度量の狭いのが、大きい欠點であつた。齊彬に比べたら、非常に劣つて居たから、西郷の如き、大きい人物を、使はうとするに

は、少し無理であつたかも知れぬ、西郷は、小節に拘はらない、極めて大ざっぱの人であつた。それに、敢て久光を軽んずる、といふ次第でもなからうが、齊彬に愛されて、其人物に傾倒して居た、眼を以て久光を見るから、その差が餘りに遠いので、自然と、久光に、心服が出来なかつたのは、固より當然である。同時に、久光の方でも、西郷に對しては、齊彬が、愛して居たほどに、濫い感情は、有つて居なかつた。
然るに、君側に在る家臣も、二派に分れて居て、成上りもの癖に、増長して居る位に、見て居た重役も尠くなかつた。それから、勤王と佐幕と、二つの主張の衝突から、佐幕派の方では、西郷を毒蟲の如く思つて居たのも、久光が、西郷に、感情の良くなかつた、原因の一つと、見る可きである。併し、西郷と同じやうに、勤王派の人も多く居たが、いづれも身分の低いもので、重役は大概、佐幕に傾いて居たのだ。されば、何事が起つた時は、西郷に不利のことが多かつたのは、また止むを得ぬ次第であつた。

堀仲左衛門は、御前近く進んで、

『恐れ乍ら申上げまする』

『何事ぢや』

『西郷吉之助儀につきまして、容易ならぬ件、聞き及びました』

『吉之助が、何と致したか』

『浪士を狩集めまして、何事か企てまするやの風評、今は隠れなき事に御座りまする』

久光公の顔色は變つて、膝に置く手は、慄ふるへて居た。

『君、御上洛につきまして、浪士共に、不穩の企てがあります事は、兼て御聞及も御座りまする如く、既に市藏儀を、阪地へ、御使はし遊ばしたる次第、然るに吉之助は、君命を待たず、直ちに入京いたしましたる既、不穩の所

爲か、と存じまする。兎角の風評も、その邊から起るものと考へますれば、速かに、吉之助は、御呼返し可然く、存じまする』

今度の上洛については、御供を拒みたるのみか、命も待たず恣のまま入京、肝臓の蟲が、グー／＼鳴つて居る所へ、この讒言があつては、久光の疝癪玉は、何うしても破裂するのが、當然であつた。

それに、もう一つの事情は、中山が、阪地から届いた、密偵の報告を、その儘、久光へ、上申した事である。

どうせ、密偵の報告であるから、大概は、揣摩臆測と、無智の推測であつたのを、久光が、割引なしに取入れたのも、西郷を誤解する、有力な原因にはなつたのである。

四

斯くて、久光は、四月八日に、兵庫へ着いた。大久保も、大阪から歸つて来た。西郷へは、使者が出たけれど、未だ来て居なかつた。久光の憤怒は、益々強くなるばかりである。大久保は、幾分か之れを悟つて、それとなく西郷の辯護を、して見たけれど、さらに效のないのみか、意外にも、西郷の罪は、叱言位では濟みさうでなく、君命に背いて、謀叛でも企てたものやうに、思つて居られる容子であつた。斯う思ひ詰めたなら、積杆でも動かないのが、久光の性質であるから、大久保も、私かに嘆息して、西郷の歸るを待つて居た。

西郷は、京都の都合も、頗る運びが良く、藩士や浪人の抑へも、どうかつきさうであるから、大阪の藩邸へ、歸つて来たところへ、久光から、使者が来て、直ぐに歸れとのことであつた。其處で、使者と連れ立つて歸つて来た。大久保は、待ち兼ねて居たので、直ぐに西郷を訪ねた。

『拜謁は、何れ明朝だらう、少し相談があるから、其處まで来い』
と、言つて、西郷を引張り出したが、時刻は、既に初更に近かつた。

今では、神戸も大いものになつて、年と共に、土地も開け、人口も殖えて、貿易は盛大になるばかりで、昔の兵庫の面影は、全然見ることが出来なくなつた。神奈川の名は、横濱に壓せられて、横濱市の神奈川町となつたやうに、兵庫の名は、神戸の蔭に、隠れて仕舞つた。中國から九州の大名は勿論、四國の大名も、東上するには必ず此地を通る爲に、兵庫の繁昌は、驚く可き速度で、進んでゆく。

兵庫に、築島といふ所がある。平相國清盛が埋立てたもので、應保元年の春二月、今の會下山の端を切崩して、海面三十町歩の埋立工事、その頃の事としては、却々の大仕事であつた。然るに、幾何埋めても、波に浚はれて、元の海になつて仕舞ふので、段々詮議の末に、これは、龍神の祟りであるから、人柱を三十人沈めて、龍神を、先づ宥めた上で着手しようといふことになつた。忽ちにして三十人の犠牲は、生き乍らにして、毎日一人づゝ、海へ投げ込まれることになつた。時に、讃岐國香川郡圓座の莊に、大井民部といふ人があつて、その伴の松王といふものが、清盛の寵愛を受けて、近習役をつとめて居た。この松王が、自ら進んで、人柱三十人の身代りに、海中へ沈んだ。龍神の怒りは、忽ち解けて、埋立てが出来た。現に、島上町には、經島山來迎寺といふのがあつて、一名を築島寺と謂ふ。それは、大井松王の爲めに、清盛が建立したものだ。と、傳へられてあるが、人柱の眞偽は、しばらく措いて、斯うした傳説もあるのだ。

大久保は、西郷を誘ふて、この築島へ、やつて來た。夜に入つては、人の往來も絶えて、岸を洗ふ浪の音を聞きながら、丁度時候も拾季であつた。西郷は、獨り愉快さうにして、傍らの捨石へ、腰を下ろした。

「大久保どん、相談とは何かな」

「貴下は、平氣で居るが、君公は、非常な御立腹でな」

「何ッ、久光公が、御立腹とな」

「うむ、その因は識者もあつてのことぢやあらうが、貴下も、宜ろしくない」

「俺どん、何故悪いか」

「下之關で、君公を、待受けの筈であつたのが、彼の始末ぢや。室津まで參られても、未だ貴下は見えなかつた。この兵庫へ參られてから、使者を受けて、今來たのぢやないか、貴下は、主持といふことを忘れたか」

これだけ聞いたら、その後は聞かずとも、西郷には、

「ハ、ア」

と感するのであつた。大久保は、儼然たる態度になつて、

「この上は、もはや論するも無益ぢや。貴下の罪は、何うせ生命に關らう、と思ふが、寧ろ此處で、貴下と指違へて死のうと、覺悟したのぢや」

西郷獨り殺すに忍びず、大久保も、共に逝かうといふのだ。西郷は、黙つて居た。大久保は、西郷を見詰めて、その返事を待つのだが、聞ゆるものは波の音ばかりであつた。

五

君側には、佐幕派の人が多かつた。而かも、久光は、西郷に對して、嫌焉の情があつた。しかし、今度の事は、西郷の方でも、多少の不謹慎の點があつて、聊か久光を、無視したやうにも思へる。従つて、久光の憤怒は容易ならぬ。その事情から推して考へれば、必ず切腹は免がれまい、と、思つたのが、大久保である。大久保は、久光の信用を得て、重く用ひられて居るが、今度の事は、如何に申上ぐるも御聽許がなかつた。種々に申上げたが、何時も一喝されて仕舞つた。此に於て、大久保は、深い決心をして、西郷に、死を勧めるのであつた。その代りに、自分も刺違へて死のう、と迄、覺悟したのである。この際に、西郷を失ふは、同志の爲めに、非常の不利益だが、さればといふて、救ふ道はなかつたのだ。友誼の上から、彼れ一人殺すことは出来ない。何うしても、刺違へる外に道はない、

と、覺悟の臍を堅めて、築島に誘ひ出したのであった。

『貴下、俺どんと、刺違へると云ふのか』

『今に及んで、如何とも致し方がない、といふて、貴下を一人、殺すことは出来申さぬ。己も、死ぬ覺悟ぢや』

西郷は、大久保の顔を、見詰めて居たが、思はずハラ／＼と涙を流した。

『千萬謝する辭を知らぬ。俺どんと刺違へよう、との覺悟は、親友の情誼を捨てぬ、貴下の赤心ぢや、が、併し、貴下と、俺どんとが刺違へて、死んだ跡は、誰れが引受くるか、王事に盡して、幕府を抑へるのは、我が藩の役目ぢや。これは、誰れが周旋するか、俺どんは、不謹慎の廉があつたのぢやから、嚴罰に處せらるゝも、身から出た錆で、今更らに致方はない。貴下までが、共死するのは何の事か解らぬ。俺どんが死んでも、貴下が、生残つて居れば、藩論は、如何とも動かさやう。貴下の友情は、謝するの外ないが、飽迄も、貴下は生存へて、勤王の爲めに、盡して下され、俺どんは、潔く罪に伏して死ぬつもりぢや』

この場合に臨んでも、死を見ること、恰も歸するが如く、平然として、先の先を考へて居る。西郷は、矢張り壯い時から偉かつた。大久保は、情に於て、俱に死のう、といふのであつたが、西郷は、理を以つて、之れを拒むのであつた。押問答の末が、終に、西郷の爲めに説破られて、大久保は、刺違へることを中止した。而して、西郷の一身は、成行に任せる、といふことに決した。二人は、歸つて来る道次らも、薩藩の前途について、相談を續けて居るのであつた。

斯うした事のあつた二人が、その大志を遂げて、共に廟堂に列するの身となり、天下の大政に參與してからは、漸く意見が疎隔して、終には、互ひに仇敵の如く、西郷は、例の征韓論が因となつて、明治十年の叛逆に、城山の洞窟に、永く其遺恨を留めて、不歸の客となつた。また、大久保は、西郷派の爲めに襲はれて、その翌年、東京の紀尾井坂に、横死を遂げた。想へば、人間の一生は、實に不可思議なるものである。

築島の海岸に、此二人が、生死の押合をして居る時、小松は、久光の御前へ出て、西郷の命乞をして居たのである。久光が、何としても肯かなかつた時、小松は、『先君の愛臣を斬つては、先君の鑑識違ひといふ事になるが、それでも宜しいか』と、いつた。

これで、久光も、トウ／＼凹垂れてしまつた。

小松は、さすがに智慧が有つた。うまいところを抑へて、久光を押付け、西郷を、九死から救ひ得た。此事がなければ、西郷は、此時に、上意打の處分で、斬られて居たのである。

翌日は、久光に、拜謁の出来るものと、ふかく期して、充分の辯疏は、爲るつもりであつたが、更に其沙汰はなく、重役を以つて、單に歸國の御沙汰を傳へられた。何の取調べもなければ、辯解も爲せず、表面は歸國せよ、とのことだが、その實は、罪人差送りの取扱ひであつた。村田新八と森山桃園も、同行同列といふ點で、西郷と共に、歸國を命ぜられ、天祐丸といふ藩船に乗せられて、薩摩に向ふのであつた。

船が、兵庫を出てから、流罪の御沙汰が下つて居ると、いふことを、漏れ聞いて、生命丈けは取留め得た、と、西郷には判つたが、村田と森山は、何の爲めに、罪を得たのか、少しも解らなかつた。

寺田屋の血闘

文久二年の四月廿四日、伏見の寺田屋で、薩藩士が、同土撃の惨劇を演じた。その場合に、西郷の居らなかつたのは無論だが、若し、西郷が、久光の嚴譴を受けず、其行列に加はつて、京都へ、這入つて來たら、この惨劇を演ぜずに、無事の折合は、必ず決いたものと思ふが、いかにも残念な次第であつた。

勤王派の浪士は、久光の上洛と、聞いて、心ひそかに喜んだ。久光は、薩日隅の領主、島津家の後見である。假りに藩主でない、としても、實權は、此人が握つて居るのであるから、その覺悟一つで、どうともなるのであつた。倒幕の運動は、毛利の獨舞臺になつて居たが、それでは面白くない。どうしても、之れに島津を加へて、薩長二藩力を以て、事に臨むのが、大に得策であると、斯う考へて居るものが、多く在つた丈に、久光の上洛は、非常な人氣を招んだものである。

また、薩藩士の身に見ると、この際に於ける、久光の上洛は、千載の一遇ともいふ可き好機會であるから、浪士を利用して、京都の實權を、握つて仕舞ふのが、薩藩の立場を良くする、唯一の策と、考へて居たのだ。毛利家の思惑などを、顧みるには及ばぬ、薩藩は、獨自力を以て、天下の事に任ず可きである、と主張するものが多かつた。更に過激な人々は、久光を擁して、攘夷の御沙汰を受け、之れを機會に、倒幕の實を擧げよう、といふのであつた。

久光が、大阪を経て、京都へはいるに及んで、浪士等は、非常に失望したのであつた。豫て期待して居たほどに、久光の覺悟は、倒幕に傾いて居らず、存外に、溫和な説らしいので、久光に對する評判は、忽ちに悪くなつた。勤王派の藩士は、深く之れを憂へて、是非とも、久光を動して、大英斷を行はせよう、とはかり、若し、肯かざれば、止むを得ないから、無理にも、事を起して仕舞へ、といふのであつた。

此時に、長州藩では、國老の浦柄負といふ、六十八歳になる老人が、百名餘の藩士を率ゐて、入洛を爲る。大阪の留守居、宍戸九郎兵衛も、又た數十人の藩士を連れて、京都へはいつて來た。島津家へ對する、見せ景氣といふ次第でも、なかつたらうが、如何にも、皮肉の感があつた。

此に於て、久光と、其左右に對する、不平の聲が高くなつた。元氣な連中は、この際、何とか制度を定めなければならぬ、とあつて、相談の上、一決した方針は、斯うであつた。

同志打揃つて、伏見へ行き、京都の情況を窺ふて、先づ酒井所司代の邸へ斬込み關白の九條尙忠を襲ひ兩人の首を提げて、否が應でも、久光を擁して、急に事を擧げよう、といふのであつた。土州藩の武市半平太も、之れには同意であつた。長州藩では、久坂玄瑞の一行、その他、浪士の大部分は、すべて同意者であつた。薩藩士の首領とも、謂ふ可き人は、有馬新七であつた。

新七は、文武に共通した、大丈夫の士であつた。この人の旅日記を讀んだが、和文は、却々に巧い。殊に、木曾路の日記が、善く書いてあつた。その中に『乗る駒のつめに紅葉ふみ分けて、木曾のかけ橋渡り行くかも吹き下す峰の嵐に散り積みて、錦渡せる木曾のかけはし』といふ、二首の和歌があつた。ではない。かうした、優しい所があつて、その上に強いのが、眞の武士である。

有馬の一行は、大阪の庫屋敷に居て、同志を集め、その協議を進める、と共に一切の支度をすませ、それから伏見へ、乗込まうと爲るのであつた。

久光は京都へ着いてから、藩中の壯士が、不穩の企てをして居る事を知つたので、奈良原喜左衛門、有村俊齋の兩入を、大阪の邸へ急行させて、その重立ちたるものを集め、懇々説諭を爲せた。その大意は、
「君公も、諸士の忠誠は、能く御承知であつて、時機の宜しきものがあれば、無論のこと、諸士の希望を、容れさせらる可き、御覺悟ではあるが、何分にも現下は其時機でない。此處しばらくの辛抱であるから、どうか靜穩にして呉れ」

と、いふのであつた。

この鎮撫は、在外に效力があつて、巧く行きさうであつたが、他行して居た、幹部の有馬新七等が、立歸つて來て「君公の御思召と稱して、今俄に左様の事を、説いて歩いても、うっかり信用してはならぬ。それは皆な、佐幕派の奸臣から注ぎ込んだ入智慧で、君公の御考へではない。今の一時さへ、我等を抑へ付けば、それで宜い、といふに過ぎぬ。我等の所論を、御採用になる採とは思はれぬ。我等は、今迄の通り、大事を決行することに、覺悟する外はないのである。こんな甘言に乗つて、弱腰を突いては不可ん」

と、頻りに説き廻つたので、一旦は靜まりさうであつたのが、また燃え上つて來た。

久光の御供頭に、永田佐一郎といふ人があつた。最初は、柴山愛次郎に説きつけられて、この一擧に、同意をしたのであつたが、奈良原や有村に説かれてから、此企てに厭氣が注して來たらしく、何となく逡巡して居るので、同志の間にも、永田の心事を疑ふものが、多くなつて來て、伏見行も、明日に迫つて來た以上、出發に先立つて、永田の覺悟を、充分に確めて置く必要がある、といふ説が、可成り強くなつて來た。

藩邸の廿八番屋敷それが、此一連の居る所であつた。藩士の外には、田中河内介も居れば、眞木和泉守も居る。田中は、中山大納言の家臣で、非常な慷慨家であつた。
なからへてかわらぬ月を見るよりも
死して掃はん世々の浮雲

と、いふのが辭世の歌で、この事件の爲めに、薩摩へ護送の途中、殺されて仕舞つたのである。眞木は、久留米の水天宮の神官だ。その他にも、猶ほ一二のものは、他藩の武士であつた。

既に準備は出來たが、永田の態度が疑はしい。是非之れを確めよう、といふものがある。有馬や柴山は、その必要はない、といふのであつたが、却々靜りさうもないから、強て争ふほどのことでもないから、自然の成行に任かせることにした。

其處で、永田を迎ひにゆくと、永田はやつて來た。同志の多くは、既に屋敷に居らず、中之島の魚太へ、集つて居た。屋敷に居るのは、幹部のものばかりであつた。有馬から、改めて永田に、伏見行を促がすと、永田は、
「残念ながら同行は出來ない。一度御同意は致したが、君公の御沙汰を傳へられて見ると、それでも行るとは、家臣として言へない」

と、いふのであつた。同志のものは交々、永田を諭したが、何う談じても駄目であつた。そのうちに、永田に對して罵詈を加へるものさへ、出て來た。腰拔とまでに嘲けつて、面罵するものもあつた。永田も憤激して、さかんに「君命々々」と謂つて、久光を笠に、辯疏を爲るのであつた。有馬も、柴山も、今迄は多少、永田を庇つて、詞も慎んで居たが、此に至つては、勸忍袋が切れて、その變節を論詰するやら、或は嘲弄するやら、して非常にやかましくなつた。

『素破や事こそ』

『拙者も、永田ぢや。變節は爲ぬが、君命は、いかんともいたし難いから、只だ事を擧げる時期を、少し延ばさう、

といふ丈けの事である』

『それが、即ち變節ではないか』

『イヤ、變節ではない』

『貴様は、犬武士ぢや』

『犬武士とは、誰か』

『貴様ぢや』

一同は、手を拍つて、之れを繰返し乍ら、笑聲を浴せた。

永田は、顔色を變へて、立上ると同時に、傍らの槍を取つた。之れを見ると、一同も立ちかけた。

永田は、氣合をかけて二三度扱いたが、側に在る柱へ、ぐさりと突指した。間一髪、腰の小刀を抜放つて、美事に

切腹して、その場へ、どつかと坐したが、

『永田は、犬武士ではないぞ、よく見て置け』

と、いつて、終に自殺を遂げてしまつたが、實に壯烈の最期であつた。

一一一

文久二年四月廿三日出發、伏見へ行く可く、淀川を上ることに決したが、一行は、二十有餘名であつた。幾艘かの船に別れて、早朝から押出したのである。

有馬新七、田中謙助、西郷慎吾、三島彌兵衛、大山彌助、岩下勇助、柴山龍五郎、是枝萬助、橋口吉之助、谷元兵右衛門、白石林八、柴山愛次郎、橋口莊助、橋口傳藏、伊集院直右衛門、弟子丸龍助、西田眞五郎、森新兵衛、坂本吉右衛門、益滿新八郎、永山萬齋、富田猛太郎

以上は、何れも薩藩士であるが、その他にも、同志は多く在つて、田中河内介、眞木和泉守等も、そのうちに加はつて居たが、既に伏見へ、先に廻つて、待ち受けて居るものも、少なからず在つた。

富田は、兵器の掛りであるが、却々に思慮の深い、兵書にも、通じた人であつた。柴山愛次郎は、一行の會計掛りで、有馬は、一行の監督として、一步先きに、伏見へ、向つた。富田と柴山は、一番に後れて、行く事になつて、居た。出發となつた時に、富田は、柴山を、別室へ引入れた。

『極く秘密で、相談が御座る』

『何事ぢや』

前夜の相談では、伏見上陸に決したが、これは、山崎上陸に、變更したら何うぢや』

『何ういふ理由か』

『萬一にも、伏見上陸のことが漏れて、障碍が出来ては一大事ぢやから、今更なるに臨んで、俄かに上陸地を變更するの可い、と思ふ。兵書に謂ゆる、道を換へるとは、この事で御座る』

『一應は御尤ぢやが、それまでには及ぶまい。一列は何れも、堅い覺悟を有つて居るもので、水火も避けざる大丈

夫のみであるから、多少の故障は起るものとして、覺悟の上で行けば、敢て差支へはあるまい、殊に先發のものは

既に伏見に着いて居る頃で、荷物も出してある、といふ次第ぢやから、この儘まに、行くことが可からう』

富田の説を、柴山は、容れなかつたけれど、これは、富田の注意が可かつたのだ。若し此一行が、山崎から上陸し

て、直に京都の西千本通へ出て、目的の事に手を下したら、それこそ一大事件になつたのだが、柴山の之れを容れな

かつたばかりで、寺田屋の慘劇となつて、事は破れて仕舞つた。

併し、柴山の大阪引上げの態度は、實に立派なものであつた。一行の飲食代まで、一文も残さず支拂をつけて、悠

悠として引上げた、いふ事は、後日までも評判が良かった。

悠として引上げた、

永田の自殺が、忽ちに藩邸の問題となつて、何の爲めの自殺か、その原因が判らないのだから、風説を生んで、徒らに騒ぐばかりであつた。高崎左太郎は、藩邸に居つたが、過激派の計畫も、薄々は耳にはいつて居たが、自分、これに關係がなかつたので、奈良原と有村の兩人が、鎮撫の爲めに、君命を齎して來た時にも、今後の注意を、高崎に頼んで歸つた。工藤左門といふ人も、同様の頼みを受けて居た。左門が、訪ねて來て、『例の連中が、徹夜の宴を張つて、別れ別れに、淀川を上つて、伏見に向つた』とのことを、高崎に告げた。

『それは、大事ぢや。打捨て置ては、如何なることになるも知れない。一刻もはやく、久光公へ、此趣きを上申しよ』

といふことになつて、高崎は、早輦の準備を爲せた。工藤は、馬術達者の人であるから、二た手に分れて大急ぎで、京都へ駆付けた。

京都の藩邸では、奈良原と有村の報告を得て、一まづ安心したが、尙ほ此上とも、暴舉を起させまいとして、その相談に、取りかゝつて居る所であつた。

四

淀川は、世に名高い大河である。宇治川と、桂川と、木津川の三川が一流になつて山城から攝津河内へ流れ込む。その間に、小さい川を、片ツ端から吸ひ込んでゆく、といふ素晴らしい河である。大江匡房の歌に、

まこも对る淀の澤水ふかけれと
底まで月の影はすみけり

また、爲家卿の歌に、

舟おとす淀の河瀬のあさきりに
たえく見ゆる岸のかち人

と、いふのがあつて、昔から歌咏む人や、歴史家には、能く引出される、河であつた。

山城國久世郡の淀町、これは其昔、河中の寄洲であつたのだが、何時か陸につゞいて、一つの町をなしたのである。京都の咽喉になつて居るので、永正年間には、細川氏が自ら城の主人となつた。その後ち、秀吉の愛妾、淺井茶々が此城に居つたので、これを淀殿と稱したのである。

さみたれやまやのあまりの程きゝて

あやめも知らぬ淀の里人

順徳院の御製である。また、後鳥羽院の御歌に、

ほとゝきす雲のはつかに聞ゆなり

淀のわたりの村雨の空

と、いふのがある。この町の西北へ、五町離れて、淀城があるのだ。

先發隊の橋口莊助以下の人々は、今ま淀へ着いた所であつた。掛茶屋に憩んで居ると、遙かの向ふから、馬を飛ばして來る、一人の武士があるから、近づくと儘に熟視れば、其武士は、思ひも寄らぬ、工藤左門であつた。莊助はバラ／＼と駈け出た。

『暫らくツ』

と、聲をかけて行途を遮つた。工藤は、胸の裡は、失敗と思つたが、然あらぬ風で、

『橋口氏か』

『何處へ行かるゝか』

「弟の彌八が急の病氣と報知があつて、駆けつける所ぢや」
 井上彌八郎は、橋口の同志で、京都に待合せる一人であつた。
 「それは、御心配のことと御座らう」
 と、道を開いて通した。工藤は、恰も虎穴を遁れた心地で、
 「御免」
 と、いつて、馬を走らせた。刹那に、早轎が一挺、宙を飛ばしてゆく、垂れが下つて居たので、その儘ま見遁した。これが高崎左太郎であつた。
 總て、二番手の船が着けば、それと一つになつて、伏見へ向つたのであるが、工藤高崎の兩人を、無事に通したのは、此連中の失策であつた。

久光は、京都の藩邸に在つて、獨り胸を痛めて居た。有馬柴山の連中が、無謀の企てをして居る、といふので、萬一にも左様なことがあつては、由々敷一大事であるから、之れを未發に抑へなければ、いかなる珍事の起るかも知れぬ、といふので、いろ／＼考へた末、奈良原と有村を、鎮撫の使者にやつて、二人の歸京を、待つて居たのである。二人は大阪から歸つて來た。すぐに久光の御前へ出て、
 「全く輕擧である、といふことを悟つて、一同は、君命に従ひ奉る、とのことと御座つた」
 と、事も無げに申上げたが、久光は、猶ほ多少の疑惑を有つて居た。
 所へ、工藤高崎が、引き續いての註進であつた。開けば、彼等は、説論に應ぜず、兵器の準備までして、既に繰出したことと、今宵は、伏見の寺田屋に一泊して、明日は、京都へ乗込む、とのことであつたから、もはや、普通的手段を以つて、之れを抑へ付けることは至難かしい、と考へて、久光は、いくぶんの指觸も、加はつて來た。殊に

は、浪士鎮撫の任を受けて居るまげに、朝廷へ對しても申分けがない、と思つたのである。
 奈良原喜八郎を招て、伏見へ、急行の御沙汰が出た。一應は説論を致して、尙ほ背かぬやうならば、臨機之處置を加へても可い、といふのは、斬つても構はぬ、との意味であるから、喜八郎も、委細を心得て、同行者には、劍道の確かなものばかりを選んだ。道島五郎兵衛、山口金之助、鈴木勇右衛門、伴の昌之助、江夏仲左衛門、大山格之助、森岡善助の七人、奈良原を加へて、僅かに八人であつた。若し途中で行違ひになつては、折角の苦心使命も水の泡になるから、二手に分れて、大佛前通りと、竹田街道と、道を別にして、伏見へ急行した。

五

伏見へ着いた、橋口莊助の一行、それに續いて、二列三列、と着くに従ひ、寺田屋伊助方へはいつた。眞木和泉の一行は、その前から着いて居て、同志を迎へる、準備に忙しく、薩藩の銘々は、二階座敷へ一團となつた。それが七時半時、今の午後五時頃であつた。

有馬新七は、殆んど首領の格式で、到着帳を控へて、その人數をしらべて居た。一列の士氣は昂然として、天地を吞吐するの概があつた。食事が了つてから、義擧の順序を定めた。趣意書が脱稿で、同盟血判の式も済んだ。それから、武器の調査にかゝり、今夜のうちに、京都へ乗込み、九條關白と、酒井所司代の邸へ、斬込まうといふのだ。久光の内命を啣んで、奈良原喜八郎等八人の一行は、少し後れて、伏見へ着いた。有馬の一行が、寺田屋へ、集まつて居る、といふことが判つて、直ぐに訪ねて來た。有馬に、面會を申込むと、二階から大きな聲で、
 「有馬は居らぬ。訪ねて來たのは、誰れか」
 と、怒鳴つたものがあつた。

奈良原は、之れを聞いて、通常の手段では、面會は出來ぬものと思つた。江夏、森岡の二人は、執次ものを押除

けて、二階へかけ上つた。奈良原、山口、道島、鈴木父子、大山も、續いてかけ上つた。

『おう、有馬どん』

列んで居た人々が、ふりかへつて見ると、この有様であるから、刀に手をかけて、立ち上るものもあつた。

『知己の間にもせよ、座敷へふみ込むとは、無禮千萬ぢや。斬つて仕舞へ』

と、いふて奔き合つた。喜八郎は、聲を勵まして、

『御無禮は、後から御詫申す。有馬柴山の兩氏に、面會致し度い』

と、いふたので、新七も今は詮方なく、

『如何なる御用か』

『別室で、密談を遂げ度い』

『承知いたしました』

新七と愛次郎は、立ち上つた。田中謙助、橋口莊助の二人も、共に立つた。新七は、騒ぐものを制して、二階を降りて、下座敷へ來た。奈良原は、久光の内意を傳へて、頻りに一統を慰め、兎も角も、久光公に拜謁せよ、と説きつけるのであつた。

『御懇志は忝けないが、今宵は、青蓮院宮様に、拜謁の約束もあれば、いづれ明朝は、藩邸へ伺ひ、君公にも、拜謁いたさう』

『足下等を、連れ來れ、といふ君命を蒙つて來たのぢや』

『たとへ、君命といへども、今宵は參り難い。宮家の御用も御座れば……』

『然らば、君命に従はぬ、と言はるゝか』

『實は我等、上意討の御許しを、受けて居るのぢや』

謙助は、色を變へた。

『上意討が何ぢや、己は、君命に従はぬ』

その詞の終らぬうちに、

『えいッ』

氣合と共に、五郎兵衛が、拔討に斬つた。哀れ、謙助は、眉間を割付けられて、その場に斃れた。愛次郎が、

『亂暴し居るか』

と一喝するのを、躍りかゝつて金之助が斬つた。袈裟がけにやられて、兩斷になる。尤も、愛次郎は、事が破れて、

上意討の來る時は、手向ひは爲ぬ、と言つて居たほどで、この時も、刀は帶して居らなかつた。新七は、怒髪冠を衝

くの勢ひで、立ち上るが早いから、大刀を抜いて、五郎兵衛を斬つた。斬られながらも、五郎兵衛は、之れと斬り合ふ。

何うした次第か、新七の刀が、鏢元からボツキと折れたが、小刀に、手をかける遠がないので、飛びかかつて引ッ組

んだ。五郎兵衛を、壁際に押へつけた所へ、橋口吉之丞が駆けつけた。新七は聲を張上げて、

『橋口ッ……刺せ、己も一體に刺せッ』

流石に、橋口が逡巡した。

『はやく刺せッ、何故刺さんか』

此に於て、橋口は、涙と共に、新七の上から刺す。五郎兵衛と、重なつた儘ま、田樂串になつて相果てた。新七の

年二十八、惜む可き人物であつた。

階上、階下、殺氣は滿ち渡り、腥氣は慘として、血潮の逆しる音が聞える。寺田屋は、今修羅の巷と化した。

六

大山格之助は、階下に控へて、二階から降りて来るものを、待つて居るのであつた。二階では、下座敷の劔の音を聞いて、さては始まつた、と、一同が立ち上る、弟子丸龍助が、眞ツ先に、かけ下りて、階段の中央まで来ると、『ヤツ』と、かけた氣合もろ共、横に拂つた、電光一閃、龍助は、腰へ甚太斬り込まれた。

『あツ』と、叫んで轉け落ちた。見れば、大山が、立つて居るので、『己れ』

飛び起きて斬りかけたが、最初の深創に、氣息も絶え／＼であつた。終に亂刃の下に、斃れて仕舞つた。續いて降りて来たのは、橋口傳藏であつた。これも、大山が、下から斬りつけた。傳藏は、『ヤツ』

と、聲をかけながら、飛下りたが、左の足を、ふかく斬られて、ふみ立てることが出来ないで、跛足をひきつゝ斬り結んだ。鈴木勇右衛門が、之れに向つたけれど、横鬘から耳へかけて、深く斬りつけられた。伴の昌之助が、父に代つて對手になつたけれど、傳藏の双先鋭くして、向ふもの皆な傷くの有様であつた。

『何うぢや、これでも降参せぬか』格之助は、烈火の如く憤り、ふみ込んで斬りつけた。傳藏は、飛び退かうとしたが、片足の悲しさには、進退自由ならず、終に格之助の爲めに斃された。西田眞五郎も、二階から降りる所を、槍で突かれた。橋口莊介は、有馬の斬られたのを見て、奮闘數刻に及んだけ

れど、事不意に起り、殊には數人を、對手の蹶ひとて、重傷を負ふて倒れた。

『オイ、奈良原』

喜八郎は、血刀を提げて、『何か』

『水を飲ませて呉れ』

喜八郎が、水を飲ませやると、『ぐツ』と一息に飲んで、『ア、己共は之れで死ぬ。これからは、足下等の天下ぢや』

映然一笑して、どたりと倒れたが、時に二十二歳であつた。

この時、二階に残つたものは、河野四郎右衛門、篠原多一郎、町田六郎左衛門、大山彌助、阪元彦左衛門、西郷愼吾、木藤市助、吉原彌次郎、永山彌一郎、谷元兵右衛門、吉田清右衛門、林庄之進、美玉三平、岩元勇助、白石休八、深見休藏、森親兵衛、岸良俊助、三島彌兵衛、伊集院直右衛門、松田東園、是枝萬助、大脇仲左衛門、揖宿三次、柴山龍五郎等、屈指の志士であつた。いづれも、刀を持ち、槍をしごいて、階下の様子を窺つて居る。柴山龍五郎が階下へ降りようとする。階下には、江夏、大山が、血刀を揮つて、持ち受けて居た。

『待つてツ……皆な待つてツ』

後から聲をかけたのは、奈良原であつた。

『オイ、龍五郎殿……少し待つて呉れんか』

『今に及んで、何を待つのか』

『己共は、皆な君命に由つて来たのぢや。足下等も、島津の家臣ぢや。一應は君命を聞くのが、家來の義務ぢや御座らぬか、己が、其處へ行くか、足下が、此處へ来るか。しばらく御互に劔を藏めて、相談せうと存するが、何うぢ

「頼む、頼む」
奈良原の顔には、誠意が現はれて、言ふ所にも、道理はあつた。けれども、流石に柴山は、躊躇して居る。奈良原は、大小を投げ捨て、兩肌を押脱いで、合掌しながら、

と、いつた。今は血闘つて居るが、元を洗へば、兄弟も同様であつた。強ひて生命の奪合はし度くない。兎も角、喜八郎の語る所を、聞いて見ようとなつた。柴山は、降りて來た。西郷、伊集院も、續いて降りた。これから喜八郎が涙を流して、君命を傳へ、是非は暫らく言はず、京都へ同道して、久光公に拜謁して見ろ、といふのであつた。柴山等は、二階へ戻つて、一同へ、相談に及んだが、議論紛々、天明近くなつて、終に決した。兎に角、久光公に拜謁しよう」といふことになつた。

喜八郎は、此時に、久光公も、この一擧には、志あるが如くに聞かせたので、辛うじて治まつたが、その實は左様でなかつた。京都へ着くと、皆な處分されて仕舞つた。

寺田屋事件の概略は、之れ了つたから、談緒は、更に西郷の島流しに移る。

田中河内之介は、中山大納言の家人であつたが、此事件の發頭人ともいふ可き人であつたから、事件の當時は、既に中山家から離れて、一個の浪人として、加はつて居たのである。

薩藩に於ては、この人を、しばらく預り置く、といふ意味で、國元へ、送る事になり、兵庫から、藩船へ乗せて薩摩へ向つたのであるが、強烈な倒幕主義の人を、國元へ送ることは、頗る迷惑なりとして、船が、播磨灘へかかった頃、磐固の藩士をして、終に慘殺せしめ、その屍骸は、海へ投込んでしまつた。芝居で演るやうに、納得させて殺したのではなく、手足を縛つて置いて斬殺したのであるから、實に奇怪千萬である。

此時には、伴の琢磨介も、同じ運命に襲れたのであつた。

孤島生活の南洲

一

西郷は、天祐丸に載せられて、薩摩へ、送り歸された。村田と森山も、同じ船であつたが、又久二年四月下旬、山川港へ着いて、寸時の上陸さへ許されずに、藩命を待つ身となつた。京阪の同志から、追々の報知に、藩中の味方は、非常に激昂して、西郷等の赦免を、藩廳へ迫まり、有志の運動は、だん／＼はげしくなつて來た。藩の重役は、この状況を見て、西郷等の處分が、徒に長引のは、人心動搖の因と考へて、島送りを急ぐ事になつた。

老臣や重役のうちにも、このたびの處分に、多少の異見を抱くものはあつたが、何分にも久光の怒りが強いので、どうしても救ひ得なかつたのである。

山川港に滯泊中、寺田屋の變事を知つて、西郷等三人は、天を仰いで、ひそかに嘆息した。左様した事が、起らぬやうにと考へて、大に努めたのであるが、却て、それが爲に、罪を得て、島へ送られる身となつたのみならず、寺田屋には、同士討の慘劇が行はれたのであるから、西郷としては、一段の遺憾と感したのには、無理もない事であつた。

藩の役人が、船へ來て、西郷と村田へ、島送りの申渡しをした。然るに、どういふ理由か、森山のみは、その罪を

免がれて、上陸の命をうけたので、森山は、ひどく憤慨した。西郷のみが罪せられて、村田と自分が、御構なしといふのならば可いが、村田は、西郷と同罪になつて、獨り自分丈だが、上陸を命ぜられる、といふのは、其意を得ぬ、といつて、しきりに争つたが、藩廳からの沙汰が無い、として見れば、出張の役人も、森山へ、島送りの申渡しは出來ぬ譯で、終に森山は、西郷と村田に別れて、上陸する外はなかつた。

森山は、元來が、本格の士人でなく、要するに、苗字帯刀を許されし、郷士の事であるから、藩廳の方では、その點に斟酌するところがあつて、御構なしとしたのであらうが、士人の魂を有つた森山は、この處分を、自分に對する、侮辱と考へたらしく、船の出帆を待つて、終に切腹して仕舞つた。その辭世の歌は、

生延びて何にかはせん深草の
露と消えにし人を思ふに

と、いふのであつた。

森山の自殺を聞いて、西郷と村田は、涙を流して、其死を惜んだ。兩人は、島へ行つてから、森山の遺族へ、今日まで國事に盡力した事を、くはしく書いて送り、深く其死を惜んだ、といふ事である。

山川港には、殆んど三十日も居たが、その長い間、上陸は、更に許されず、家族の面會にも、掛りの役人に由つて寛嚴の區別が著るしかつた。今日は、愈々出帆といふ、間際になつて、實弟の吉次郎と、僕の熊吉が、遣つて來た。役人の情けて、面會は許されたが、西郷は、兩人から、祖母の死を聞いて、悲嘆の涙にくれた。祖母は、西郷を愛して、幼ない頃から少年時代は、殆んど祖母の手に、人と成つたのであるから、それ丈けに、祖母の死は、西郷の爲めに深い哀愁を感じしめたのである。

村田の送られる先は、喜界ヶ島であつたが、西郷は、徳之島へ、送られる事になつて居たのだ。同じ流罪にしても兩人が、一しよに居られるならば、互に慰め合ふ事も出来るが、離れ／＼の島生活では、いかんとも致しやうがな

前年に流された、大島の南方に當つて、砂糖の産地として、有名な徳之島が在る。中原萬次郎といふ人が、代官を勤めて居た。能く事理に通じて、人情にも厚く、慷慨義烈の志士であつた。西郷が、送られて來ることを聞いて、その境遇には、深く同情したが、來島するといふ點には、ひどく喜んで、歡迎の誠意を盡した。

『假し罪を得て、斯る身の上になつても、齊彬公の愛臣ではあり、罪といふても、久光公の御思召に叶はなかつたといふ迄のこと、いづれ赦免の御沙汰は、近いうちに在るもの』

と、確く信じて、中原は、西郷を取扱つて居たのである。然るに、中原の同情も空しくなつて、再度の嚴譴が下つた。藩命に依れば、沖之永良部島へ移せ、とのことであつた。久光は、よほど西郷が、憎かつたに違ひない。左もなければ、斯うした御沙汰の下る理由はないのである。

『申上げやうもなき事、御座るが、藩命は、止むを得ませぬから、その御用意を、願ひ度い』

『自分の罪は、自分で償ふ外ござらぬ』

一

本人は、存外に平氣だが、中原の方は、却て力を落して居るのであつた。沖之永良部島は、琉球へ近く、藩では、死罪に次ぐ可き、重刑者を流す島に、なつて居たのだ。この島へ流されるとなつたら、その人は、生きて歸らう、と、思つても、大概は、島で終るのが常であつた。

送り船には、嚴重な牢が、出來て居て、それへ、西郷を入れた。警固の役人は、物々しく振舞つて、癪にさはるほど嚴しい取扱ひであつた。自分に、充分の覺悟があるから、役人の取扱ひに就て、神經を尖らすやうな事はなく、すべて控へ目録にして、禮儀を正しく、應對して居るから、役人の方でも、威張り甲斐がなかつた。

極く卑い役人のうちに、怪しい奴が居て、頻りに西郷の舉動を、チロ／＼見ては、何か考へて居る。西郷は心のうちに、『さては、之れ迄に苦めても、猶ほ嫌らずして己を殺すつもりか、それならば、初めから死罪にすれば宜いのに要らぬ手数をかけたものだ』と、最早自分は殺される覺悟で、少しも動ぜず、平然して居た。今日は、他の役人が、皆な休息して、その怪しい奴が、只だ一人で、例の通り、チロ／＼見て居るのであつた。西郷は、牢格子に寄掛つて居眠つて居ると、軽く音を爲せて、格子を敲くものがあつた。眼をさまして見ると、例の奴が、コツ／＼やつて居たのだ。

『先生ッ』

これは意外千萬、先生と呼ばれて、西郷も、變に思つた。

『これを、御覽下さい』

と、いひ乍ら、四邊を見廻して、何か投げ込んだ。膝の上へ、ぱらりと落ちたのは、手紙であつた。不審に思ひながらも、取上げて見ると、自分へ宛てた書面で、而も手蹟には見覚えがあるから、熱と見詰めて居た。

『はやく／＼』

と怪しい奴はいふ、急かれて封を切ると、見覚えのある筈、これは桂四郎からの手紙であつた。

嘉永の御家騒動に、忠死を遂げし、赤山靱負の弟、四郎からの手紙は、全く思ひも寄らぬ音信であつた。封を切つて、読み下せば、先づ此度の御沙汰について、ふかく慰めた上、足下の災難には、多くの同志が心配して居るから、いづれ機會が來れば、救はれる事にならう。それ迄は、隠忍して短氣を起すな。この手紙を持つてゆくものは、拙者の部下であるから、心配なく用事を申付けてくれ、といふのであつた。

と、いひ乍ら、四邊を見廻して、何か投げ込んだ。膝の上へ、ぱらりと落ちたのは、手紙であつた。不審に思ひながらも、取上げて見ると、自分へ宛てた書面で、而も手蹟には見覚えがあるから、熱と見詰めて居た。

鬼にも均しい、重罪の處分を受けてさへ、さらに心を動かさなかつた西郷も、情けある友人の手紙を見ては、嬉れし涙にくれるのであつた。それにしても、此使者をして呉れた恩人を、たとへ片時でも、怪んだのは申分けない。知らぬことゝは云ひながら、何とも相濟ぬ次第であつた、と厚く謝言を述べて、今迄の無禮を詫した。地獄で佛ともいふ可き、救ひの手紙を得て、西郷の心は勇み、前途に一條の光明を、見るの思をして、死の覺悟のうちにも、今は樂みを感じるやうになつた。

琉球を距ること四十里、山川港へは六十里、地味は悪く、穀物の出來ぬ、全島は、瘴癘の惡氣が、充ちて居る、といふ、恐ろしい永良部島へ着いたのは、炎熱蒸すが如き、八月の上旬であつた。

二二

永良部島には、眼につくほどの大山はなく、小丘が、起伏して居るばかりで、それが大概は、禿山であつた。従つて、薪材に乏しい所であるから、馬糞や蔗殻を、薪材の代用にして居るなどで、風は荒く、浪の高い、實に堪まらないほど、厭な島であつた。

大島へ、流された時は、糧米は支給はれたし、島司の同情はあつたし、存外に、安樂な生活であつたが、今度は、その時と、大に事情が違つて、實に酷い取扱であつた。

松の丸太を、其儘に組んで、造り上げて、三坪ばかりの小屋であつたが、それを、二つに仕切つて、寢起する所は僅に九尺四方の狭い室であつた。床は、丸木の上へ、板を張つたばかりで、便所もなければ、浴場もなく、食ふものは豚と同じやうであつた。

季節は、八月暑い盛りで、風はあるが憩ふ可き、樹蔭もなく、その頃から、肥はじめた體格の、汗も人並外れて出る。手足の關節にはあせもが當じて腫物となり、チク／＼水の出る、心地の悪さ。夜になつて、少し乾くと、むづ痒くなつて堪へられず、夢中にぞれを掻くと、水が出るから、それが爲に、他へ癒えるばかりだ。殊に、暑氣中の工合で、今は寢起も自由にならなくなつた。板張の上に、仰臥した限りで、只だ死を待つの外はなかつた。

「いざるかのう」

と、聲をかけながら、はいつて來たのは、島役人の土持政照といふ人であつた。

「ヤツ、寢てござるな」

西郷は、靜かに眼を開いた。島へ着いた時に、一度見たことのある、役人だ。

「病氣しましたな、御無禮します」

起き上る力も、ないと見える。

「何うしなされたか」

暑さうにして、衣服を捲つて居るので、手足は、現はになつて居た。

「これは、豪い腫物ぢや」

「汗をかき居るのでな」

政照は、西郷の容子を、熟々と見た。顔色も好くないが、元氣も、頗る衰へて居る容子に、同情の感が起つたものか、涙を浮べて、猶ほ見て居た。西郷は、疲勞が甚だしいので、斯うして話して居るうちも、昏々として眠りに入るのであつた。

政照は、黙つて歸つたが、次の日は、七八人の島人を、連れて來て、家の裏手に、便所と行水場を新設にかゝつた。固より粗末なものではあるが、忽ち出來上つた。食物の世話掛りを、一名従けることに爲るやら、醫者はないが、船便毎に、取り寄せた、藥があるから、それを飲ませた。その日から、行水を爲すことになつたので、腫物の方は、追々に快くなつて來る。藥が利いたのか、暑氣中も、大分宜くなつて來た。政照は、毎日のやうに、見舞ひに來て呉

れる、何ういふ理由で、斯う爲れるのか、西郷には解らなかつた。心には嬉れしく思つたが、口には出さずに、政照の爲る通りに、なつて居るのであつた。

一日のこと、政照が、例の通り、見廻りに来て、世間話をはじめたので、始めて次第が解つた。西郷の姻戚のもので、先代の土持といふ人が、この島へ流されてから、島で、一生を終つた。遺した子供が、この政照なのであつた。政照のことは知らないが、土持が、島で死んだ、といふことは、子供の時分に、聞いて記憶がある。政照が、親切にして呉れる理由は、さうした因縁からだ、といふ事が解つた。當然死す可き運命の西郷も、政照の爲めに、生命を繼がれたのであつた。

その後、藩臣の川口良次郎といふ人が、これも、流されて来て、西郷を訪ねた。これが非常な學者で、西郷は、之れに従つて、大いに詩書の教へを受けた。後年に、此人は私學校の教師になり、西郷とは、最も親しくして、明治十年の戦後、武村の西郷邸を守り乍ら、生涯を、其處で終つた。

赦免の運動

薩長二藩が、聯合して對抗すれば幕府の苦しむことは、初めから判り切つたことであるが、容易に左様ならなかつたのは、どちらにも己惚があつて、自ら進んで握手しよう、としなかつた爲めでもあるが、別に猶う一つの事情があつてどうしても、協同の動作を取り得なかつたのである。

長州藩は、疾くから京都へ手を入れて、熱心に勢力の扶植を努めたので、遅れて出かけた薩藩は、その尻に尾いてゆく外なかつた。この一事は、薩藩の面目から見ても、忍び得ぬ事であり、藩論も、齊彬を亡なつてからは、佐幕の方に傾いて居たので、萬事が立遅れの形で、それ等の事情が、二藩の接近を妨げて居たのである。

寺田屋の事件は、頗る悲壯でもあり、且勇敢な血闘ともいへるが、何としても同士討の事丈けに、あまり香ばしい評判ではなかつた。殊に、倒幕派の有志の間には、此事件に憤慨して、久光を咀ふものさへあつた。

この時代に、京都の實権は、殆んど毛利の獨占、ともいふ可き状態であつた。その他の諸藩は、毛利の指揮の下に動くか、左もなければ其跡から、フラク／＼尾いて行く、といつた程度で、毛利の勢力は、實に豪いものであつた。

久光の上洛に由つて、薩藩の位地は、多少見直したが、未だ長州藩を凌ぐ、といふほどのものではなかつた。兩雄不並立といふ諺の通り、薩長二藩の感情は、とかく疎隔し勝てあつた。寺田屋の事件が、世間の批評を裏切り、却

て朝廷の御感に入つた、といふ事に對しては、長州藩のものは、之れを不快に思つたに違ひない。薩藩の方では、長州藩が專横である、と言つて、之れに對抗しよう、とする風が、チラ／＼見えて來たので、長州藩は、防禦線を張つて、薩藩に、權勢を有たせぬやうに、努力する。その暗闘は、何時か一度は、形體となつて現はれて來る。前年から持越しになつて居る、攘夷の御沙汰を、徳川將軍へ、直接に申渡す、といふことになつて、大原三位重徳卿は勅使として、關東へ下向することになつた。その護衛を命ぜられたのが、島津久光であつた。同時に、毛利敬親へ對しても、勅命の實行せらるゝやう、將軍家へ、内部から刺激を與へるやうと、大切な御説が下つた。毛利は、此命を受けると、直ぐに江戸へ急行した。言ふ迄もなく、島津に、鼻を明させようが爲めであつた。久光は、勅使護衛といふ大役で、藩臣の屈強なものばかりを、撰りに撰つて、支度が出来た。道中は非常な勢ひで、江戸へ着いたのが文久二年六月七日であつた。

本來は、島津毛利と、相並んで出發する筈であるにも不拘、毛利は、島津へ無斷で、逸早く出府したので、久光は非常に不快を感じた。同時に、藩士等も、毛利に對する、反感を強めたのであるが、要するに此一事は、薩長軋轢の因になつたのである。

勅命の内容は、攘夷の實行を、將軍に命ずるのであつたが、もう一つは、安政五年以後の國事に、罪を得た人の祭典を許せ、といふのであつた。いづれも、幕府に取つては大問題であるから、即答の出來得可き筈はない。然るに、勅使は、日を限つて、返答を迫まるので、幕府は、狼狽を極めた。毛利が、之れに就いて、幕府の弱點に乗じ、可成り深刻に、いぢめつけたことは、勅使を扶けるに、最も有力なものであつた。

擦つた揉んだの結果が、幕府は往生して、二つともに御受を爲る、といふ失體を演じ、殊に、將軍家茂の上洛を、約束して仕舞つた。勅使の大原は、非常な喜びで、毛利が、幕府を刺激して呉れた。毛利に對する敬意は、島津へ對する、それよりも厚かつたのは、謂ふまでもない事である。

護衛の役を果して、勅使に後れて、久光の行列が、品川大森を経て、鶴見の生麥へ來ると、夷人が、馬に乗つて、先供を横切らうとした、二三度は聲をかけたが、言語が通じないから、夷人は、平氣で先供を侵さう、と爲るのを先供の頭をして居た奈良原喜左衛門が、躍りかゝつて二人を斬つたので、一人は逃げて仕舞つた。之れが後日の問題になつて、鹿兒島灣の戦争が起つた。

京都へ歸つて來て、朝廷の御感を蒙り、三郎の名を賜はつた。久光の忠節は、兒島高德に、酷肖て居る、といふので、この光榮に浴したのであるが、久光は、間もなく薩摩へ歸る事になつた。

一一

毛利父子は、それに先立つて、既に歸國して居たが、吉川監物、毛利齋岐の兩人が、滞京して居た。併し、實際の仕事は、桂小五郎が行つて居るのであつた。朝廷は手一ぱいに、この桂が、擡廻して居て、何事も、桂の意見に依つて、決するほどの有様であつた。薩州藩でさへ、何うかすると忘れられるのだから、他の小藩の如きは、殆んど眼中になかつた。

油斷大敵といふ諺がある。いかに偉いといふても、桂は、未だ廿七歳であつた。餘り勢ひに任せて、行き過ぎるところから、薩人の反感は、漸く高まつて來た。その立場は、全然異つて居たが、長州藩に對する、同じ思ひの會津藩と、追々接近して行くのであつた。理窟からいへば、會津の握手が、出来る筈はないのに、それが接近し得たのは、偏へに毛利を、抑へ付け度いからの一念からであつた。その外には何もなかつたのだ。藩邸に、詰めて居たのが、奈良原喜八郎、高崎左太郎の二人であつた。會津藩の秋月梯次郎、廣澤安任の二人と、幾度か會見した結果が、文久三年八月十七日の政變になつたのである。

會津中將容保、澁侍從稻葉美濃守は、臨時に參内して、一瞬の間に、毛利を叩き付けて仕舞つた。公卿の中にも、

毛利に快からぬものもあつて、之れを機會に爆發したのだ。毛利は、禁裡守護職を免せられ、毛利派の公卿、二條實美以下の七卿は、同時に官位を奪はれる。その晩の混亂といふものは、名狀し難いほどであつた。之れが爲めに、一時は、戰爭にでもなりさうな勢ひであつたが、吉川、桂が非戰論であつたから、國元へ引上げることになつて、七卿も、此人數の中に加はつて、長州へ落ち延びることに決した。それから、引續いての騒ぎが、大和五條の亂、侍從中山忠光卿を擁して、藤本鐵石、吉村寅太郎、松本奎堂等の連中が、攘夷の先鋒を爲るとして、旗上げに及んだ、けれども、時機が、未だ早過ぎたので、大きい事件にならず、紀伊中納言、藤堂和泉守、その他二三の小藩が、討手に向つて、忽ちに落着して仕舞つた。

五條の亂よりも、稍や仕掛けの大きかつたのが、生野銀山の一擧であつた。之れは例の七卿のうちから、澤主水正嘉宣を、連れて来て、大將に仰いだのであつた。戸原卯橘、南八郎、平野國臣等の烈士が、參謀になつての擧兵で、一時は却々の勢ひであつたが、固より烏合の衆、訓練の足らぬ農兵ではあるし、武器や兵糧も不十分であつたから、これも忽ちに敗れて仕舞つた。

この混亂の最中に、將軍の家茂は、上洛したのであつた。勤王派の輕擧が、此くの如く、幾度か續いたので、それが却て、徳川幕府の利益となつて、京都の實權は、再び幕府の手に歸した。しかし、朝廷の攘夷論は、この際と雖もさらに變りはなく、横濱鎖港の勅命は、矢張り下されたのであつた。

之れより先き、久光は、左近衛少將に進み、大隅守と相成つて、薩藩は、漸く勢力を得て来る。寺田屋事件以來、久光の遣口は、多少の非難も受けたが、大體に於て、内外の評判は宜かつた。所が、寺田屋事件で、勤王派が閉息して、佐幕派が、跋扈して來た。之れは勤王派の忍ぶ所でない。けれども、悲しいことには、勤王派には、首領がなかつた。大久保市藏は居るが、君側に勤めて居るので、隨意の動きが出来なかつた。この儘にして置けば、勤王派は、終に滅びて仕舞ふ外はない。此に於て、流罪中の西郷を、暫とあして引出さうとして、熊るものが出て來た。それに

二二

會津との聯合も、何時まで續くものではない。萬一の場合に、西郷を要することは、今から知れて居るから、はやく引出した方が宜い、といふものもあつた。西郷赦免の運動は、斯る事情から、追々さかんになつて來た。

國元の藩士ばかりが、西郷の赦免を、希望して居たのではない。京都に出て居る藩士も、この一事については、同じ思をして居たのである。多少の反感を有つて居るものにしても、此際は、西郷の在否が、藩の立場に、重大な關係ある事を、よく理解して來たから、大體に於て、赦免の運動に、反對するものはなかつたのである。

その頃、薩藩の勤王派で、京都に居たものは、多く身分の低いものであつた。意氣に於ては、他に一步も譲らないが、藩に於ては、勢力の無いものが多かつたから、一人の力を以て、久光を、動かすといふほどの人物は、全く無かつたのである。

黒田吉左衛門(清綱)、伊知地正治、柴山龍五郎、折田要藏、伊集院直右衛門、三島彌兵衛(通庸)、川村與十郎(純義)、篠原多一郎(國幹)、中村半次郎(桐野)等の人々が、圓山の某樓へ集まつては、西郷赦免の方法を講ずる。種々相談の末が、久光公に、哀訴する外はない、と決した。黒田伊知地の兩人が、一同の名代として、その役を務めることになつた。最初から、久光公へ申上げるよりか、先づ小松帯刀と大久保市藏を、説く必要がある。都合に由つてはこの兩人から、哀訴させるのも一策である、と考へた。

黒田と伊知地は、大急ぎで歸國した。先づ小松に面會して、相談して見たが不可ない。小松は、西郷流罪の沙書に、連署して居る一人であるから、赦免の願ひは無理である、と答へた。さらに、大久保を訪ねると、之れも不可ない。大久保は、矢張り其當時に、嫌疑を受けた一人であるから、之れも哀訴するには、工合が悪い、といふのであつた。左様いふ事情があつて、大久保小松の兩人は謝絶つたのだが、この報告を聞いて、一同は、非常に憤激した。大

久保や小松は、西郷の赦免を喜ばないのだ、不都合極まつた奴である、といふので、この上は致方がないから、久光公に、拜謁の上、強諫して赦免の御沙汰を、請ふ外はない、萬一御聞届けない時は、一同その場に於て切腹しよう、と相談が決まつて、連判状をつくつた。在京の藩士を代表して、兩人が署名し、三十餘名の血判が揃つた。

強諫の聯盟は、秘密のうちに運ばれたのであるが、事は、疾くも漏れて、高崎左太郎が、先づ之れを知つた。

『これは、一大事である。打捨て置ては、嘉永の昔に在りし、御家騒動の二の舞にもならう』

と、ひそかに心配して居る所へ、黒田と伊知地が行つて来て、仲間入りを勧めるのであつた。

『御決心は、實に立派なもので御座るが、併し、それほどに爲すとも、救ふ道はあらう、と存するから、一兩日の間己に任せて貰ひ度い。何とか方法を、考へて見よう』

と、一時は宥めて歸したが、之れといふて、善い分別もないから、高崎は、覺悟を定めた。

『自分一人で、君公へ御願ひ致し、それで容れられざる上は、切腹して仕舞はう。左様したら君公も、自分の死を憐んで、西郷を赦して下さるであらう。然すれば騒動にもならず、済む』

斯う決心して、高崎は、久光の御前へ、罷り出た。

後年に、明治天皇に事へて、御歌所の長をして居た、正風の昔である。御氣に入りの左太郎が、出て來たので、久光の御機嫌は、頗る善かつた。

『おう、左太郎か』

『ハツ』

『珍らしい話はないか』

『恐れ乍ら、お人拂ひの義を願ひ上げます』

一同の近臣は、遠ざけられた。

『何事か』

『他の儀でも御座りませぬが、兼て流罪仰せ付けられましたる、西郷吉之助の赦免、偏へに願ひ上ます』

久光の顔色は急に變つた。

『その儀は相ならぬ』

『でも御座りませうが其處を幾重にも』

『相成らぬと申すに、強て申すか』

『御言に背きまするは、恐れ入つたること乍ら、吉之助の儀は、先君の御寵臣に御座りまする。この儘ま、御赦免なしとありましては、先君のお眼識違ひとも相成りませうか。孟子に、左右皆賢也と曰ふも、未だ可ならざる也。諸大夫皆賢也と曰ふも、未だ可ならざる也。國人皆賢也と曰ふ。然る後に、之れを察し、賢を見て、然る後に、之れを用ひよ。と御座りまする。御家臣一統は、西郷の赦免を冀ふも、君公御一人之れを許さず、と仰せられては、天下の人、果して之れを何と申しませうか、殊に先君の……』

『もう、解つた』

『ハツ、さては御聞届け下さりまするか』

『篤と考へて見よう』

之れて、高崎も、御前を退つた。

四

久光の西郷に對する反感は、非常に深くあつたが、先君の寵臣なる一語には、流石の久光も、閉口するのであつた。

これを言はれると、何時も黙つて仕舞ふほどに、よく利目があつたものだ。高崎が、腹を切る氣で、うむと突込んでの諫言を、叱りつける勇氣もなく、

『再考して見よう』

と迄、久光に言はせたのは、偏に高崎の至誠が、此に至らしめたのである。

高崎が、御前を退くと、直ぐに小松帯刀を訪ねて、詳しく物語つた上、尙ほ小松からも、然る可く申上げて呉れと頼み込んだので、左様いふ次第ならば、大久保とも、一應相談して見ようとなつた。市藏に、異論のある可き筈なく只だ此二人は、前に述べた通りの事情から、自分が先に立つて、申出ることには出来ないが、若し、他から言ふて出るものがあれば、その尾に従いて、諫めることは出来るので、早速に御前へ出て、西郷の赦免を乞ふことになつた。

久光も此に至つて、西郷を赦すの外なかつた。之れでも赦されなければ、内外に信を失ふことになるから、終に、西郷を赦免する事にした。その使者には、吉井幸助が、行くことに決した。幸助は、後年の友實である。

黒田と伊知地を、名代に選んで、その返事を待つて居る、例の連中は、首を延して待つて居たか、見込みのある返事は聞いても、事は、少も運ばれないので、大に焦つて仕舞つて、追々に歸國したのであるが、此上は、最初の考へ通り、一同に御前へ出て、強諫するの外はない、と、勢揃ひして出かけよう、としたところへ、悠然はいつて來たのが幸助であつた。

『やア、吉井か』

『喜ばせることが御座るぞ』

『エツ、喜ばせることがあると、何か〜』

『西郷赦免の御沙汰が出たのぢや』

『何と赦免の御沙汰が……』

『使者の役は、拙者が申付けられたのぢや』

今も今とて、決心の上、御前へ出よう、として居た場合に、この御沙汰が出るとは、實に有難いことであると、一同の喜びは尋常ならず、此會合が、取敢へず吉井の送別會になる、といふ次第で、殆んど徹夜の宴は開かれた。

永良部島に居る西郷は、夢寐の間も忘れぬ、郷國の音信、船便のある度毎に、同志や實弟から送つて來る手紙を探る手遅しと、見る時の樂みは、例へるに物がないほどであつた。東海道生麥の英人殺し一條から、英吉利の軍艦が鹿兒島灣へ、攻め寄せて來た、とのことが、手紙に由つて、知れた時は、腕を撫つて、今日の境遇を嘆いた。

『先生、居りますか』

はいつて來たのは、土持政照であつた。

『おう、土持とんか』

『えらいことに、なりましたな』

『何事か』

『夷人が攻めて來た、といふのでは、御座らぬか』

『うむ、その事は、俺とんの所へも、手紙が來まいてな』

『こりや一大事ぢやが、鹿兒島へ歸らんか。貴下が行かしやるなら、己も行くが』

『流罪人の悲しさには、それも出來ぬでな、只だ泣いて居るのぢや』

『船は己が引受くる。己と一途に歸んなされ』

『島破りは、大罪ぢや』

『國家の大事にや代へられん、後日の咎めは、己が引受くる』

西郷は、暫時沈思したが、
「宜しい、歸ることにしよう。萬事は、足下に頼む」
二人の相談は、之れで決まつた。
この上は、船の都合さへつけば、それでよいとなつた。島脱けの支度は、一切出来て、その日の来るを持つばかりになつた。折柄、船がはいつて来た。同志の手紙は、例の通り、西郷の手へ届いた。開けて見ると、英吉利と大激戦の後、終に英艦は退いた、と書いてあつた。土持も、訪ねて来て、矢張り同様の音信があつた、といふから、島脱けの事は、之れで中止されたのであつた。

五

役船が鹿兒島から、這入つて来ると、流罪人が騒ぐ、若しや赦免の御沙汰がありはせぬか、といふ所から、喜び騒ぐのであるが、普通の島人も、何か嬉しい音信か、珍らしい土産でもないか、といふて、之れも喜ぶのであつた。西郷は、顔色にこそ出さないが、矢張り人間だから、胸の裏では、満更それを持たぬでもなく、況てや、大志を抱いて空しく孤島に在るのだから、人一倍の煩悶はある。しかし、頃日では最早、そんなことは思はなくなつた。自然の運命に任せて、全く無心に、日を送つて居たのである。

書寝をして居る所へ、ドヤ／＼はいつて来たものがある。夢現のやうに覚えはあつた、が尙ほ眼は醒めなかつた。
「先生……起きて下さい」
肩へ手をかけて起すものがあるので、眼をさまして見ると、土持であつた。その背後には、誰れか立つて居た。

「ヤツ、吉井どんか」
精神の修養てる西郷だが、あまりの不意に、聲を出して飛び起した。

「お迎ひで御座るよ」
幸助は只ツた一言、後は涙に聲もくもつた。見れば、弟の慎吾も居れば、僕の熊吉も居た。

「赦免か」
「兄上、赦免ぢや」

慎吾は、兄の手を握つた。事が案外であつたから、西郷も、後の語が出なかつた。幸助から、御沙汰の出た、始末を物語つた。今に始めぬ、同志の情誼には、流石の西郷も、泣くより外はなく、幸助の渡す赦免狀を請取つて、披いて見た西郷は、俄かに顔色を變へて、不審の眉をひそめた。

「こりや、俺どんばかりぢやが、村田は、何うなつたのか」

「今度は、貴殿一人ぢや」

「ふーむ、俺どんばかりとな」

「しかし、村田殿も、追て赦されるぢやらう」

西郷は、思はず嘆息した。

「折角の御配慮ぢやツたが、俺どんは、今迄の通り、この島に、居ることにしよう、と思ふ」

三人は驚いた、顔を見合せたが、幸助も、村田へ對する情として、西郷が斯ういふのは無理でない、と考へた。しばらく思案の末、假し御咎は受けるとも、獨斷を以て、村田も、連れて歸らうと、ひそかに心を決めた。

「貴殿の精神は、己にも能く解つて居る。新八殿も連れて行くことにしよう」

「村田も、連れて行くか」

「赦免の御沙汰は受けて来ぬが、それは己が引受けた。村田を忘れた、といふては濟まんが、實は、貴殿にばかり心を入れて、君公の御許しを受ける迄の力が、もう貴殿一人丈けて、一ぱいぢやツたのぢや。貴殿の許される以上、

村田にも及ばぬ、といふ筈はない。己が、村田は連れてゆく。貴殿も、それなら歸るぢやらう』
 西郷は、幸助のいふことを聞いて、少し無理とは思ふたが、吉井が、引受けるといふ以上、他にも同志があるのだから、どうにでもなるであらう。大久保や小松も、何とでもして救ふであらう、と考へた。西郷は、自分の爲に、罪を得た村田を、島へ残して、自分だけが歸る事は、どうしても出来なかつたのである。
 幸助が、その心を汲んで、此決斷をやつてくれるからは、自分としても、敢て赦免を拒むに及ばないから西郷も歸ることになつた。
 流罪人として、島に居た身は、いざ歸るとなつても、別に支度はないのであるから、身體一つ行けば、それで宜い譯だ。土持は、頻りに別れを惜む。他の人も、之れを聞いて、追々やつて来る。形式ばかりの告別の宴は、土持の家で開かれた。翌日の朝はやく、船は、永良部島を離れて、鬼界ヶ島へ、廻航ことになつた。
 『島も通はぬ鬼界ヶ島へ、遣らるゝ此身は厭はねど』と、俗謡にも、歌はれて居るほどの喜界ヶ島は、永良部島に劣らぬ、酷い島であつた。西郷と別れてからの村田は、この島で、千辛萬苦を、嘗めて居るのであつた。迎ひの船が着いた時は、新入も夢ではないかと思ふばかりで、先づ西郷と、手を探つて、互ひに無事を祝し合ひ、吉井の獨斷を以つて、自分も救はれるのだ、と聞いては、坐ろに涙を流して、幸助の義侠を、有難く思ふのである。
 洗された時の、文久二年四月より數へれば、一年と十一ヶ月経つて、歸つた時が、元治元年二月二十八日のことであつた。

薩長の反目と京都の戦

一

元來が貧しい、西郷の家では、吉之助が、流罪になつた後ち、一層の貧苦に迫られて、其日の煙を絶つ事もあつたが、次弟の吉次郎は、何うか斯うか、遺縁つて居たので、誰れ一人として、感服せぬものはなかつた。
 西郷は、島から赦されて歸れば、先づ家事の苦勞を、負擔す可き筈であつたのに、それすらも出来ぬほど、慌だし旅行を、爲るやうになつて居たのである。
 鹿兒島へ着くと、既に久光から、上京の命令が、出て居たので、家事を顧みるの道もなく、況て一身の保養杯は、思ひも寄らなかつた。早速に旅装を整へて、京都へ向ふことになつた。
 久光は、既に京都へ出て居られた。西郷は、三月十七日に着京すると、即日拜調を許され、十九日に、軍賦役を命ぜられた。今ていへば參謀官、といふやうな役になつた。時に吉之助は、三十八歳であつた。
 文久三年の政變があつてから、薩長の反目は、愈々甚しくなつて來た。毛利は、京都から放逐されたのであるから、その憤慨は、殆んど頂點に達した。薩藩が、會津藩と結んで、卑劣な劃策をした爲に、斯ういふ事になつた以上、今後の敵は、薩藩である、といつて、その怒りやうは、實にすさまじいほどであつた。會津藩は、徳川の親藩であるから、止むを得ずとしても、薩藩が、之れと結ぶは、言語道斷である。勤王と佐幕が、同時に行へる、と思ふか、會

津藩も、之れを知りながら、只だ一時の權謀から、薩藩と結んで居るのは、卑怯千萬だ。我が毛利侯は、何の侵せる罪もなくして、彼等の爲めに、朝廷へ讒訴をせられ、京都から逐ひ出されたのである。この恨みは、必らず酬いずには置かぬと、長州人の意氣込みは、非常な意氣込みで、挽回策に腐心して居たが、その時分から、薩賊會奸の語は、さかんに唱へられたのであつた。

薩摩の商船が、田之浦沖を通ると、不意に、長州藩の砲臺から發砲したので、船長以下卅名が、慘死を遂げ、船は沈没して仕舞つた。この一事でも、薩藩に對する、長州藩の憤怒は、普通でなかつたといふことが知れる。

長州藩にも、硬軟の二派が在つた。直に京都へ迫まつて、文久政變の次第を明かにし、毛利家へ對する、御沙汰の取消しを願はう、といふのが、即ち硬派である。それに對して、一方の論者は、朝廷の御沙汰を、彼是れ非議しては宜しくない。假令會薩の爲せしことであるにもせよ、それは内幕で、表面は矢張り、朝廷の御沙汰であるから、何事も穩便に差控へて、時機の來るを待つがよい、と唱へて居る。これが軟派であつた。

藩中に於ては、之を正義派と稱し、又俗論派と名づけて、互に争ふた末が、いくたびか、血を流して、容易に藩論は定まらなかつた。

硬派、即ち正義派のうちには、松陰門下の俊足が、多く集まつて居たので、その元氣は、遙に俗論派を、凌いで居たのであるが、俗論派には、老臣や重役が、尻押をして居た。硬軟の間に、幾度かの押合があつて、終に硬派の勝利となつた。國老の福原越後、益田右衛門介、國司信濃の三人が、愈々上落することになつた。

薩藩と會津藩は、必ず此一行の入京を、拒むに違ひない。その際は、止むを得ないから、武力に訴へても、押通れ、といふ勢ひであつた。従つて、三國老を、護衛の爲め、相當の人数を繰出せ、とのことで、總勢四百餘人の上つた。久留米瑞、入江九市、來島又兵衛、寺島忠三郎、それに、久留米の眞木和泉守が加はつて、いづれも、甲冑小具足に、身を固め、槍長刀は、鞘を拂ひ、鐵砲彈藥を、携へての上落であるから、實際は、戰争の支度であつた。而かも、その

の名義は、朝廷へ嘆願の爲め上落する、と謂ふのだから面白い。昔は、斯うした恐ろしい嘆願もあつたのだ。時に、元治元年六月十三日のことであつた。周防國三田尻を發して、先づ大阪に向ふのである。途中は、何の故障もなく、正々堂々と、大阪へ繰込んだのが、その月の二十二日であつた。

大阪を發する時は水陸二手に分れた。水路から山崎を経て、天王山に陣を取るのが、久留米の率ゆる一隊、之れには、眞木和泉守が、加はつて居た。陸路を、伏見へ出るのが、福原越後の一隊である。國司と益田は、久留米の隊に居た。福原の隊は、毛利の家臣ばかりだが、久留米の方には、浪人が交つて居た。毛利家の定紋、三星に一引を染抜いた、大旗小旗は、風に翻へつて、その勢ひは凄まじいものであつた。伏見奉行の林肥前守は驚いて、福原に面會して、撤兵の請求をしたが、一も二もなく勿付けられた。林は、直に此旨を、京都へ急報に及んだ。京都の騒ぎは、鼎の沸く狀であつた。

二

伏見奉行の急報を得て、一橋刑部慶喜は、會津中將容保と共に參内した。九門の警護を、嚴重に爲る。在京の各藩へ、令を下して、それ々に、御所を固め、猶は四方の街道へ、兵を繰出す可く、その警戒は、嚴重を極めた。所へ、福原國司益田の三人から、奏文が到着した。その文に曰、

天下の禍福は、既に目睫の間に必迫したり。此時に當つて、宜しく回天の猛斷を施し、搃伐膺懲の大典を擧げざれば、三千年來、宇内に卓立して、未だ他邦の侮蔑を受けざりし所の神州も、可惜、鞞虜被髮の醜域に歸せんとす。誰れか憂慮せざるものあらんや。草莽蟻蟻の微臣、敢て非分を忘却し、天忌を憚かるに暇あらず、石清水八幡の祠前に參籠し、血誠を灌漑して、此に奏言するの止むを得ざるものに非らずや。

抑も、條約の論、一たび世間に勃興してより、有司の失政、遂に國家の大計を誤り、爲めに叡慮を惱ますもの少し

とせず、爾來、殆んど五星霜を閱し、其間、常に妖氣怪氣、天地に鬱塞し、四海億兆、擧げて皆な、悲憤煩悶の至情を呈し、又叡慮を安きに置くの時を、知ること能はざりし。

降つて、戊午の晩秋に至り、勅使關東に下向し、錯擧の朝命を傳へ、將軍の闕下に致してより、漸く攘夷の期限を布告し、加茂石清水の行幸あり、進んで大和の行幸、神宮參拜の命を、發するに至り、天下の人民、又爲めに感激踴躍し、以つて敵愾の志節を起さざるなく、國家の大計、まさに其緒に就かんとせり。然るに圖らざりき、前月十八日を、迎ふるに及んで、一夜、朝議の反覆に遭遇し、忠誠無二の公卿たる、三條中納言以下六卿、并に繁藩主毛利父子に、勅勳を達して、之れが入京を禁じ、施政の大權を擧げて、之れを幕吏の手裡に放任し、前年來、奮勵あらせられたる叡慮と、齟齬するものに似たり、臣等、私かに惟ふに、既往五數年來、確然として動かす能はざりし所の聖斷は、今や富岳崩壞して、平野に化するも、動かし奉ること能はずと、然るに、九重雲深き所、奸徒、其羽翼を伸張し、讒誣欺罔を逞うし、遂に今日あるを致したるを恐察せば、臣等が胸臆、茲に寸裂し、何れの處に向つてか、此慷慨を訴へんや。天に呼はり、地に叫び、悲痛泣哭に堪へざる所也。(以下略之)

この一篇が、所謂嘆願書なるものである。朝廷の反覆を責めて、敢て憚らざる所は、流石に決心のほどが見える。之れを讀んで、公卿の中には、少し心の動いたものもあつた。全く毛利は可哀さうだ、といふ議論も、出て來た。この儘に、逡巡して居れば、毛利は、入京を許されて、會蹙の握手も、この先きどうなるか、判らぬ。従つて、幕府の運命にも關することであるから、一橋慶喜は、長州藩士の入京には、極力反對した。

『福原越後等の處爲は、決して嘆願といふものではない、甲冑や刀槍を、見せつけての嘆願は、不敬千萬である、速かに朝命を以つて、歸國を命じて、然る可きだ。その命に應ぜざる場合には、直に朝敵として、討ち拂ふ迄のことである。殊に、此奏文に、朝意を非議した點がある。毛利の逆意は、之れに由つても既に分明であるから、嚴重の御沙汰を下して、然る可きである』

と主張して、朝廷に於て、之れを容れざる時は、直に辭職して、關東へ歸ると迄に、息巻いて論じた。公卿のうちに、毛利に同情して居るものも、少なからず在つたが、亦た一面には、幕府を憚かつて、それでも、毛利の罪を許す可し、と、いひ得るものは無かつた。

會津藩は勿論、幕府と死生を共にするのだから、問ふまでではないが、薩藩は、如何な考へて居るか、之れは一應、確めて置く必要がある、といふので、近衛忠房が、薩藩の意向を搜ることになつて、西郷へ、面會を求めて來た。

二二

久光は、西郷が上京すると、殆んど同時に、歸國して仕舞つた。その後は、小松帶刀が家老、西郷が軍賦役、伊知地正治が軍役奉行、吉井幸助が、小納戸頭取といふ役割で、萬事は、此四人が、切盛をして居るのであつた。大久保は、久光に従いて歸國したのであつた。

西郷は、流罪になる前から、長州藩との折合に就ては、頗る心を砕いて居たのだ。處が、島から歸つて來て見ると、豫ねて心配して居た通り、長州藩との關係は、全く仇敵の如くなつて、今は吳越の昔のやうに、反目嫉視、殆んど收拾し得ざるほどであつたから、當分は、此状態てつづける外はなく、行當る迄、行當つた後は、また調和の機會もあらう、と、心のうちでは覺悟を極めて居たが、それにしては、長州藩の一擧一動には、大に注意す可きである、と考へて、中村半次郎を招んで、ひそかに長州へ、探偵として入込むやう、人知れず命じた。中村が、長州へ密行したことは誰れ一人として知るものはなかつた。

長州では、今ま出兵の準備最中、其處へ、中村が遣つて來たのだ。福原越後等の出かける事情は、直ぐに判つて、之れを西郷に報じたので、夙く知つて居る丈けに、西郷は、一向驚かなかつた。所へ、近衛忠房が、訪ねて來たのだ。

「西郷はんえらいことになりましてな」
 「伏見の一條で、御座るか」
 「はア、何ないになることやら、心配でなりまへんが、貴殿は、何ないに考へなけるかな」
 「御心配のことは御座るまい。一應は説諭めて、それでも肯かぬ時は、討ち拂ふまでのことぢや」
 「一橋はんも、そないに言はしやるが、戦争になつては困るに因つて、貴殿の智慧を、借りに來たのやがな」
 「その外に、考へも智慧も御座らぬ。戦争になつては負けはせぬから、御心配には及ばぬ。朝廷は、何事も仰せられず、幕府に任せて置けば、それで宜いのぢや」
 「それで、事が治まらうか」
 「治まつても、治まらんでも、その外に、良策は御座らぬ」
 忠房は、漸く安心して、歸つて來た。一同へも、この通りに告げた。西郷が、其覺悟で居てくれるなら、たとへ長州兵がはいつて、來ても、左迄に心配する事はない、と、公卿の恐怖は、やうやく鎮まつた。

幕府からは伏見へ、度々の使者で、徵兵のことを迫まつたが、更に應じなければかりでなく、動もすれば、入京をしさうであるから、この上は、兵力を以つて、追拂ふ外はない。それにしても、薩藩の意向は何か、兎に角、出兵の催促をしろ、といふことになつて、その旨を、薩藩へ通じた。薩藩では、意見を定めて答へる事になり、小松、西郷、伊知地、吉井の四人が相談にかゝつた。西郷の意見は、出兵するに及ばぬといふのであつた。
 「今度の長州藩の舉動は、まさに常軌を逸して居るには違ひないが、それは會津に對する、憤懣の氣が溢れた迄の事で、薩藩の與り知る所ではない。假し、長州藩が、薩藩を、會津同様に見て居るにしても、薩藩では、左様でないとして居れば可いのだ。薩藩は、長州藩の正面に、立たないやうにして居るのが、肝要である。従つて、朝命の外は、一切出兵せぬ、といふことに定めて置くが可い」

評議の結果は、之れに決した。
 丁度、この時に、一橋慶喜から、小松へ呼出があつた。小松が罷り出ると、出兵の催促であつた。
 「出兵の件は、西郷へ、御沙汰下さるやう、願ひ上げる」と逃げた。
 更に西郷を呼出して、その答を求めると、
 「朝命の外は、出兵は致さぬ」と答へたので、幕府も、之れには困つた。

四

西郷は、努めて長州藩と、正面の衝突を避けよう、として、可成くは此争ひの渦中へ、飛込むまいとしての掛引であつたから、何となく寛切らぬ態度であつた。
 斯うして、薩藩に、逡巡して居らるゝ事は、他の藩への影響もあるから、幕府に取つては、此上もない迷惑であるが、上手に逃げられては、強て抑へ付けやうもなく、といつて、未だ堂々と、戦を開く可き口實はないのであるから、朝廷へ奏請して、薩藩へ出陣を命ずる、といふ程度に、事情は切迫して居なかつたのである。
 幕府と薩藩の間に、出兵に就ての紛紜があつて、荏苒日を送つて居るうちに、長州の兵は、愈々入京するとの急報は、櫛の齒を引くが如くに来る。此に於て、幕府も、大決心を以つて、朝廷へ迫まり、長州追討の勅許を請ふことになつた。慶喜が參内して、強て之れを願つたから、七月十七日に、勅許が下つた。翌十八日には、追討の總督を降命した。
 早速、配兵の準備に着手する。先づ、伏見の方面へは、先鋒として大垣藩、後備には、彦根、會津、桑名の三藩、

遊軍は、丸岡、小倉の二藩として、繰出させる事にした。山崎の方面へは、先鋒として宮津、郡山の二藩、後備には小濱と津の二藩が控へて居る。また、天龍寺方面へは、右翼の先鋒に、薩摩、膳所、福井、左翼の先鋒は、小田原藩、後備は松山と決した。尤も、薩藩丈は、未だ承知をしなかつたのだ。本陣を、東寺に置いて、會津の兵と、旗本が詰める事になつた。この外に、肥後と久留米の兵は、全く獨立して、萬一の變に備ふることになつた。洛中洛外の堅めは、三條通りへ、笹山、加州の二藩、下加茂は出石藩、上加茂は因州藩、老阪へは龜山藩、鷹ヶ崎は備前藩、上加茂の川南は、尾州藩、長州屋敷と對州屋敷の中間には、筑前藩の兵を備へた。配兵は、斯く決したが、薩藩は、獨り泰然として、更に動きさうもなかつた。

事、此に及んでは、朝廷に於ても大英斷の外はなく、薩藩へ、特に勅命が下つた。薩藩も、朝命とあつては、妄りに拒むことは出来ぬが、長州藩へ對する權謀上、出兵するにしても、後日の爲め、巧妙にやる必要があつた。西郷小松等は、相談に相談を重ねて、禁闕守護の爲めに出兵する、といふ名義を以て爲る事に決した。天龍寺の方面へは、島津備後が、小松と共に向ふことになり、禁闕へは、島津圖書と大目附の町田民部が、詰め合ふことになつた。西郷と伊知地とは、藩邸に残つて、可成く衝突を避け、他日、交渉を開く可き、餘地をつくつて置く事にした。然るに、十八日の夜になつてから、何處からともなく、一通の投書が舞込んで來た。披いて見れば、

「愈よ、明十九日には、禁闕に押寄せ、會津と一戦に及ぶから、御藩に於ては、宜しく傍觀せられたい」と書いてあつた。

果然、西郷の見込み通り、長州人も、薩藩との衝突を避けよう、とするのであつた。西郷は、宮内彦七を呼んで、

「承知 仕つた」

彦七は、馬に乗つて、邸を出た。嵯峨の方面を指して、遣つて來ると、何うした動機か、馬が暴れ出した。乗り鎮めようとして焦るほど、馬は益々暴れ狂ふて、彦七は振り落されて一時氣を失ふた。

暫時して、人の呼ぶ聲が耳にはいつたので、眼を開いたら、這は如何に、長州兵に、取圍まれて居るのであつた。彦七は、何を訊かれても、更に答へなかつたので、終に斬られて仕舞つた。

その首級は、國司信濃の前に供へられた。仔細を聞いた時に、信濃が思はず嘆息して、

「この首級は斬るのではなかつた、残念なことをした。さア、この上は、明朝の進軍を速めて、今宵のうちにしよう」

嵯峨の兵は、斯ういふ事情から、時刻を繰上げて、進軍する事になつた。

五

獸類の中でも、馬は、利口な奴で、何んなに遠くへ行つても、自分の厩は、必ず知つて居る。騎手の巧拙も、手をかけられた丈けて、直ぐ覺つて仕舞ふ位だ。恩も知れば、仇も知る、馬についての傳説は、昔から澤山に残つて、居る。彦七の乗つた馬が、藩邸へ歸つて來たので、西郷へ、此旨を申出た。一同は不審に思ふたが、獨り西郷は、莞爾笑つた。

「正治とん足下は、之れを何と見るか」

「左様さ、宮内は討られましたか」

「足下も、左様思ふか」

「ハッ」

「宮内が討られた、と爲ると、長州兵の軍議は、慥かに一變するに違ひない。こりや、俺、俺の方でも、策戦を變んきやなるまいかのう」

「そりや、何ういふ理由で御座るか」

「宮内を討つたのは、國司の指揮ではあるまい、が、國司が、之れを聞けば、必ず守勢を變じて、逆に攻勢を取るに極まつて居る。俺、俺の方から、激して來居るものと見て、彼れから逆に寄せて來居るのぢや」

「成程」

「其處で、策戦を變へる必要があるのぢや。天龍寺へ、向ふて居る、圖書とんの兵は、道を變へて、日の御門に向ふのぢや。備後とんの兵は、乾御門を堅めて、俺、俺は之れに加はらう。中村勘兵衛とんの兵は、公卿門へ廻るのぢや。追撃隊長の仁禮源之丞とんは、中立賣御門に詰めて欲しい。之れで薩藩は、九門のうち四門を堅むることになる。務めて戦ひは避くるつもりぢやが、禁闕の御門へ攻かるものは、止むを得ぬから討つ迄のことぢや」

「足下、其手筈をして下さらんか」

「承知いたしました」

「そいぢや。少しもはやくな」

「ハッ」

正治は學者であつて、軍法は、最も得意とする所であつた。それでも、西郷の前では此通りだ。大局を看破くことは、所謂大將の器に非ざれば、とても能はざる所である。

國司信濃は、參謀佐久間佐兵衛を従へて、子の如に、巒巒を發し、實の如には、帷子ヶ辻へ着いた。此處で、兵力

を二つに分ち、一手は、來島又兵衛、兒玉民部を大將として、下立賣、蛤の二門に向つた。國司は、殘る兵を率ゐて中立賣通りを、東に出て、烏丸の南方に、陣を張つた。人數こそ少くないが、軍容堂々として、實に立派なものであつた。

折柄、一隊の鐵砲組が、押寄せて來た。服裝によつて、幕兵なることが判つた。

「それッ、討て」

と、一時に競ひかゝつたが、その勢ひ、破竹の如く、幕兵は、防ぎ兼ねて、忽ちに逃足となつた。長州兵は、勝に乗つて、一人も餘すなど、追討に撃つ。幕兵は、散々に敗られて、元來た路へ、崩れ立つた。

國司は、之れを見て、幸先好しと、鞆壺打つて、大に喜んだ。折柄、遙かに聞ゆる砲聲と、うづ巻き騰る黒煙は、まさに蛤御門の方角である。之れは、來島の一隊が、戦を開いたに違ひない。それ應援せよ、とあつて、今や備へを立直さうとした所へ、意外にも、烏丸の北に當つて、一隊の軍兵、土煙を蹴立て、押寄せ來る。これは、薩藩仁禮源之丞の率ゆる一隊であつた。眞先には、追撃隊一番手蒲生軍と、認めた大旗を翻へし、長州勢へ討つてかゝつた。奮闘激戦の末、長州勢の敗北となつて、二手に分れ、蛤御門指して、落ちてゆく。

六

蛤御門へ向つた、長州勢は、來島又兵衛の率ゆる一隊が、最も疾く乗込んで來た。この時、下立賣と中立賣の間に潜伏せる、會津兵の鐵砲組が、築垣のうちから、不意に撃出した、鐵砲の凄まじさに、流石の長州勢も浮足となつたが、來島は、音に聞えた剛の者だ。

「汚なし者共、返へせ、敵は會津の兵なるぞ、盛返へして一泡ふかせよ」
聲を震らしての指揮に、恥を知るものは、引返へして奮闘する。殊に、會津の兵と聞いては、恨み重なる當の敵、

一人も遁すなと必死になつて討つてかゝつた。來島は、味方の浮足停まると見て、彼の築垣の裡を望んで、二門の大砲から、釣瓶がけに撃込んだ。此に於て、會津の兵も防ぎ兼ね、門を左右に開いて、打つて出た。砲煙の下から、どツと吶喊をつくつて、槍組の勇士數十人、久保田伴次以下、いづれも屈強のものばかりが、來島の先手へ、突いてかかつた。會津の槍組は、天下に響いた丈けあつて、その敏く且剛いことは、眼にも映まらず、恰も電光の閃くにも似て、突き立て、遂ひまくるので、長州勢は、此に再び浮足となつた。

時しもあれ、兒玉民部の一隊は、中立賣御門南方の、築垣を打破り、この處へ殺到し来る。有富新助の一隊も、續いて來た。來島隊危しと見て、左右から會津兵を狭さんで討つた。如何に勇士の手揃ひとはいへ、三面から包まれては、會津兵一たまりもなく、崩れ立つ。勢ひに乗つて、討ちまくれば、會津兵も、今は散々の體にて引退き、蛤御門は、終に長州勢の占領となつた。對手が會津丈に、一同の喜びは、譬ふるに物もなき有様であつた。

この機を外さず、會津中將を討つて取れと呼吸も休めずに、お花畑に向つて進んだが、惜い哉、中將は、禁裡へ參内して、未だ歸邸して居らなかつた。止むを得ず、路を轉じて、公卿門へ迫まつた。御門のうちは畏れ多くも、御所である。

西郷は、乾御門に、詰めて居たが、公卿門が危し、との急報を得て、大砲四門と、島津備後の兵を率ゐて、公卿門へかけつけた。來島は、長州勢唯一の剛の者、西郷との奮戦は、實に面白い。敗けず劣らず、互ひに銃砲の撃合ひであるから、砲聲は轟々として、黒煙は、天を掩ふの光景であつた。その下から、斬つて出るものは、いづれ劣らぬ薩長の勇士である。しばらくは、奮闘に時刻をうつつして居ると、薩藩仁禮源之丞の一隊が、烏丸通りに、國司信濃の兵を破つて、意氣昂然として、乗込んで來た。公卿門外の激戦を見て、驚破一大事なりと、長州勢の背後から、喚き叫んで討つてかゝつた。前後に敵を受けて、長州勢の苦戦は普通りでない。來島が陣頭に馬を進めて、飽迄も奮闘をつづける狀は、悪鬼羅刹の荒れたる如く、之れに駭かされて、一歩も退かじと、死傷甚ひの長州武士、薩兵との間、僅かに二三十間を、隔てゝの闘ひは、目覚しくも又た凄まじいことであつた。

飛び交ふ砲丸は、雨か霰か、呼吸を吐く間もなく、陣頭に在つて、頻りに指揮して居た、西郷の脚部に、飛んだ來た一丸が、ビユツと音を立て、命中した。

西郷は、鞍壺に堪まらず、落馬したのを見るや、薩兵一同、思はず聲を上げた。西郷は、二三度足を履んで居たが、存外の輕傷に、再び馬に跨りて、指揮をつづけた。

西郷の落馬を見て、來島は、大に勇み立ち、獅子奮迅の勢ひで、馬を進める刹那、狙撃の丸が、外れ丸か、ビユ一と音して、飛び來る一丸は、來島の胸腹を貫通した。流石の來島も、馬より落ち、急所の痛手と悟つて、自ら刎ねて死んだのは、近世稀れに見る、勇剛の武士であつた。戰友、波多野金吾は、疾くも駆けつけて、その首級を抱いた儘に退いた。

斯くて、蛤御門は薩藩の手に歸して、公卿門も、辛うじて危きを遁れた。

(波多野は、後の廣澤兵介である)

七

公卿門の一戦は、來島が、必死の奮闘に、目も醒めるばかりであつたが、銃丸は、畏れ多くも、紫震殿の庭上に落ち來る、といふ次第で、臆病な公卿は、一縮みに縮上つて仕舞つた。龍車を、何れへか遷し奉らんとこの議も幾度か唱へられたが、それは、一橋卿と會津侯が遮ぎつて、終に應じなかつたが、漸々公卿の姿が消えて、果は大原重徳卿一人になつたといふことである。併し、銃聲が熄むと、何處から出て來たか、ヒヨコ／＼現はれて來る、といふやうな滑稽もあつた。

伏見に屯集して居た、福原越後の一隊は、天王寺に在る、眞木和泉の隊と、途中に於て、合併す可き約束があつて

十八日の夜はやく、伏見街道を上つて来た。所へ、大垣藩の兵が押寄せたので、忽ち戦鬪を開いたが、大垣の兵は、善く闘ふて、長州兵を打ち破つた。長州兵は、一時伏見へ引上げ、軍容を整へ、傷兵を勞はり扱して、更に十九日の拂曉に、竹田街道へ出た。此處にも、彦根會津の兵が居て、必死に防ぎ戦ふので、非常な激戦にはなつたが、衆寡敵せずの例へ通り、長州兵は、終に敗れて、越後が負傷したので、止むなく伏見へ引返した。

眞木和泉は、斯くとも知らず、十九日の拂曉に、進軍の令を下し、天王寺を發して、柱村まで來ると。遙かに御所の方面に當つて、砲聲が轟き、黒煙りが騰るのを見たから、福原越後の兵を、待合せるの違もなく、千本通り松原から、柳馬場の北へ出て、堺町御門へ押寄せた。鷹司關白の邸には、入江九市、久阪玄瑞、松山深藏等の勇士が、昨夜から詰め合ふて、眞木福原の兵の來るを、待つて居たのだ。

眞木の隊は、關白邸の裏門へ集つて、陣容を整へた所へ、越前と桑名の兵が、遣つて來た。眞木の隊は、忽ち引返へして、之れと開戦に及び、見る／＼うちに、打破つて逐散らしたが、敵は、新しと入替つて攻め寄せる。之れは、洛東の妙頂寺に屯した、彦根勢八百餘人である。眞木の隊は、人數こそ少ないが、殆んど精銳を盡くして、一粒選の兵士ばかりであつた。その上に、久阪、入江を始め、寺島忠三郎、那須俊平、栗屋良之助、櫻井健次、安藤鐵馬、川島武一郎等の勇士が、手揃ひでの奮闘に、流石の彦根勢も、持餘しの態であつた。

蛤御門の一戦に、敗れた會津兵は、薩摩と一橋兵の來援に由つて、漸く蘇生の思ひを爲し、三隊が一つになつて堺町御門へ、と押寄せて來る。彦根勢の苦戦と見るや、長州勢の側面から、遮二無二撃つてかゝつた。哀れや長州勢は、之が爲めに、殆んど包圍のうちに、陥りたると同じく、苦戦の裡にも、寺島入江以下の、勇士は、此所一寸も動かじと、防ぎ闘ふた。一橋卿は、此光景を見て、鷹司邸の焼打を命じた。此に於て、破裂彈は連發された。忽ちにして、火を起し、炎々として燃え上る。續いて撃込む二三發に、火の手は、益々熾んになつた。長州勢も、今は火に包まれての騒ひ、その苦しみは容れりてない。入江九市を始め、各ある人々は、枕を並べて討死した。寺島も、重傷を負ふて退く。

入江は、吉田松陰の門人で、却々評判の人物であつた。野村靖の兄である。寺島は、寺島秋介の兄で、この人の功勞で、秋介は男爵になつた。

鷹司邸の玄關には、久阪玄瑞が、控へて居た。この玄瑞こそ、高杉晋作と共に、松陰門下の雙絶といはれ、非常の人物であつた。負傷した寺島が、全身朱に塗んで、引上て來たのを見て、

『寺島ツ、怪我が』

『やア、久阪、負傷れたよ』

『入江は、何うしたか』

『もう、不可ん、皆な討られた』

寺島も久阪も、愁然として、暫くは言がなかつた。火の手は、愈々さかんになつて、今や鷹司邸の一半は、火に包まれて仕舞つた。敵は、此機を逸すな、といふので、無二無三に、攻め立てた。代る兵のない悲しさには、疲勞を休める暇がなく、長州人が、如何に強いからとて、左様は續くものでない。もはや、全隊討死の外はないのである。

八

高杉に比べると、久阪の方が、はやく死んだので、人の記憶にも薄いが、決して、高杉に劣らぬ人物であつた。松陰が、他に誇るに、多くこの二人を以つてした、といふほどである。

龍田川無理に渡れば、紅葉が散るし
渡らにや聞えぬ、鹿の聲

これが、玄瑞の作つた童謡で、よく當時の志士の境遇を、現はして居る。井鉢の縁を叩いて、無造作に歌ふから、

何のこともないが、よく味はつて歌へば、坐ろに文久の昔が偲ばれる。兵を指揮して、九門に闘ふた勇士に、この雅懐があつたのだから、殊更らに面白いやないか。

傷を包んで居る、寺島を、久阪が、勞はつて居る所へ、眞木和泉が、はいつて来た。

『おう、眞木先生』

久阪は立上りながら、斯う言ふた。

『ヤツ、寺島氏は、負傷か』

『何の……微傷で御座る』

口には手軽く言ふが、寺島の顔色は、眞青であつた。

『久阪氏、残念ながら敗北ぢや』

眞木は力なげに、斯ういふて、その眼は、矢張り寺島に注いで居た。久阪は、しばらく沈思して居たが、思ひついたやうに、

『眞木先生、御相談ぢや』

『何事で御座るか』

『この戦争も、はや之れ限りぢや。残念の儀ながら、會津に名をなさしめました。併し、この儘まに止む可きでないから、是非ともに、再擧して、この遺恨を、晴らし度く存する。就ては、一先づ此場を引上げ下さらぬか』

『そりや、よからうと存するが、貴殿は、何と爲らるゝか』

『拙者は、この場を去らず、討死の覺悟をいたしました』

眞木は驚いて、

『イヤ、それはならぬ。拙者一人運がれて、貴殿に討死さする、といふやうな事は、承知相成らぬ』

『御不承知では困る。先生は、毛利の家臣でなく、一片の義心を以つて、御援助下された迄のこと。假令この場を逃れたとて、卑怯の名は受けるものでない。我等は、兵士と共に、討死す可き管の身の上だ。殊に、我等が生残つては、毛利家へ、後患を引く恐れも御座る。先生は、兎に角、この場を引上げて、我等の爲めに、再擧の策を爲し下さるやう。偏へに願ひ上げます』

鬼をも挫ぐ久阪が、涙を流して、眞木に頼み入るのであつた。寺島も、共に口を添へて、頻りに眞木に立退をせまつた。そのうちに火は、愈よ擴がつて来て、はや玄關へ火の子が、ばら／＼落ちて来るほどだ。門外の闘ひも一しきりはげしくなつて来た様子である。

『宜しい、承知いたしました』

『御承知下されるか』

『如何にも、承知いたしました』

『千萬忝けない』

この時、敵は犇き合ふて、門内へ込入つて来た。眞木は、疾くも門外へ出て、敗兵を整へ引上げにかゝつた。寺島は、ヒヨロ／＼と立上つて、敵の中へ斬つて入り、手當り次第に、斬り捲くつたが、遂に亂軍のうちに、討死を遂げた。

之れと同時に、久阪も、大刀振りかざして、四角八面に斬り立てる、奮闘の状は、流石は、長州の名物男だけあつて、寄りつく敵もないほどだ。ピユーツと音して、飛び来た一丸、久阪は、あつと叫んで倒れたが、忽ち起ると、足元弱くヒヨロ／＼、玄關側の壁へ、ドシンと倚りかゝつた。靜かに懷裡から鏡を出して、自分の顔を寫した。それを見詰めて、莞爾笑つたが、血に染む大刀を取直して、美事に、立腹を切つて仕舞つた。

如何にも、その死際の立派なることは、今に傳へて賞めぬものはない。その戦の二三日前、石清水八幡の祠前に於

て、斯ういふ歌を作つて、他に示したが、知らずく辭世の歌となつた。
今日も又知られぬ露の生命もて
千載を照らす月を見るかな

九

嵯峨の天龍寺は、長州兵の引上げた後ち、幕兵が入込んで、遺留品の處分中、誤つて火を失し、終に山門丈けを殘して、全部を焼いて仕舞つたのは、實に惜いことをした。その飛火が、渡月橋を越えて、嵐山の虚空藏に及び、橋畔の三軒茶屋も、この時に焼けた。

眞木和泉は、有馬水天宮の神官であるが、慷慨義烈の志抑へ難く、夙に四方の志あり、水戸の會澤恒藏の門に入つて、愈々勤王の大志かたく、平野國臣とは、最も深く交はつた。

も、敷の軒のしのふにすかりても
露のこゝろを君に見せはや

ふかせりのおもひ深めて一葉とは

身をつみて知る人もあるらむ

これは和泉の國風であるが、古人も、詩は志也といふた。この二首に由つて、和泉の志は、知る可きである。
久阪と、鷹司關白の玄關で、争つた末、つひに久阪の議を容れて、同志を率ゐる敗兵をまとめて、山崎の天王山へ引上げると、既に益田右衛門介等は、陣拂ひをして、人の影一つ見えなかつた。和泉は、深く嘆息して、「この有様では、再舉拵思ひも寄らぬ。寧ろ潔く死んだ方が、宜い」と、斯う決心をした。

折柄、新撰組を先鋒として、會津の神保内藏之助が、押寄せて來たので、計略に引ツかけて、散々に之れを惱し、終に十七人の同志と、俱に切腹して、天王山の露と消えた。その辭世の歌は、
王山の峰の岩根に埋めけり

わか年月のやまとたましひ

之れにて、九門の戦ひは了つたが、さア之れからは、その跡始末だ。

十七士の介錯をすませてから、自分の首を、自分の刀にかけて、壯烈無比の最期を遂げたのが、戸原卯橋であつた。議論より實を行へなまけ武士

國の大事を餘所に見る馬鹿

と、いふ歌を詠んだ人である。

薩藩は、此一戦に於て、益々重きを爲した。その藩邸は、參謀本部のやうで、戰鬪が了ると、各藩の參謀連が、招かずして集まつて來た。この場合には、西郷は、恰て參謀長、といふ格式であつた。

西郷は、小松と相談して、早速に窮民を救恤ことに着手して、差當り分捕米を、一切施行することにした。その建札は、西郷が自ら文案を起して、能筆の人に、之れを書かせた。

覺

一米

五百俵

右は嵯峨天龍寺へ、長州より置候糧米之所、此度分捕候間、兵火の爲めに類焼致候、極難義の者へ乍些遣し候間、明廿三日五つ時、町々年寄役は、當錦屋敷へ罷越し、銘々引合可請取もの也

錦屋敷とは、薩邸のことを謂ふのだ。錦小路に在つたから、左様いふのである。今度の鬪争が、會津と薩摩の爲めに始まつたとは、一般の人が、皆な知つて居る位だ。然るに、薩藩は、兵火の未

だ全く收まらぬうちに、斯ういふことをしたが、會津藩は、更らに何の救恤もしなかつたので、その評判の悪いことは、非常なものであつた。

長州藩の失策は、云ふ迄もないが、それを以つて、直に毛利侯の大罪であるとは、豈夫に言へまい、といふのが、多くの公卿の意見であつた。所が、分捕品のうちから、國司信濃の軍令狀が出て來たので、之れは始めから、開戦の覺悟で、押寄せて來たのだ、といふ證據になつて、今は、毛利に同情するものも、辯護の辭がなくなつて、愈よ毛利は朝敵である、といふことに、確定して仕舞つた。

従つて、長州派として見られて居る、公卿は、一時に參内を差止められ、大阪も江戸も長州屋敷は、幕府の手に由つて、破壊されて仕舞つたが、續いて長州征伐の議は、漸く本物になりかゝつて來た。

一と頃は、京都の實權を握つて、動もすれば、天下を左右しようとした、毛利も、今や全く斯ういふ始末で、哀れ果敢ないものに、なつて仕舞つたのである。

下立賣御前通西入、竹林寺は、一般に赤門といふて居るが、浄土宗西山禪林寺派の一つで、支那の五台山を、其儘に冒して、五台山と稱して居る。其の境内へ、殉國志士三十餘名の墓がある事は、よく知られて居らぬ。

これは、此戰の時、六角の獄に囚はれて居た志士を、開戦の最中に幕吏が、慘殺して、二條西刑場へ、屍體を遺棄して置いたのを、或篤志の人が、墓に修めて數年、其後、市の芥捨場になつて、いよく志士の事は忘れられ、之を慨いて、明治十三年頃の住職が、その遺骨を移して、寺内へ墓を建てたのである。

改葬された志士のうちには、平野國臣、河村能登守、乾十郎、古高俊太郎等の名もある。爲念記して置く。

最初の長州征伐

一

九門の戰に、多くの勇士を失つたのみならず、之れが爲に、朝敵の汚名をさへ脊負込むに至つたのは、長州藩としては、空前の失敗といふ可きだ。

福原、國司、益田の三國老が、兵を率ゐて上京してから、長門守定廣も、潮會を見て、京都へ向つたのであるが、備後の尾之道まで來て、一泊することになつた時、京都から早馬の使者が來て、九門の敗戦を、報告に及んだ、始終を聞いて、長門守は驚いた。

三田尻の宮市まで引上げて、今後の對策に就て、相談を始めた所へ、山口から急使が來て、英米佛蘭四ヶ國の軍艦が、下之關へ、押寄せて來たから、すぐ引返へしてくれ、との事であつた。

前年の砲撃一條から、事の此に及んだのは、明かに判つて居るが、京都の失敗に、外夷との關係も、追つて來たのでは、藩の興亡にも關する、重大の場合であるから、兎に角、山口へ立歸つて、最後の覺悟も爲ねばなるまい、となつて、長門守は、山口へ引上げて來たのである。

文久三年の五月十一日に、下之關の海峡で、四ヶ國の商船が砲撃された。その談判を、毛利が受付けなから、止むを得ず、兵力に訴へようとするのであつて、必ずしも、戰爭を爲るのが、目的でないといふことも判つて居るので

あつた。

毛利では、朝命を拜して、攘夷の實行をいたしたのであるから、砲撃の責任は負へない、といふのであつた。日本の國內には、どういふ事情があるか知らぬが、砲撃を加へたのは、毛利である以上、その責任は、矢張り毛利にある、といふのが、四ヶ國側の主張であつた。

この交渉は、一年も費かつて、さらに決しないので、四ヶ國側では、兵力に訴へる外はない、となつて、十九隻の聯合艦隊をつくり、下之關へ押寄せて來たのである。

前年、イギリスへ密航した、井上聞多と、伊藤俊輔は、之れが爲に、ロンドンから歸つて來て、頻りに平和論を唱へたが、毛利父子は容易に、それを聞入れなかつた。然るに、京都の敗戦から、幕府は、長州討伐の兵を差向けるであらうから、腹背に敵をうけては、いかに毛利でも、力が及ばぬ、といふことになつて、長門守が、山口へ歸ると同時に、媾和談判に應ずる旨を答へ、その代表者には、高杉晋作が、任をうけたのであつた。高杉は、宍戸刑勇と稱して、敵艦へ乗込んだ。

償金三百萬兩を出せ、といふのだ。それから下之關を買ひ度い。大砲を全部引渡せ。いろ／＼な條件があつた。それを高杉が、美事に説きつけて、償金は、幕府へなすりつける。下之關は、朝廷より預かつた土地であるから、朝廷が可い、といへば、何時でも渡す、といふことにして、大砲は表面引渡したことに爲るが、内實は、其儘ま据を置く、但し撃てないやうに、機械の一部を取外して、事は済むことになつた。其處で、軍艦は、皆な引上げて仕舞つた。

下之關の和睦が成立つたから、之れよりは、幕府へ對する、防戦の準備だ。この時分から、恭順論が、頭を上げて來た。如何なる命令でも、毛利の家名さへ残るなら、寧ろ服従して仕舞へ、といふのであつた。之れに對する、武備恭順論が起つた。幕府の命令にして、當を得たものであるなら可いが、少しでも、君家に疵の負くやうな命令なら、一切拒絶して仕舞へ、兵を向けられたら、國を擧げて戦へ、といふのであつた。兩派の軋轢は、火を燃るやうな有様

で、井上聞多が、山口の城下に斬られたのも、この混雜の際であつた。その時の事情から推せば、毛利家は潰れるやうに、なつて居たのであるが、却つて毛利家は潰れないで、攻め潰しにかゝつた幕府の方が、潰れたなどは、頗る面白くはないか。所謂天下の大勢が、すでに左様なつて居たのを、幕府に、大活眼の人がなかつたので、それを看抜くことが出来なかつたのだ。

二

所で、西郷は、巧く征長軍を操縦つて、暗に長州藩を救ひ、幕府へも、働振りを見せて、薩長聯合の素地を、豫めつくつて置いたのは、流石に、その見込は大いものであつた。

將軍の家茂は、前から健康がすぐれず、體も弱く、内憂外患、交々到来、當時の難局を預る人としては、餘りに不適任であつた。諸侯へ對する威信も、今迄のやうに行はれず、幕府の有難味も、漸く輕くなつて來た時、諸侯のうちには、平氣で參觀交代を、怠るものも多くなつた位であるから、却々家茂の力では、この時局に處することは至難かしかつた。

一橋慶喜が、後見に推されて、副將軍の格で、切廻はして居たので、殊に、京都に於ける、慶喜の働きは、心ある人をして感服せしめたほどで、まことに、評判は良かったが、只だ惜む可きは、長州征伐の一事であつた。この際に於て、長州征伐を企てたのは、餘りに思慮のないことであつた。家茂と、慶喜は、曾て將軍の位地を争ふたが、家茂も、慶喜も、その後には、光風霽月、何の怨恨も、抱いて居なかつたに違ひない。けれども、その争ふた時の感情が諸侯や役人の頭には、未だ残つて居て、何となく面白くない。慶喜が、京都に於て、目覺しいほどの働きを爲るほど江戸の幕閣では、不快の思ひを爲るものが、存外に多くあつたのだ。現に、長州征伐に就いても、その時機であるか否かは、しばらく措いて、慶喜に、此采配を揮はせるのが臍にさはる、といふ連中もあつて、愈々勅命が下つても、

醉だの菊蕪だの吐かして、却々に準備にはかゝらなかつた。これが爲めに、幕府の内情が、一般に知れ渡つて、ますます威信は軽くなるばかりであつた。

征長反對は、幕府の側にも、可なり在つたが、諸侯の間には、頗る不人氣であつた。西郷は、固より征長の事を、喜ばぬ一人ではあつたが、既に勅命となつて、御沙汰の下つた上は、幕府は、速かに、策を講ず可きであるにも不拘區々たる感情や、内部の紛紜に囚はれて、逡巡事を後れさすのは、甚だ以て惜む可き事である。斯くては天下の御爲にもならぬから、先づ第一に、幕府の改革を、先きに爲る必要があると、深く考へて、海江田武次を、越前へ使はし春嶽を説かせた。第一は、將軍の上洛を促がすこと、第二は、幕吏の大更迭を行ふこと、第三は、家格を論ぜず、人物を登用すること、その他、いろ／＼の建策を爲ると同時に、春嶽にも、上洛を促がしたのであつた。

然るに、この事が何時か、幕府へ漏れたので、その驚きは普通ならず、幕府の政治向に對して、諸侯の干渉は、やがて逆心の端緒にもならう、と在つて、一時弛りめた、諸侯の參觀更代を復舊して、その妻子は、江戸屋敷へ呼び上げるやうに、嚴命は下したが、多くは聞流して、其命令に應ずるものは少なかつた。それを又た、幕府は、何うすることも出来ないで、殆んど泣き寝入り同様の姿になつてしまつた。

その一面に於て、奏請して勅許された長州征伐は、如何にしても、これは其儘まにはならぬ。何うか斯うか運びがついて、元治元年九月廿日に、尾張大納言が、入京して來た。朝命に由つて、征長總督といふことになつた。續いて松平春嶽も、遣つて來た。之は副總督を命ぜられた。廿八日に至つて、薩摩、肥前、阿波、安藝、姫路、宇和島、久留米、松山、備前等を始め、廿四藩へ對して、從軍の御沙汰が下つて、それ／＼國元にて、準備を整へ置く可きやう、申渡しがあつた。

所が、何うも薩藩の去就が判らないので、それとなく搜りを入れて見ると、さらに出征の準備も、して居ないやうだ。會々人があつて、そのことを尋ねると、冷然、一笑に附し去つて、對手にも爲ぬ態度であるから、其處で、薩藩

を確める必要が起つた。在京阪の諸侯を、大阪城内に集めて、その席上で、之れを確めることになり、十月廿六日を以つて、その當日と定めた。島津は國語であるから、西郷が、名代として出頭することになつた。陪臣が天下の大事に容喙する、これが抑も始祖であつた。

二二

總督の尾張大納言でさへ、長州征伐には、餘り賛成して居ないので、諸侯のうちにも不服はある。只だ幕府を憚らつて、公然之れを言はない迄のことであつた。折角に開いた、大阪城内の會議も、その甲斐なく、薩藩の西郷が、毛利に對する處置を、務めて寛大なることを望んだ丈けのことで、他に別段の意見を吐いたものはなかつた。尾張大納言は、豫て西郷を信じて居たから、更に別室に於て、西郷と、膝を接して、相談に及んだ。

「最前より、縷々の意見に由つて、長州へ對する、處分の寛大といふことは、能く相解つたが、征長の御沙汰胸れありし、今日に至つては、それも叶ふまい。なれども、其方の考へは何とあるか」

「征長の御沙汰は、御沙汰丈けの儀に、仕り度、戰爭は、避け得られる丈け、避けるを可し、と存じまする」

「戦はずして、征長御沙汰の御趣意は、遂げらるゝと申すのか」

「國境に、兵は進めましても、長州藩が、御趣意に従ひましたならば、戦ふには及びますまい」

「そりや、左様ぢや。併し、左様な都合に參らうか」

「此に一策が御座ります。閣老様のうち御一名、毛利侯の説得役として御下向遊ばせば、拙者、その内部に立入つて、御趣意に基きまするやう、盡力いたし度く考へまする」

「其方が、長州藩へ罷り越す、と申すのか」

「ハッ」

「如何なる方法を以つて、毛利へ面會いたすか」
 「岩國の吉川侯は、拙者、兼て御懇意願ひ居りますれば、先づ岩國へ、参りまする考へて御座りまする」
 「然らば、何分頼み入る。天下の御爲ちやてな」
 西郷は、尾張侯の御前を下つた。邸へ歸ると、直ぐに出立の支度をした。吉井幸助、税所長藏の二人が、従いて行くことになつた。

幕府の方では、征長軍の準備に忙しい。所へ、尾張侯からの忠告があつた。「長州藩の爲めに、天下の大兵を起すことは、餘り喜ばしきことにあらず、兎に角、幕府より相當の人物を使者として、罪状を數へ、罰を定め、一應は掛合を開いて、その返答を求めたら可からう。若し之れに服従したらば、戦ふにも及ぶまい。肯かざる時は、速に討つて然る可きである」といふ次第を申入れた。幕府でも、段々相談の上、閼老の一人たる、小笠原壹岐守を便はすことになつた。

上意を蒙りて、小笠原閼老は、晝夜兼行、藝州廣島まで乗込んだ。それから藝藩のものを使者として、毛利父子に出頭を促したので、毛利家は、大混雑を極めた。結局は斯うなるものとして、覺悟の上ではあつたが、藩論が、二つに分れて居た丈に、混雑は一段とげしかつた。如何に幕府の命令でも、毛利が、自らの出頭は危険であるから、誰れか名代を出して、その御沙汰なるものを、聞いて見ようとなつた。穴戸備前が、その役に當つた。

穴戸備前は、俗に大家老と稱して、毛利の家來でありながら、昔は、吉川小早川と並稱されたほどの、名家であるから、此大役に當られたのである。

廣島には、小笠原が待つて居る。穴戸が、毛利の名代で來た、といふことを聞いて、早速面會することになつて、穴戸へ、其旨を案内に及んだ。穴戸は、君家の一大事、如何なる御沙汰が下るか、此處一世の浮沈と、腹帯しつかと締めて出頭した。小笠原も、此穴戸さへ仰へつけければ、大抵な事は定まる、と見て、之れも必死の覺悟で談判にかゝつた。

四

小笠原閼老が、廣島迄出かけて、毛利の罪を糾すには、相當の條件を以てする必要がある。そこで、豫め其罪案をつくつて行つたことは、改めていふ迄もないが、毛利家へ對する、罪案は二件あつた。その一は、文久三年五月十一日に、下之關で、外國の商船を砲撃した爲に、英米佛蘭四ヶ國の軍艦が、攻寄せて來るやうな、大騒動を惹起したのであつて、之れは既に安政の條約で、我國への渡來は許してある。それを謂れなく、砲撃して、國亂を醸したのであるから、この一事は、公儀を憚らぬ、不埒千萬の所爲である、といふのが第一の罪案であつた。第二の罪案は、京都九門の戦ひである。表面は、赦罪嘆願の名を以て、妄に兵を率ゐて、禁闕を侵し、御所内へ發砲せし段、朝敵に比しきの所爲である、といふのであつた。以上の二件は、城地没收の上、死罪にも當る可きの筈であるが、元就以來皇室へ、忠節を盡せし家柄でもあり、幕府に於ても、武門の名家として、多少の斟酌を加へ、大膳大夫父子は蟄居、家督は、孫の興丸に譲る可き事、且所領の内、十萬石を減ずる、といふのであつた。

小笠原閼老から、此申渡しを受けると、穴戸備前は、豫めの覺悟があつたので、左程には驚かなかつたが、一應は、辯解をする責任があるので、膝を進めて、大に論じはじめた。

「御沙汰の件は、主人大膳大夫へ申聞けまするが、就ては、自分の愚存を以つて、念の爲め、伺ひ置き度き、一儀が御座ります。之れにて申述べて、宜しう御座るか」

「何事なるか、これにて承まはらう」

「第一の下之關に於きまして、夷人と開戦の一條、この儀につきましては、先きに朝廷より、勅命の次第も御座りまして、五月十二日を攘夷の期限と御定め有之、その前日、即ち十一日には、前田濱の沖合を、夷國船が、通行致しまするに依つて、勅命を奉じ、直ぐに砲撃致しましたる儀、些か朝廷へ、御奉公の赤誠を盡しましたるに不拘、

しき御叱りをうけまする段、まことに遺憾千萬に存じます。これが爲めに、今般の戦争とも相成り、是れ又た、朝廷の御趣旨に従ひ、應戦致したる迄の次第にして、決して公儀様を、蔑視致したる覺えは、更に無之、然るにこれが爲め、御咎めを蒙りますること、如何にも不審至極、就きましては、爾來朝廷御沙汰の儀、一々御断り申上ぐるも、差支へ無之ものによ、何分の御指圖願ひ上げます。

また、第二の御咎たる、九門の戦ひは、全く以ちまして、主人大膳大夫は、毫も與からざる儀にして、家臣のもの共、一途に、主人を思ふの餘り、斯る輕擧に出でましたる次第にて、殊に、御所内へ、砲發に及びましたる段は、幾重にも恐れ入つたる擧動なれど、彼等の胸中を付度りますれば、決して朝廷へ對し奉り、何等不敬の存念なく、知らず、右様の場合に、立ち至りましたる儀は、戦場の模様依りまして、偏に御賢察のほど願ひ上げます。

殊に、朝敵の所爲とは、餘りに御情けなき御沙汰と存じ、恐縮に堪へませぬ。抑も、元就以來、朝廷へ對しましては些さか忠勤を勵み、御感に預りましたることは、一再に止まらず、菊桐の御紋章まで、拜領致せし一事に徴し、まして、毛利家の赤心は、朝廷に於かせられても知らし召さるゝ筈、公儀様も、此儀は點頭かせらるゝ儀と存じます。

右様の次第に御座りますれば、御咎の御旨意、些か了解致し兼ねまするに依つて、再應御伺ひ致し度く存じ、不敬をも憚からず、愚存のほど申述べたる次第に御座りまするに依つて、再應御伺ひ致し度く存じ、不敬も主家の一大事と思つたので、大雄辯を揮つて、小笠原に、一本突ツ込んで、さア何うだ、と、大見得を切つたところ、流石に大家老丈けの見識はあつた。

五

當時の關老では、先づ壹岐守が、第一の人物であつたらしい。この人の口説を、一度讀んだことがある。立派な職

見を、有つて居て、頗る達意の文章であつた。

肥前唐津藩の嫡子に生れて、長い間の部屋住であつたが、三十歳を越えてから、漸く當主になつた人である。始め圖書頭と稱し、それから壹岐守となつた。學問もあつたが、人物も正確であつた。將軍の家茂が、毛利の策謀に引つかつて、京都から出ることが、出来なかつた時に、四百人餘の幕臣を連れて、江戸から伏見へ乗込み、將軍御迎と稱して、ひと騒ぎを起し、終に朝儀を覆へした上、家茂をして、大阪城まで引上げしめたので、圖書頭の評判は、漸く高くなつて来て、それから間もなく、關老に、昇進したのである。

宍戸備前のいふところにも、相當の道理はある。併し、壹岐守は、それを聞きに來たのでなく、只だ幕命を傳へる爲の使節であつたから、備前の陳述は、聞取り置く、といふに過ぎなかつた。

備前も、一と通りの辯解はしたが、飽迄も、之れを拒むとは、いひ得なかつたのである。要するに、藩侯の意見を聞いてからでなければ、最後の確答は出来ないであつた。

毛利の内情は、どうであつたか、といふに、打ち續く戦役と、京都に於ける、數年來の運動で、少なからぬ費用も要かつて居る爲に、藩の庫は空になつて、藩士も皆な疲れて居る。町人百姓は、いづれも困憊疲弊の極に陥つて、見るも無慘な状態であつた。備前が、歸つて來て、幕命を披露に及ぶと、先づ第一に、重役が、腰を抜いて仕舞つた。重役の鼻息を窺ふ藩士は、頻りに恭順論を唱へるので、毛利侯の苦心は非常なものであつた。

藩論が、恭順といふことに決すれば、藩主は、先づ寺院へでも引籠つて、謹慎を表することになり、毛利家の前途は、どういふ事になるか、それは實に憂はしき極みである。然るに、重役の多數は、假し藩侯父子が、幽閉の身となつても、毛利の家名さへ繼がれば、この際、何事も言はず、幕命に服従しよう、といふのであつたが、之れに阿附雷同する藩士は、却々に多かつたのである。

恭順論は、日を逐ふて、その勢ひを増して來るが、また其一面には、武備恭順論なるものが、藩士の一部に唱へら

れた。廣澤兵介、高杉晋作、大和邦之助、渡邊庫太、井上聞多の一派が、即ちそれである。滅封の處置には、斷じて從へぬ。殊に、君公の蟄居などは、奇怪千萬の沙汰である。苟も、我等は、祖先以來、君恩に浴するものであるから、斯る不法の幕命には、屈服し難きのみならず、單に、毛利の家名ばかり存して、その實權の無い、といふが如き、不面目は忍び得ぬのであるから、たとへ幕府と、一戦に及ぶ迄も、このたびの幕命は、斷乎として拒絶す可きである、といつて、壯んな氣焔を吐くものも、可成り居たのである。

毛利父子は、恭順論を喜ばず、武備恭順論の方に、傾いて居たが、何分にも、毛利家の興亡に關する、重大の問題であるから、たとへ藩主であつても、之ればかりは一存で、決する事が出来なかつた。

元治元年九月廿五日、山口城内の御前會議といふ段取になつて、この日は、武備恭順派は、必死の覺悟で登城した。井上聞多が、一生の智辯を揮つて、終に恭順派を説き伏せ、幕命を拒む、といふことになつた。その晩、袖付橋の側で、聞多は、暗討に逢ふて、九死の重傷を負ひ、武備恭順派は、一大脅威をうけた。

聞多を斬つたのは、木村新、周布藤吾、中井榮之丞、兒玉七郎の四人で、いづれも恭順派のものであつた。

この兇變があつて、また藩論は一變した。廣澤以下の武備恭順派は、大概半へぶち込まれた。高杉は、身の危きを悟つて、疾くも筑前へ遁れた。斯くして藩論は、恭順派の意の如くなつた。毛利父子は、重役に壓へつけられて、寺院へ押籠られてしまつた。

周防國岩國は、吉川監物の城下である。當時の吉川は、極めて事に通じた人で、よく他の説を容れる雅量にも富んで居たし、毛利一門の中では、最も幅の利く家柄であつた。本藩の内訌を見て、苦々しいことには思つたが、狹りに容喙しをす可き事でないから、其成行を、ぢつと見て居たのである。然るに、一日の事であつた。一通の封書が届いたので、披いて見ると、薩藩の西郷吉之助が、寄せた密書で、「毛利家存続の大事について御意得たい」といふのであつた。

常に深く、西郷を信じて居られたばかりでなく、書中の意味が、重大な事である以上、進んで面會する必要もあつて、すぐに、西郷を、迎へる事になつた。

六

慶長五年、毛利が、關ヶ原の役に破れて、徳川から、滅封の處分を受け、僅かに長防二州の領主となり、萩城へ引退した時、吉川廣家に、周防の岩國六萬石領を、割いて與へた。城を築くことも、特に幕府が、之れを許したので、岩國の街を離れて、錦川が、帯の如く繞つて居る、横山村に、城を構へた。錦帶橋の名と俱に、岩國藩には、代々英主が生れる、といふほどに、評判は却々に高く、當代の監物も、評判の人物であつた。併し、武鑑の上からすれば、諸侯の列になく、幕府に於て、諸侯の一人として、取扱つて居た丈の事である。

城内では、今も珍客の待遇に忙しく、數寄を凝らした客室には、黒縮緬の紋付に、仙臺平の袴を着けて、派手な服装の人物が、待遇を受けて居るのであつた。謂ふ迄もないが、正面の上座には、藩主の吉川が控へて、談話は、大半濟んだらしい。その珍客は、改めていふ迄もなく、西郷であつた。

「罪は、固より三家老にはないが、併し、之れも事の成行と申すもので、何とも致方がない。情に於ては、忍び得ぬことぢやが、足下の言はしやる通り、腹も切らさう、本人共も、忠義一途のものぢやから、必ず拒まぬのは知れて居る、その代りには、足下と、尾張殿の肝煎で、毛利家に疵のつかぬやう、この一事だけは、是非に御頼み致す。」

「それに御承知下さる以上、身に代へて、御本家の御安泰は、御引うけ申す。尾張様の御思召も、其れに御座るのぢや。主家の御爲を思ふ忠義が、誤つて主家を危ふし、それが又た忠義の切腹に依つて、主家を救ふことに相成るとは、彼の人々も、喜んで御沙汰に従ふことで、御座らう。」

「他藩の足下が、赤心を以ての御盡力は、いづれ藩中にも、知れ渡るであらうから、その時こそは、貴藩との折合も良くなり申さう」

「己共の苦心は、只だ其れ一つで御座る。機會も来らば、何分の御配慮、いく重にも願ひ上げまする」

「その儀は、確かに承知致した」

相談は、之れで終つた。

西郷は、其日のうちに、岩國を出立して、廣島へ歸つた。尾張大納言へ、復命の爲めである。

幕府が、毛利へ對する、今度の御沙汰は、武士が刀を抜いたのと同じで、血を見ずには、治まる筈がなかつた。西郷の意見では、三家老の切腹を條件に、毛利家を救ふの考であつた。幸ひに之れが、尾張侯に容れられたので、吉川を説きつけたのであつた。

元來、九門の戦ひは、三家老の責任には違ひないが、毛利父子も、全然之れを知らぬ譯はなく、入洛の上の衝突は止むを得ずと見て居たのであるが、事破れて、此に至る以上、毛利父子は知らぬことにして、軽くすます外はなかつたのだ。

何しろ、日本の國體から推して、朝敵の名は、實に困る。下手に出ると、家が潰れた上に、子孫の末に迄、浮ぶ瀬のないことが起る。下之幽砲撃の一條も、理を以つて争へば、毛利に罪はないのだが、今それを主張した所で、決して通るものではなく、それよりか、之れを三家老が背負てゆく、ことに爲るのが、最上の分別であつた。一罪でも二罪でも、切腹に、二た通りはないのだから、左様して此場は、一時濟ませて置いて、更に又た、出直しと爲るより外に毛利としては、取る可き道はなかつたので、吉川も、西郷の説を容れて、早速に承知したのであつた。

三家老とは、益田右衛門介、福原越後、國司信濃のことであるが、三人は、京都の失敗に、責を負ふて、歸つた後、ちも、自邸に引籠つて、偏へに謹慎を表して居た。殊に、幕軍が、國境に臨む、と聞かしては、主家へ對して、何とも

申分けの辭がない、とあつて、この世に居るの覺悟はなかつたのだ。佛し、君命を待つての後ちでなければ、勝手に死ぬことも出来ない、といふ哀れな境遇に、その日を送つて居たのである。

(今の福原俊丸は、越後の孫である)

七

武備恭順派は、井上聞多が斬られて、高杉晋作が、行衛を晦まし、廣澤兵介の一派は、それ／＼處分されたので、少時は、閉息の形になつた。山口の城下は、形勢一變して、恭順派の勢力は、俄に熾んになつて來た。

福原、國司、益田の三家老へは、見張の兵士をつけて、内外の交通を、絶つて仕舞つた。この事件の、參謀とも謂ふ可き、中村九郎、宍戸左馬之助、佐久間佐兵衛、竹内庄兵衛、麻田公輔等の人も、三家老と同様の取扱を受け、進退の自由を奪はれた。藩士の服装も、全く改まつて、麻の袴衣に、白足袋と限られた。その頃に流行つた、割羽織、筒袖、括り袴、紺足袋等は、嚴禁されて仕舞つた。

萬事一切、幕府へ、恭順を表する爲め、とあつて、極端に卑屈な態度を取つた。幕軍が、國境へ臨む、と聞いて、毛利父子は、萩城から移されて、功山寺へ送込まれた。山口と萩の城下は、恰で火を焚くものもない、といふの状態であつた。

吉川が、萩城へ參られ、老臣を集めて、協議を重ねた末、毛利にも面會して、三家老切腹の議が纏まつた。吉川は一夜、ひそかに三家老を招いた。御馳走の後、席が改まつてから、

「各自も、知る通りの大事に相成つた。この上の分別は、只だ毛利家を、活すの一事のみぢや。各自の意見は、何とあるか」

流石に、吉川も、お前等は切腹して、主家を救へ、と露骨にも言ひ出せず、それとなく搜りを入れた。三人は、既

に覺悟の臍の緒が、決まつて居たから、更に驚かなかつた。

『私共の不束より、斯かる大事を、引出しましたる段、今更ら申分ても御座らぬ。この腹一つ切つて、相済む儀なれば、心勞も仕りませぬが、公儀の御沙汰、存外に重き由も承まはり居れば、惜からぬ生命永らへて、只だ君命を待ち居るのみに御座りまする』

『何と申す、腹切つて済むならば、と申すのか』

『ハツ』

『ふーむ』

斯うなつては、互ひに太い呼吸を吐くばかりで、しばらくは詞もなかつた。

吉川が、ちツと膝を進めた。沈痛な音調は、腸から絞り出されるやうであつた。

『折入つての頼みがある。聞いては呉れまいか』

『ハツ、恐れ入ります。何事なりと、御遠慮無う』

『罪なきものに強ふるは、心なきことぢやが、腹切つて呉れまいか』

三人は、ひとしく顔見合せて、笑を漏した。壯齡の國司信濃は、しづかに手をついて、

『私共、三人の腹切つて、それが君家の御爲めと、御座りまするか』

『如何にも、毛利家を救ふ道は、他にないのぢや』

『君家の御爲と御座れば、この腹一つ二つ切りますること、何の造作も御座りませぬ』

福原と益田も、その尾について、

『信濃申します所、至極と考へます。私共、に於きましても、異存御座りませぬ』

吉川は、涙を流して、三人を見詰めた。三人も、吉川の顔を見上げた。

『有つ可きものは、忠義の家臣ぢや。毛利家の武運は、未だ盡きぬ。下足等、三人の覺悟一つにて、毛利の家には、何の疵もつかぬ』

『そりや、眞事に御座りまするか』

『尾張殿御意見は、それぢや、と聞及んだ』

三人も、嬉し涙に咽んで、

『この上は、只だ御沙汰の日を、憤んで相待ちまする』

昔の武士は、實に潔いものであつた。三家老の覺悟は、主人を有つ家臣が龜鑑として傳ふ可き事だ。

事件の根本は、之れて解決される譯であるから、重役連の相談も、それに促がされて、ドシ／＼進出した。三家老の外に、參謀と目指れたものも、同時に斬罪、といふことになつたが、斬罪とは酷い事であつた。この處分は、平生

からの感情も、加はつて居たのだらう。

八

西郷は、廣島へ歸つて、尾張大納言に、吉川と、對談の始末を、くはしく物語つて、毛利家よりの使者が來る迄は開戦延期の希望を述べた。尾張侯は快諾したので、西郷は、直に小倉へ行く事になつた。副總督の松平春嶽は、既に豊前の小倉へ、渡つて居たのだ。西郷から、尾張侯の旨を傳へて、且は自分の意見を述べた。春嶽にも異論はなかつたので、一切の話は、都合よく運んだ。

此時に、西郷が筑前の博多へ來て、月形洗藏、鷹取養巴、早川勇等の周旋で、平尾山の野村望東尼方に、潜伏して居た、高杉晋作に面會した、といふ説がある。末松博士は、之れを非認して居るが、それは、西郷の書面に、依つて見ると、時日の違ひがある、といふのだ。然るに、面會説の方には、當時の實況を見聞して居た、所謂生證據人なる

ものがある、といふので、事は甚だ面倒になつて、一時は、史談界を騒がしたが、結局は、文献を楯とした、末松説が、有利のやうに思へた。

藩論は一決して、幕府へ降伏と、事は定まつた。三家老は、覺悟の上とて、潔く主家の爲めに、責任を負ふて切腹した。福原は五十歳、益田は三十三歳、國司は二十四歳であつた。參謀連は、何れも斬罪だ、といふが、實際は切腹であつた。何れも立派な人物ばかりではあるが、殊更に、麻田公輔は、前名を、周布政之輔と謂つて、譜代の家臣ではなかつたが、非常な策士であつた。學問もあれば、膽力もあり、智慧も湧くやうに、有つて居た。立派な人物であつた。

高杉や久阪が、土州藩の武市半平太と謀つて、相州金澤に居る、外國人を殺さうと、したことがあつた。その時に、山内容堂が、之れを漏れ聞いて、毛利定廣へ、注意を與へたので、定廣は、夜を侵して、此連中を逐ひかけ、蒲田の梅屋敷へ、一同を引入れて、説諭を加へた上、江戸へ引ッ返へした、といふ事件があつた。此時に、周布が、之れを怒つて、容堂を罵つたので、山内の家臣が憤慨して、山地忠七、小笠原龜吉等の勇士が、毛利定廣邸へ捻込んで、周布の引渡を迫つた。

周布を受取つて、斬り捨てると、いふのだから、之れは定廣も、頗る弱つたが、周布の悪い、といふことは、よく認めて居たので、周布に切腹をさせようとした。

これを、容堂が開込み、乾退助を、ひそかに送つて、周布の命乞をしたので、周布は、表面丈切腹したことにして、實際は、麻田公輔となつて、生きて居たのである。

時に元治元年十一月十八日、國老の粟屋隼人は、一同の首級を持つて、廣島へ着いた。尾張大納言に拜謁して、降伏の次第を申入れ、事件の根本人は、此の通り首級に致しましたから、御勘辨を願ひ度い、とのことであつたから、尾張侯は、最初からの溫和論であり、殊に西郷との約束もあつて、その降伏を容れ、首級は、獄門にかけた事にして、

吉川へ、預けることにした。然るに、議論がやかましくなつて、山口の新城破壊と、五卿の動座が、條件として追加されたので、粟屋は、その旨を傳ふ可く、山口に引返した。

(一説には、福原の死は、全く何等の豫告もなく、詰腹の形であつた、とも傳へられてある)

(定廣は、世子長門守の事である。山地忠七は、後の陸軍大將元治の事であり、乾は、板垣の事である)

九

山口の城は、大内氏が、居城として築き、二十六代の義隆に至つて、大内氏の全盛は、殆んど頂點に達した。當時の山口は、その名、海外に迄も響き、繁榮の光景は、京都を、凌ぐの勢であつたが、天文二十年に至つて、陶晴賢の爲めに、大内氏は滅ぼされた。その後、幾度かの興廢を繰返へして、僅かに城下の形容丈け、残つて居たのを、慶長五年に至り、毛利氏が、長防二國へ逐籠められて、山口城を修理して、之れに居るつもりであつたのを、幕府に拒まれて、止むを得ず、萩に築いたのであつた。されば、毛利が、山口に居ることを、幕府は喜ばないのであつた。

山口は、周防の吉敷郡に在り、萩は、長門の偏隅に在る。居城としては、山口の方が、地理を得て居たのである。山口の北、七里離れた所、阿武川の流が三面を圍み、北は、海に臨んで、長防二國の領主が、居る所としては、餘りに僻在して居るので、山口の方が、遙かに優つて居た。けれども、山口へ築くことは、幕府が許さないから、詮方なしの萩に住み、といふ次第であつた。所が、文久年間になつて、幕府の權威が、漸く衰へ、諸侯の心も、追々に離れてゆく。毛利は、勤王論の看板に、朝廷の御最負も厚い。その機會を利用して、山口へ、築城の計畫を立てた。勿論表面から築城、といふては、駄目であるから、萩の地は、國の隅に片寄り過ぎて、領民を治めるに便利でない。せめて政治丈けても、山口へ出張つて、執抜ひ度い、といふ意味を申立て、やうやく幕府の許しを受けて、築城の計畫は成つたのだが、山口に城のあることは、公然の沙汰とはいへなかつた。其處で、今度の事變に就て、山口新城破壊の

一ヶ條が、御沙汰として加へられたのであつた。
 五卿の動座とは、例の三條實美、東久世通禧、壬生基修、西三條季知、四條隆調の五卿を、毛利が、保護して居ることはならぬ、といふ意味であつた。文久三年の八月、京都の政變に依つて、長州へ、落ち延びた七卿の内、錦小路頼徳は病死して、澤主水正は、生野銀山の義舉に與したので、残つたものは五卿であつた。幕府の考へからすると、五卿を、長州へ置くのは、頗る危険である。何時か、毛利が、五卿を看板にして、勤王論を、擔ぎ廻るか知れないから、五卿を、引放して仕舞ふのが、良策である、といふ考へで、五卿の動座を、追加條件としたのである、といふ一事を加へたのである。

粟屋の復命に依つて、老臣、重役の評議が始まつた。山口城の破壊は、どうにでもなるとして、五卿動座の一事には、頗る苦んだのである。今更らに、五卿を放逐することは、情に於て忍びないのみならず、若し動座を迫まることゝが、一般に知れ渡ると、毛利の信用は、全く地を拂つて、再び起つことの出来ぬやうになる、とも思ふが、既に窮味を示してしまつたので、之を拒む力は無かつた。評議の末は、矢張り屈從する、といふ事に決した。

今までは、虫を殺して、從順にして居たが、此に至つて、氣魄有る藩士は、激昂して來た。殊に、奇兵隊に屬する壯士連は、癩癩玉を、一時に爆發させた。假令藩命といへど、五卿の動座には、不同意である。武士の意地といふものは、そんな無情のものではない。藩に於て、五卿を護れずば、我々が護つて見せる、とあつて、五卿を誘ひ出して、終に長府へ走つた。長府は、御一門の毛利右京亮の領地である。山縣狂介は、奇兵隊の監督として、武勇の譽れある人であつた。この狂介が、眞先がけての騒ぎであるから、長府の城下は、俄かに混雑を極めて來た。五卿は、嬉し涙に暮れて、偏に奇兵隊の義氣に感じた。領主の右京亮は、却て狂介に脅迫されて、手も足も出なかつた。奇兵隊は、意氣昂然として、眼中既に幕府もなければ、藩主もなきの概があつた。當年の狂介、それが、後の有朋である。九尺柄銀杏樹の槍を横へて、勇姿颯爽たる、狂介の風貌が、眼の前に見

るやうだ。
 所へ、變を聞いて、筑前の月形洗藏が、乗り込んで來た。つゞいて西郷も遣つて來た。西郷と山縣の會見が之れからだ。

10

五卿が、勅勅を蒙り、京都を逐はれた因は、毛利の手先となつて、朝廷内に策動した、といふのであつた。されば、今日の如く、日蔭の身の上になつたのも、元を洗へば、毛利の爲であるから、毛利としては、飽迄も、五卿を保護する義務はあるのだ。

『假令へ幕府の沙汰にもせよ、斯うした因縁から、一度救ふて來た、五卿を、今更らに逐出す、といふことなれば、それは、武士の情けを知らぬ、下司の所爲である。この上は、我れ等の力を以つて保護うてやれ。殊に、五卿の罪を得たのは、謂はゞ我藩の爲である。毛利家が、朝廷に罪を得、幕府に憎まれた、その響きが、五卿の身に延いたのである。幕府が恐ろしいからとて、何の理由もなく、哀はれ世に頼る所なき、五卿を放逐する、といふが如き、無情のことは出来ぬ。毛利家の恥辱、君公の御名の汚れである。我れ等は、死を以つても、之れを守護する』
 といふのが、奇兵隊の主張であつた。狂介等は、五卿を奉じて、長府の城内に這入つた。このことを聞傳へて、四方から走せつける、慷慨の烈士も、日を追ふて多くなつた。

この際に、斯ういふ風説が傳へられた。『五卿の動座が決せざれば、征長軍の引上げは出来ぬことになり、開戦となる外はない。左様なつては、一大事である。五卿に對しては、之れ迄盡くした厚意で、毛利家の精神は、明かになつて居る。毛利の家國を、潰しても保護せねばならぬ、といふ理由はない。然るに、奇兵隊の連中が、妙にひねくれて長府に集まり、徒らに君家へ患ひを及ぼすやうなことを爲る以上は、最早打ち捨てゝは置けないから、君公父子に、

長府へ、出張を願ひ、彼等を諭すの外はなからう、と、評議が一決して、毛利公が乗出される事になつた』といふことが、長府へ聞えて来た。

事の眞偽は、未だ確かに判らないのであるが、君公の御乗出し、と聞いて、徐々尻込みを爲るものが、出来て来た。狂介は、非常に憤慨して、元就公の木像が、城内に在るのを知つて居るから、新たに白木の輿をつくつて、之れへ木像を移し奉り、君公御乗出しの砌は、眞ッ先へ、此輿を擔ぎ出して、

『さア、御先祖へ對して、何と申譯けをなさるか』

と、突き詰めたなら、如何に君公でも致方はなからう。左様して五卿を、救ふて遣る、といふのであつた。

所へ、乗込んで来たのが、博多の月形洗藏であつた。狂介は、曾て九州に遊んで、月形とは、一面の識があつた。今度の事變に就ても、種々と忠告を、して呉れたのみならず、五卿の動座も、止むを得ぬ事態として、應じたら可からう。五卿の行先は、拙者が引受ける、と迄、言つて呉れたが、狂介は、頑として應じなかつたのである。

下之關には、西郷が来て居た。三家老の切腹を條件に、春嶽を説きつけに、小倉に渡つて居たが、五卿の動座で、内訌が来るらしい、と聞いて、月形に、奇兵隊の説得を頼み、月形が、國を出ると、すぐに後から、下之關へ遣つて来て、月形の報告を待つて居たのである。當時下之關には、藤四郎、今中作兵衛、多田莊藏、中村圓太、中岡慎太郎、水野溪雲齋等いふ、人物も来て居て、薩摩の西郷が見えた、といふので、晝夜ともに、稻荷町の大阪屋へ登樓つて遊興の日を送つて居た。それは表面で、裏面は、國事に關する相談ばかりであつた。

待つて居た、月形が歸つて来た。すぐに西郷を、大阪屋へ、訪ねて来た。

『やア、西郷先生』

『何うぢやツた。治まり居つたのかのう』

『拙者の力には及ばぬ。先生が、自身に行かねば駄目ぢや。今の所では、鎮靜の見込みは御座らぬ』

西郷は、腕を拱んで、月形の詳しい、物語を聞いて居た。

『斯ういふ次第ぢやから、先生が行かしやれ』

『それぢや、行くかのう』

と、いつたが、西郷は、再び沈思へた。

一一

明日は早曉、長府へ向かう、といふので、今夜の酒宴は、一際派手に、座中の志士は、いづれも隠し藝の有り丈けを盡して居た。

『先生、別室へ……』

隣りに坐つて居た、月形が私語いた。先づ月形が立つて、西郷が、之れにつゞいて、廊下へ出ると、

『最早、珍客の見える時刻で御座る』

『珍客とは、誰か』

『高杉晋作で御座る』

『エツ、高杉が、來居るのか』

『實は最前、拙者が、案内して御座る』

『長府の一條に就いても、高杉には、逢ふた方が宜からうか、と考へて、それとなく呼んだのぢや』

西郷は、月形の肩を打つて、

『そりや、可か所へ氣がついたのう』

折柄、仲居がかけて来て、月形の前へ手をついた。
「お客はんが、彼處へ來やはりました」
「うむ、可し。今ま行く」
仲居の行く後から、西郷と月形が続いてゆく。高杉の居る、といふのは、離れの茶室であつた。月形の注意で、燈火は消してある。

吉田松陰門下の俊才、一代の奇傑として、今の世にまで語はれて居る、歳は、未だ二十七歳だが、奇兵隊の創立は久阪玄瑞と、此高杉の力であつた。夙に同志の間に、頭角を現はして、山縣、伊藤、井上等も、其配下にひとしかつた。豪華風流の才物で頗る強氣の人であつたが、同時に又、軟な所もあつて、機智縦横、出沒自在の奇傑であつた。惜い哉、慶應三年の四月中旬、下之關で死んだ。もう二三年の天壽があつたら、明治の舞臺にも、面白い芝居を見せられたらうに、残念なことをした。頗る逸話に富んだ人だが、そのうちで、最も興味深い逸話がある。

「隊長はん、宜うおいてまして……」
「やア主人か」
「毎度御鼻負て、有難う存じます」
「まア一杯やれ」

主人は盃を受けて、高杉へ献した。
「隊長はんにお願ひがおましてな」
「何ぢや」

「此頃まで油つて居や、はりました、京都の畫師が、狀帶懸らして畫きなはつた畫が、おましてな、それを觀者の先生が見なはつて、立派な畫ぢやが、これには贅が欲しい。豪い方に書いて貰やはつたら何うかい、と斯う言ひなはつてな、その先生は、九州へ渡らはつたが、さアそれからといふものは、誰れにしようか、彼れにしようか、いろいろに考へて、隊長はんにお願ひ申すが可からうと、嬢さんも申しますさかい、贅を書いて下はらんか、それを願ひ度いのでな」

高杉は意外の頼まれものと思つたが、武人の己れに頼む、主人の心掛けが面白い、と斯う考へて、
「宜しい、書いて遣はさう。その畫を、持つて參れ」
主人が、階下へ行つて、持つて來た畫を見ると、兒島高德が、櫻樹に詩を書いて居る、例の歴史畫であつた。それが又氣に入つたので、高杉は、頻りに見つめて居たが、

「さア、筆と墨の支度をしろ」
墨が擦れると、筆を採つて、スラ／＼と書き流した。武骨の人に似合はぬ、假名文字の美しくさ。畫の上と下へ、割つて書いた。主人は、怪々んな顔をして、見て居る。

筆を抛げて高杉は、盃の酒を、ぐツと呑み乾した。
「何うぢや、面白からう」
主人は、益々不思議の面色で、

「へー、これは歌のやうで、おますがな」
「左様ぢや」
「贅といふものは、生硬しい字を、天地へ行儀よく、並べて書いたものや、おまへんか」
「ハツハ、、、、貴様は、面白いことを言ふ奴ぢや。贅といふのは、その畫の心を現はすものぢやから、詩でも歌でも、または文でも、宜いのぢや」

「何うも、これは歌のやうで、おますな」

「その通り、歌ぢや」

「私しが讀みますと、都々逸のやうに思はれますが、左様や、おまへんか」

「そりやア、都々逸ぢや」

「エツ、都々逸てやすと」

主人も呆れて、高杉の顔を見つめたきり、しばしは言も出なかつた。

「何うぢや、好いぢやらう」

眞の闇夜に櫻を削り

赤い心を墨で書く

高杉は節面白う、諷つて見る。主人は、苦笑ひをして、畫を持つた儘ま、階下へ降りて仕舞つた。跡は大笑ひで、

その日は終つた。

半歳餘り過ぎて、高杉は、多くの人に惜しまれながら、この世を辭して、黄泉の旅路に急いだ。例の酒樓へ、九州歸りの學者先生が、また立寄つた。

「只今、お歸りておますか」

「これは御主人、昨年は御厄介でした。相變はず御繁昌てすな」

「之も皆様の御鼻負で、有難く存じやす」

そのうちに、酒肴が運ばれた。先生は、却々飲けると見えて、盃の數も重なつた。九州遍歴の珍談に、しばしは時刻が移つた。

「時に御主人、昨年拜見いたした、例の畫てすな、未だ御所持てせうか」

「へー、彼れも詰まらぬものになつて仕舞ひましてな、恰で、反古紙も同様で、おます」

「そりやア何ういふ次第ですか、實は彼の時に、一筆書かせて貰ひたかつたが、彼れ支けの名畫の賛、殊に勤王無二

の兒島高德に題するのですから、字句の洗練も爲ねばならず、九州を一巡するうちに、悉皆脱稿た譯なのですが、

若し其儘であるなら、書かせて貰ひ度いが、何うですか」

それを聞くと、主人は、泣ツ面をした。

「そんな理由なら、何故左様いふて下はらんか、可憐ら名畫を、反古にはしまへんがな」

「誰れかに、書いて貰つたのですか」

「その話は止めまはう、氣が悪うなる」

「兎に角、鳥渡見せて下さい」

強て望まれるので、無據く主人は、例の畫を持ち出した。鐵苦茶になつて居るのは、丸めて戸棚へ、投げ込んで

あつたからだ。

「酷いことになつて居る」

「全く酷いものでおます」

先生が、開いて見ると、高杉が、一氣に書いた假名文字の、巧まぬ所に味がある。殊に、その都々逸の幽雅にして、

深い意味の籠つて居ることは、何んな名文名詩を列ねても、これ以上には、いひ得ぬのである。

「東行とありますが、高杉先生の筆てすな」

「そんな、まア、都々逸を書きなはつたので、反古と同じ事になりましたな」

「私しに、之れを賣つて下さらんか」

「エツ、先生買ひなはる」

「二十金で、賣つて下さい」
主人は、目を圓くして、徐々畫を、片付けにかゝつた。
「賣つて下さらんか、反古紙の代金二十兩ぢや」
「何う致しまして、錢や金の沙汰では、おまへん」
學者先生も笑ひ出した。之れが、此樓の寶物になつたといふが、今では、山口縣下の某家に、秘藏されて居るとのことだ。

一一一

稻荷新地の大阪屋、離れの茶室には、高杉が、密かに來て居るのだ。月形の紹介で、西郷に、逢はうが爲めてあつた。長州人の薩人に對する、憎怨の念が、今も熾んであるから、西郷に逢ふて、人目にかゝると五月蠅から、其處で斯うした秘密の會見になつたのである。

闇い廊下傳ひに、今闇い茶室へ、はいつて來たのは、月形と西郷であつた。

「高杉どの、居らるゝか」

「やア、月形氏」

「彼の人をな」

西郷は、月形の後からはいつた。立ち上つた高杉と、闇中に手を握つた。

「下之關へは、何て來られたか」

「征長軍の一條で、奇兵隊の勇士が、幕府に應ぜぬ、と聞いて、月形、どのを、勞はしたのぢや」
「奇兵隊は、何うなりましたか」

「何うも、不可んさうぢや。これから俺、んは、長府へ、行く覺悟で御座る」

「貴下が行かれても、その甲斐はなからう、若し、奇兵隊が、貴下の注告を背かぬ時は、何と爲らるゝか」

「盡くす丈け盡くして、届かんものは止むを得ぬが、只だ、貴藩の爲めに、惜む迄ぢや」

談話は、之れから進まうとする、折柄、二階の連中が、西郷と月形の姿が、見えないといふて騒ぎ出した。仲居が

駈けて來て、之れを告げるので、止むを得ず、その儘ま別れた。この二人は、この時限り、後日にも逢つて居らぬ。

翌日、西郷は、長府へ、乗込んで來て、山縣に面會した。懇々諭したが、どうしても背かなかつた。西郷も、手摺

つて引上げた。

それから、すぐに廣島へ遣つて來て、尾張侯に拜謁した。五卿動座について、長州藩の状況を語つて、さらに今後

の策を講じて居る、所へ、毛利壹岐が、使者として來たとのことであるから、西郷は退席した。

少焉すると、尾張侯から呼ばれて、御前へ出た。

「只今、毛利壹岐が參つて、五卿動座の一條も、漸く落着して、公儀御沙汰に對しては、何等異存もなく服従いたす

旨、申來つたのぢや。其方の盡力も、此に始めて功が現はれた、といふものぢや」

「それは、何よりの儀で御座る。この上は、愈々穩便の御沙汰を、幾重にも願ひ上げまする」

長府では、西郷の歸つてから、毛利壹岐が、遣て來て、右京亮もろ共に、山縣始め奇兵隊の勇士を呼んで、段々の

説諭を加へた。

「五卿は動座しても、長州藩は、飽迄も御世話申すつもりである。この際丈け左様せんことには、事の落着がつかぬ

と、いふのであつた。

五卿も之を聞いて、

と、いふのであつた。

『我等のことから、藩の、内訌でも起つては、誠に相濟まん次第であるから、我等は、これより九州へ渡る』
 と、いひ出したので、話は漸く纏まつて、壹岐が、藩命を帯びて、その次第を、報告に來たのであつた。
 然る處、いよいよ解兵といふ段になつて、會津と桑名が、異論を唱へ出した。長州藩に對して、餘りに條件が輕過ぎる。殊に、眞實の服従であるか、何うか、その邊も判らないから、今しばらく解兵しては可くない、といふのであつた。この説は、大部勢力があつたけれど、西郷は、其時に、大氣焰を吐いて、解兵論を唱へたのである。
 『長州藩に對する、幕府の處置は、すべて苛酷に過ぎる。毛利家が降伏した、といふに、強ひて兵を解かぬ、となるならば、薩藩は、大に決する所がある』
 と、突ツ込んでの反對であつた。此に於て、尾張侯の英斷を以つて、解兵の事に決した。之れが元治元年十二月廿七日のこと、明けて慶應元年の正月四日には、廣島の總督本營の引上げが終つた。

長州再征の失敗

一
 當時の幕閣に、大勢の推移を、見る明あるものなく、無謀極る長州再征を、考へ出した一事は、哀れにも又滑稽千萬であつた。
 小笠原閣老の如き人はあつても、未だ幕閣を、脊負つて立つほどに、重味と實力なく、多數の意見には、必ならずも従つてゆく外なかつた。

今の事にしていへば、政務官程度の人物には、可成り前途の見えるものも居たが、階級制度の嚴立されて居た時代には、いかに人物が良くても、その意見は多く聞流しにされたもので、容易に幕閣を動かし得るものではなかつた。勝安房は、初めから再征論に反對して居たが、幕閣へ進言して、終には閉門を、申付けられる迄に、はげしく反對説を固執したほどであつた。その外にも、同じ論者はあつたが、みな斥けられてしまつた。
 尾張大納言は、京都へ歸つた。西郷も、之れと前後して入京した。
 然るに、尾張侯が、長州へ對する、處分の條件を、輕くし過ぎた、といつて、幕閣では、議論が沸騰した。尾張侯は、それが爲に、瀧濱を起して、領國へ歸つて仕舞つた。
 大目附の塚原但馬守は、幕閣の命を齎らして、長州へ使者として、急に行くことになつた。毛利父子に、江戸へ出

府せよ、といふことを傳へる爲めに、塚原は出かけたのであるが、その命令には、毛利が、容易に御請を爲るものではないから、若し何等かの口實を設けて、之れを拒んだら、其處で再征の理由は附くものと、考へて居たらしい。西郷も、此事を聞いて、愈々呆れ返へり、幕府の前途も、大概見越しがついたから、薩藩の活動は、將さに之れからである、と考へた。小松と大久保が、歸國する時であつたから、自分も同行することになつて、鹿兒島へ立ち歸つた。

久光は、餘り西郷を喜ばなかつたのであるが、九門の戰に就て、薩藩を、有利の立場に引付けたり、或は征長問題に關する、取扱ひを巧みにやつた事から、いくぶんか反感も和らいて來たのであつた。

長州再征の噂を聞いて、多少は憂慮して居たところへ、西郷の歸國と聞いて、早速之れを呼んだ。

「何時も、御健勝の體を拜しまして、大慶至極に存じまする」

「其方も健固で、喜ばしく思ふぞ。征長の一條に就いては、屢次の書面に依つて、概要は承知いたしました。其方の働きのほども、小松大久保よりの報知によつて、よく心得て居るが、聞く所に依れば、幕府は再征の計畫を致し居るとの事であるが、如何なる次第か」

「幕府の長州へ對しまする所爲は、實は奇怪至極の儀に存じまする。先般の征長御觸出しには、多少の理義も御座りましたが、尾張大納言様の御思召を以つて、御處置相濟みたる以上、毛利家へ再度の間罪は、甚だ謂れなき事て、却つて幕府の爲めに、惜む可き儀と存じ、一應は其不可を唱へましたれど、遂に御採用之れ無く、大目附塚原但馬守殿は、その御使者たることを承まはつて、既に長州へ下りましたるゆゑ、もはや是れ迄と存じて、歸國いたしましたる次第に御座りまする」

「幕府の頑冥にも困つたものぢやのう。長州藩が、我藩に對する宿意は、却々に深いといふ趣きも聞いて居るが、昨今の状況はどうぢや」

「文久の政變以來、未だに其反感は解けませぬが、此事は、御懸念には及びますまい。いづれ時機が來れば、必ず融和もいたしませう。只だ此上は、我藩の覺悟一つにて、天下の事は、定まるものと存じまする」

長州人の心を和らげて、之れと聯合し、幕府の不信に乗じて、一舉に天下の事を定むる、といふ大野心は、疾くも定まつて居たのだ。久光にも、固より其下心はあつたので、思はず膝を進めた。

「徳川の天下も、既に二百年を越えて居る、もう幕府の運も盡る頃ぢや」

「御賢慮の通り、兩三年の壽命で御座りませうか」

「而て、長州再征の儀は、如何相成らうか、其方の見込みを、聞き度い」

「再征に相成れば、幕府の運命も、それ迄の事、假し再征に相成らずとも、幕府の威信は、全く地に墮ちて、天下の禍亂は、足元から起きませうか、いづれにもせよ、幕府覆滅の時、近づいたものと考へまする」

「長州藩の反感を解くには、何といたしたものでか」

「その儀に就きましては、臨機處置を、御任せ下さるやう、願ひ上げまする」

「その儀は一任いたす」

久光と西郷が、斯う打解けての會談は、實に珍らしいことであつた。かくて薩長聯合の全權は、西郷の手に歸したのである。

一一

征長軍が、廣島を引上げたのは、慶應元年の正月四日であるが、其日には、長州に於て、意外の事變が、勃發して居たのであつた。高杉晋作が、一代の放れ技、一生を通じて、晴れの活動に、内外の耳目を、衝動せしめた大芝居が、此日を以て行はれたのであつた。壯烈極まる、奇兵隊の活躍に依つて、藩論一變に到る迄の概略を述べて、置く

事に爲る。

高杉は、筑前の博多に、僭置れて居たが、更に轉じて、平尾山の野村碧東尼方に、僭伏して居たのである。然るに、同志の者から、國元の事變を聞いて、憤慨の餘り、一身の危きを忘れて、俄に歸國したのであつた。三國老や參謀の切腹、さては五卿の動座、一つとして氣に喰はぬ事ばかりであつた。殊に、毛利父子の幽閉を見ては、いかんとも勘忍が仕切れなくなつた。先づ山縣狂介を、説く事にした。

長州藩には、種々の兵團があつて、それらに分立して居た。その中に於て、奇兵隊が、第一に名高く、近國の諸侯も、此隊の事は、よく知つて居たほどである。

奇兵隊には、一種の特長があつた。町人百姓といへども、武藝の心得が在つて、加盟し度い、といふものがあれば、隊長の見込で、加入を許してやる。その代り、苗字帯刀を許されるのだから、國事について志あるものだから、或は、氣を負ふて立つ男子は、喜んで此隊にはいつて来る。今て謂ふ、義勇兵の如きものであつた。初の隊長は、赤根武人であつたが、創立者の高杉と、行動を異にして、それが爲に斬られてしまつた。次ぎは太田市之進であつた。三度目は、山縣が隊長に推されて居たのだが、いづれも、高杉の前には、頭の上らぬものばかりであつた。高杉が山縣へ、相談した時は、隊士四百人と稱して居たが、實際は、其上に出て居たのである。

『この儘まに、傍觀して居ては、君公の御身の上也危く、尾張侯の取扱ひで済むか何うか、その邊も判らない。或は再征の御沙汰が、下るかも知れぬ。いづれにしても、毛利家は、幕府と調和の出来る筈はないのだから、此處で、一たび膝を屈しては、再び伸す事は六敷しい。寧ろ何の御沙汰も出ないうちに、藩論を定めて、幕府と、一戦を試みよう。藩政を握つて居るものが、恭順派であるから、先づ之れを倒して、藩政を、自分等の手に握るのが、第一に必要である。その手始として、下之關の政廳を、攻め取り、藩船を奪つて、海陸二た手に分れ、萩の城を一擧にして、我有にした上で、君公を迎へ、奉り、君命を以つて、恭順派を論し、之れに應せざるものは、片端から斬つて仕舞ふ。斯くして、國境には、砲臺を築き、壘壁をつくり、遠來の幕兵を、粉碎してしまへば、幕兵の大敗と聞いて、不平の諸藩は、一時に蜂起するに違ひない。その機會に乗じて、京都の寶權を、再び毛利家が握ることになつて、其處で、天下の事は定まるのだ』

と、恰も財布の物を、握るが如く、二人の相談は、決まつて仕舞つた。斯う述べて來ると、事は簡単に定まつたやうにも見えるが、その實は、却々に曲折があつて、さうなる迄には、幾多の難關もあつて、高杉の奔走と苦心は、實に容易ならぬものがあつた。

山縣は、例の大事取りで、初は承知しなかつたのである。それを説きつけて、奮起させるには骨も折れたが、いよいよ山縣が決心してから、各方面の状況も、頗る良くなつて來たのである。

三日から四日へかけては、非常な大雪であつて、吹く風さへ、荒れ狂ふて、關門海峡の波高くして、船を行るには甚だ危険であつた。然れども、高杉は、之れを追風と稱して、藩船の癸亥丸に、四百餘名の勇士を乗せ、風浪を冒して、海路から萩の城下へ迫つたのである。

同時に、狂介は、陸路を取つて、萩へ向つた。途中は、同志の來り加はるものも多く、萩へ着いた時には、七百人に上つて居た。國老の栗屋隼人は、城外に、三千人の兵を率ゐて、嚴重に陣を構へて居た。先着した高杉の兵と、幾度かの戦闘を経た所であつた。狂介の一隊が、着いたのを見ると、高杉の兵威も、又大に振ひ、此に雙方から抜さんで、栗屋の兵を討つた。狂介は、馬上に在つて、二間柄の片鎌槍を抜いて、突き立て、奮闘する。高杉は、一騎駈の鬪は、最も得意とする所であつたから、短兵急に、栗屋の旗下へ斬込んだ。この猛威に敵し難く、栗屋の兵は、見る／＼総崩れとなつた。

栗屋は、終に戦死を遂げて、城兵の多くは降伏した。高杉と山縣は、意氣昂然として、入城する。その得意や察するに餘りある。

幕府の兵が、廣島を引上げると、同時に、長州の方では、斯した事が行はれて、既に藩論は、以前の凡備恭順に、一變して居たのである。

それを知らずに、長州再征などを、夢みて居た、幕府の人々の間拔き加減が、まことに氣の毒であつた。高杉は、萩の城へはいつて、毛利父子を迎へた。井上や廣澤を、牢屋から救出して、降るものは皆な許して、何事も不問に附した。藩政の全權は、この連中の手に歸した。恭順派は、悉く閉息して、誰れ一人として、之れに反抗し得るものはなかつた。高杉の勢力は、恰も旭日の如く山口の新城は、幕命に依つて、破壊さる可き筈のものが、却つて修繕を加へられた。國境には、要害の地へ、砲臺を築き、幕兵を迎へる準備に、汲々として居る。所へ、使者として來たのが、例の塚原但馬守であつた。

塚原は、廣島まで來て、この情狀を聞いた。早速に間諜を入れて、實際を窺はせると、噂さよりは豪い事をやつて居る。毛利も、既に寺院を出かけて、萩城へ入り、長門守は、更に進んで、山口の城にはいつたのみならず、五卿も呼び迎へるやの風説がある。此狀態では、幕命を傳へた所で、服従す可き筈がない。寧ろ何事も言はずに引上げようとなつて、塚原は、何等の交渉もせずに、引返して來た。

幕府は、塚原の復命に聞いて、非常に憤つた。この上は、再征を企て、毛利を滅ぼすの外はない、となつて、諸侯へは、長州再征の沙汰を發した。然るに、諸侯は、大不平で、さらに幕命を奉じやう、としなかつた。此に於て、將軍御出馬といふ名で、諸侯を動かすことになつた。慶應元年の五月十六日、十四代將軍家茂公は、金の扇の馬印を押立て、東海道筋を、堂々として上つてゆく。將軍の出馬といふ名には、相當に議論も起り、容易に運びが定かなかつた。従つて、やうやく決定された後にも

不平や不満があつて、人心の統一は取れず、手順にも行違の事が多く、實に失態をつゞけたのであつた。けれども、將軍の出馬は、既に實現して、東海道を上つてゆくのであつたが、折柄の降雨つゞきに、先づ出鼻を挫かれた形であつた。蓮臺や、人の肩を越す、幕府時代の大井川、それが川留とあつては、將軍の御威勢を以てしても、何うするとも出来なかつた。空しく川留の閉くまでは、待つの外はないのである。富士川も、天龍川も、みな同じ事情で、これには一行も、頗る弱つたらしく、そんなことで、道中も存外に後れて、六月二十二日の着京、それから大阪城へ移つたのが、廿五日のことであつて、今度の征長總督は、紀伊中納言と決した。

當初、長州再征の議の起つた時に、尾張侯は、第一に不服で、國元へ歸つた。その他の諸侯にも、多く不平はあつたが、未だ公然の反對はなかつた。

當時の京都薩邸には、吉井幸助、税所長藏、篠原多一郎、中村半次郎、黒田了介等の諸人が、詰めて居た。他藩の人で、頻りに出入して居たのは、土州の中岡慎太郎と、阪本龍馬であつた。

中岡は、石川清之助とも稱して、陸援隊の隊長であつたが、それと相並んで、海援隊長の阪本龍馬、この兩雄が、薩藩へ、喰込んで居たのは、深い意味のある事であつた。

この連中が、段々相談の上で、長州再征は輕からぬことだ、再征が決する時は、即ち天下に一大變事の起る時であらう、と、其處に考へがついたので、何うしても、大久保、西郷、小松のうちを、上京せしめて置かなければ、萬一の場合に、差間を生ずるといふことになつて、兎に角、西郷へ、使者を差立てることを決した。それには却つて、他藩の方が宜い、といふので、中岡が、其役に當つた。斯うした事情から、中岡は、薩摩へ下つて、終に西郷を引張り出したのが、將軍家茂の江戸を發した日の前日、五月十五日であつた。西郷と中岡は、晝夜兼行で、京都へ乗込んだのが、その月の廿五日で、將軍の到着よりは、速く入京したのであつた。